

「台湾アミスとの日々」
— 1970年代のアミ人の暮らし —

馬渕 悟 (Satoru MABUCHI) *

1988年初稿

* satoru19480427@gmail.com

Table of Contents

前書き	3
1970年 第1回調査	4
1971年 第2回調査	31
1972年 第3回調査	50
1973年 第4回調査	62
1977年 結婚式	100
補遺1・アミスの母系制とその変遷過程	118
1. 母系制とは	118
2. クラスの離婚	122
補遺2・父の分骨	128
終わりに	134

前書き

私が台湾アミ族の調査を始めたのは1970年の8月、大学3年の時からである。前の年に、友人たちと探検部なるものを創設し、マレーシア領サラワクのイバン族調査に行ったのだが、何しろ基礎知識もなく、指導者もない素人集団なので、「行って帰った」だけというお粗末さだった。とは言え、ボルネオのジャングル地帯を歩きまわり、町からは遠く離れたイバン族のロングハウスに滞在し、生活を共にすることができたことが、将来もこんな事を続けたいという漠然とした夢を抱くきっかけになった。

そのため、帰国してから文化人類学という分野が、こういう社会に入る理由になるということで、遅まきながら少しずつ文化人類学を学ぶようになった。探検部の友人たちの何人かも、それぞれの体験を通じて、同様の考えをもったようで、いつの間にか勉強会のようなものも始めていた。

翌年になって、父（たまたま文化人類学の教授だった）が、そんな私たちを見て、興味があるなら夏の台湾調査に参加したらどうだと誘ってくれた。そこで、友人3人と参加することにした。これが、50年を超えるアミス（アミ人）の人々との交流のきっかけであった。

なお、ここに述べることは、1970年代のアミスの生活が中心である。現在のアミスは、日本人と変わらない生活を営んでおり、その意味では、この記録がアミスの文化史の一助になってくれれば幸いである。

なお、ここでは、アミス（'amis）の言葉を使用することとした。現在では、「族」の字は差別用語とされて使用できないからである。戦前からの分類では「アミ族」となっており、現在の台湾では「阿美族」と表記されているが、アミの人々は自分のことを「kako 'amis」（私はアミ）と表現するので、これを用いたい。

今一つ、私の調査方法について付け加えておく。当初は、通常の手法として話を聞きながらノートに書き込むというやり方をしていたが、3回目の後半からは、可能な限りノートを持ち出さないようにした。カメラやテープレコーダーなどの記録用具も使わないようにした。記録用具を出すと、どう

しても話し手が緊張してしまい、建前論や理想論ばかりになり、本音を話してくれないことに気づいたからである。そのため、その日の調査内容は、後でノートに記録する習慣が身についた。もともと、こうなると調査というほどのものではなくなる。どちらかという、世間話や噂話を聞いて、それを後でまとめるだけだ。毎晩の宴会の後に、酔眼朦朧としながら、その日聞いた話しを記録するのはかなりキツイが、寝ると忘れるので、その日の内に記録する習慣が身についた。翌日、そのノートを元に、聞き漏らしたことなどを話題にして聞き出すようにした。

写真については、特に最初の20年間は自費での調査だったので、フィルムを買うお金すら十分なかったし、安物のカメラしか使えなかった。携帯用の録音機やビデオの機材などは、大学に就職してからやっと購入できたが、その頃は記録すべきことがそれほどなかった。そのため、拙著においても写真が非常に少ないことをお断りしておく。

1970年 第1回調査

アミスとの出会い

1・アミスの村へ

1970年8月5日

台湾の東部の花蓮市へ向って朝6時のバスで出発した。花蓮市はアミスの住む地域の最北端にある地方都市である。台北市の雑踏を抜け、山道に入り、蘇澳という町までは舗装された二車線道路で快適だった。バスの車掌さんが、片言の日本語で、「休憩です。1時間」と教えてくれた。他の乗客の真似をして、集まってきた物売りから、チマキや腸詰めなどを買って昼食を食べた。しかし、1時間経ってもバスは出発しない。さっきの車掌さんに、まだですかと日本語でたずねたが、通じない。しばらくすると、反対方向からバスがやってきて、乗客が降りてきた。すると、車掌さんが、出発だというように合図してくれた。

そこを過ぎて再び山道に入るや、状況が一変した。海沿いの断崖にへば

りつくような無舗装の狭い道を走るのだ。一車線分の幅があるかないかの狭さだ。つまり、時間による一方通行なのだ。蘇澳で反対側から来るバスを待っていたのだ。

それにしてもスリル満点の道である。左手は200メートルはありそうな断崖絶壁、右手は頭上にせり出す断崖で空も見えない。ガードレールもない。カーブでは、バスの後部が断崖の外に振れている。たまに、小石が落ちて来てバスの屋根に当たる音がする。

台北でバスに乗るときに、運転席やあちこちの窓にヒビが入っていたので不審に思ったが、これでヒビの原因がわかった。

こういうときは、焦っても仕方がない。運転手に全てお任せで絶景を楽しむだけ。

結局、何ごともなく夕方6時には花蓮市に到着。さすがにホッとした。夜、「阿美族文化村」なる観光施設に行った。アミスの踊りや歌を見せる所である。バンブーダンスなど、怪しげな演し物もあったが、唯一人のアミスの男性のかっこよさにビックリ。アミスは歌がうまいというのも印象的だった。

8月6日

花蓮からは、バスで東海岸沿いにある樟原という村へ向った。前日のバスの旅程の後半と同様、未舗装の砂利道だが、海岸沿いなのでバンバン飛ばす。居眠りしていて、頭にコブができた。3時間弱で、静浦という村に着き、ここでバスを乗り換えてさらに南下する。この辺りに来ると、海岸段丘上に広い田んぼが広がっているの見える。田植えの時期らしく、水がはっており、水牛に犁を引かせているの見える。家屋は、屋根も壁も茅葺きのものが多い。いよいよアミスの村だという実感が湧いてきた。



（水牛で耕作）



（水浴びしている水牛）

静浦からは、小一時間で樟原に着いた。樟原のバス停を降りると、20軒ほどの小さな店が両側に並んでおり、日用品や食料の購入には不自由しないなと思った。

樟原では、台湾大学の考古隊と一緒にいった。考古隊は宋文薰先生が率いる考古学の調査隊で、樟原の南4kmほどにある八仙洞というところの一万年前と言われる旧石器時代の遺跡の調査を行っていた。このグループには、アメリカ人やオーストリア人等も参加しており、そこに日本人のグループが加わるようになった。考古隊が泊まっているのは、田明来という本島人（註2）の商店で、私たちは、村の集会所を借りて宿泊することとなった。

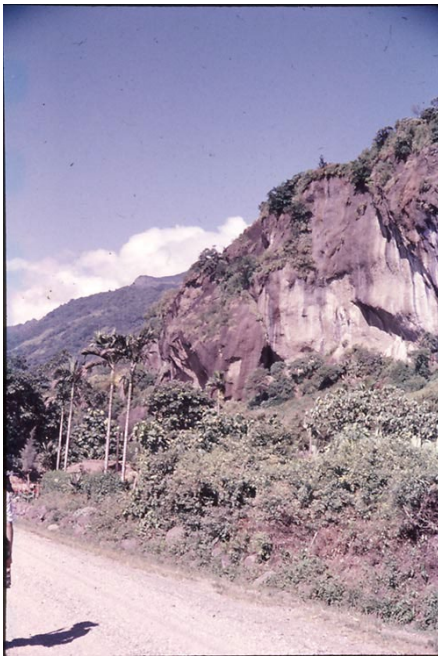
その夜は、ささやかながら考古隊が我々の歓迎会を開いてくれた。台湾式の宴会、飲酒方式は初めてだ。まずは、会食者全員で乾杯するのは同じだが、その後は、一人ひとり名指して乾杯する。それも、コップを両手で捧げて相手の名前を呼び、相手がコップを捧げたら一気に飲み干し、コップの底を見せ合って、文字通り乾杯したことを示し合い、御礼を言い合って終わり。特に、相手が目上の場合は、一々立ってしなければならない。一人と乾杯が終わると、たいがい次の人が名指してきて、また同じ事を繰り返す。受けてばかりではまずいので、こちらからも相手を指名もしなければならない。飲めないときは、コップを左手で覆って、謝絶する。

タバコを吸うときも、自分一人で吸ってはならない。必ず同席の人全員に勧める。勧められても吸わない場合は、左の手の平で右手のこぶしを覆

い、謝絶する。

と言うわけで、結構気を遣わなければならない。特に私たちのような下っ端は、目上の人に飲ませ、酌もしなければならないので気が抜けない。おまけに、台湾では学生と先生の関係が厳しい。先生が何か指示すると、学生は直立不動の姿勢で聞き、終わると元気よく大声で返事して最敬礼する。坐ったままと話を聞く私らとは大違いだ。台湾には徴兵制度があるので、軍隊経験があるのだろうと、仲間と話して納得した。

ということで、緊張しつつもそれなりに楽しんでいると、隣の家が騒がしい。大きな話し声ばかりか、聞いた覚えのない歌声もする。どうやら隣でも宴会をしているらしい。



(八仙洞)



(発掘現場と宋先生)

宋先生にたずねると、隣はアミスの家で「何かあつて酒を飲んでいるでしょう。まあ、何もなくても飲む連中ですがね」と手厳しい。垣根越しに覗こうとすると、酒を飲むと乱暴になるから止めなさいと注意された。ところが、見てみると私たちの仲間の一人が、いつの間に抜け出したのか混ざっていっしょに飲んでいる。

宋先生は考古学だから、石器や土器などの物質が研究対象だが、私たちはアミスの調査に来たのだから、多少乱暴だろうとも参加したくてたまらない。そこで、参加している仲間を連れ帰るという口実で、隣の家に入って行った。

すると、流暢な日本語で、「あなたも、日本人ですか」「なつかしいね」「さあさあ、遠慮しないで、飲みましょう」と、あっという間に席が用意され、大歓迎してくれた。そこからは、最前と同じ様な乾杯合戦が始まったが、こちらは気取り気なし。ひたすら楽しい。それに強い。

酒は、「ミーチュー（米酒）」という泡盛に似た米の焼酎で、これを200ccのコップに満杯に入れ、乾杯を繰り返す。さらには、ビンロウというものも勧められた。これは、ビンロウ椰子の楕円形の実で、消石灰をカズラの葉に塗りつけて実を包んで嘔むという嗜好品である。嘔むと唾液と化学反応を起こして、赤い汁がでる。嘔み始めの時は、口にたまった汁をその辺に吐きだす。これが赤いので一見すると血を吐いているように見える。さらに言うと、それなりに興奮作用があるらしく、酒を飲みながら嘔むと、かなり効く。ちなみに、南太平洋からマダガスカル、北は台湾まで分布する嗜好品である。



（ビンロウ樹）



（ビンロウの実、カズラの葉、石灰）

酒と、ビンロウ攻めにあいながらも、どこから来たのか、何しに来たのかなど、色々話しかけてくる。それもほとんど日本人と変わらない日本語である。参加していたのはほとんどが40歳以上の男性だったが、「私は日本教育

ですから」と誇らしげに言う。

台湾は、1895年から1945年まで日本の植民地であったので、小学校から中学校までは日本語で教育されていたらしい。この日本植民地時代の話しは、それから何度となく聞かされることになった。

日本語がうまいだけでなく、次から次に歌う歌も日本の歌である。それも大半が私たちの知らない昔の歌や軍歌だ。人気があったのは、「骨まで愛して」という歌で、これを誰かが歌うと、回りで見ている若い人までが歌い出す。アミスの歌も聞きたいというと、何曲かは歌ってくれたが、どうやら歌詞があると言うより、ハヤシだけのようであった。「ヒンヒン、ヒンナロヒンヒンヒン」の様な感じで、これを際限なく繰り返している。

いずれにせよ、ミイラ取りがミイラになり、帰ったのは何時だかも覚えていない。

8月7日

朝は、昨夜の酒がかなり残っていたが、今日からは食堂で食べることになっているので、食堂に行った。卵焼き（両面焼き）、魚の味噌汁、豚肉とピーマンの炒め物、漬物にご飯という、日本とあまり変わらない朝食を用意してくれていた。味付けは違うが、美味しい。ちなみに、昼食には鳥肉、豚肉、魚のから揚げなど、夜は刺し身も付いていた。これで、4人で1日120元（当時のレートで約1200円）だった。日本の物価の5分の1程度だろうか。ともかく安い。ところが、1日目が終わったときに店の主人が、120元では多すぎるからと20元返すと言い出した。こちらとしては、安すぎると思っているので、断ったが納得してくれない。結局サイダーの大瓶をプラスすることで、話しが着いた。簡易水道はあるのだが、安全性に問題があるので、生水は飲まないように言われていたからだ。台湾のビン入りや缶入りの飲料は甘すぎるか、独特の漢方の味がして慣れない私たちには飲みにくい。黒松というメーカーのサイダーだけは唯一私たちの口に合ったからだ。

ともかく、朝食を終えて、その後は父のアミスの聞き取り調査に同行した。しかし、父はアミ語で会話しているし、そもそもがこれまでの調査の補足

調査だから、私たち素人にはチンプンカンプンである。古き良き徒弟制度の時代だから、解説もしてくれない。そうすると、私たちはせいぜい写真を取る程度しかすることがなくなり、暇を持てあましてしまった。

要するに、事前の勉強不足である。せめて片言のアミ語でもわかっていればまだしも、全く理解できないのだから仕方ない。ほろ苦いアミ調査デビューだった。

8月9日

夕方、父が待っていたアミスの友人がやって来た。父によると、私たちが樟原に着いた日に間に合わせて着く約束だったが、そこはアミス・タイムで適当である。



（後列左端が大高さん、右端が父、前列左端が私）

年の頃は70歳位だろうか。日本の植民地時代は小学校の教員をしていたという。現在は台湾式の高 光邦という名前だが、日本名を大高 正一といった。私が挨拶すると、「おー、サトルか」といやに馴れ馴れしい。その夜、酒を飲みながら話してくれたが、父とは父が学生時代からの交流があり、自称義兄弟だという。父と知り合ったきっかけは、父が大高さんの村の近くのブヌン人の調査から帰った時だという。当時、日本の植民地政府は、原住民を平地人と山地人に区分し、境界には電流を通した鉄条網を張り巡らしていた

そうだ(1970年当時も鉄条網はなかったが、立ち入りは制限されていた)。その鉄条網の中に入ると、数ヶ月に一回しか出入りできなかったという。父は、ブヌンの村に入って帰りそびれ、やっと大高さんが住む池上にたどり着いたが、空腹と疲れで道ばたに倒れ込んでいたそうである。それを大高さんが見つけて自分の家に連れて帰り、ごちそうして酒を飲ませたことから、義兄弟になったという。



(1935年の父の調査の写真、左端がイラオ、中央が愛子さん、右端が父)

この話の信憑性はかなり怪しいが、横で聞いていた父は、にやにやするだけだった。このような、疑似の親族関係は、日本でも地方に行くとよく見られる。アミスに限らず、台湾の人たちも同様である。後に、私は息子になったり、兄になったり、父親になったりした。

8月10日

今日は、樟原からさらに南にある、宜湾というアミスの村へ調査に行く。樟原からバスで小一時間ほどの村である。

樟原よりもさらにさびれた感じの村である。村に着くと、バス停のそばにある商店に入った。商店はここ1軒だけのような。この商店の主が、私たち樟原で世話になっている田さんのお兄さんと言うことで、まず情報を仕入れに入ったのである。田さんのお兄さんも元教員だという温厚な感じの人だった。アミスの文化の調査だと言うと、アミスの代表格の青山さんという言う人を呼んでくれた。



(宜湾での調査)

青山さんは、中国名を徐田作と言い、アミスの名はアサラットだそうだ。50歳代の長身のおじさんである。この人も日本時代に公務員だったというから、日本の教育を受けている。実際、幅広い知識を持っており、政治経済から猿談まで、実によく舌が回る。ただ、アミスの文化については、あまり知らないと言う。日本の教育の中で、アミスの文化は遅れていると信じ込まされたのだろう。そこで、青山さんの実家に行って、青山さんの母親や老人達の話を聞くことになった。アミスは、本来婿入り婚であり、青山さんも妻の家に住んでいるが、こういうときは実家に頼るらしい。

この村も、戦前に父が調査したことがあるため、やはり補足調査であったが、大高さんが私たちに話の内容を解説してくれるので、前よりは理解しやすかったが、話しが飛ぶのでついて行けるほどではなかった。

その日は、そのまま青山さんの実家に泊まることになった。6人も急に押しかけて泊まるなど、日本では考えられないが、父も大高さんも当たり前

の様にしている。一応バスは走っているが、当時は一日3本程度なので、帰るに帰れないかったこともある。まして戦前は、バスさえほとんど走っていないかったろうから、他の村へ行ったら日帰りというわけにはいかないのが当たり前だったのだろう。

夕方になると、田さんのお兄さんが夕食に来るように誘いに来てくれたが、青山さんが、この家に泊まるのだからここで夕食をすと言いはり、田さんには用意した料理と酒を持ってくるように言っていた。おかげで青山さんの実家が用意した料理と田さんの料理、おまけに豊富な酒までそろうことになった。ちなみに、田さんと青山さんの会話は日本語なので、私たちにもわかる。田さんはアミの言葉を話せず、青山さんは中国語を話せないで、共通語として日本語を使っているのである。付け加えると、青山さんと大高さんも日本語で会話している。同じアミスであっても大高さんは内陸の秀姑巒アミ、青山さんは海岸アミであって、同じアミ語であっても地域差があるので、日本語の方が通じやすいという。

誘いに来た田さんが帰ると、「いつも、私らアミスから搾り取っているのだから、少しくらいかまわん」と青山さんが言う。アミスと本島人の関係が、何となく見えてくるような言葉である。

とは言え、夕食には田さんも参加し、青山さんの親戚や近所のアミスたちも集まり、30人ほどの大宴会になった。先日と同様、「日本人は懐かしい」「よくこんなところまで来てくれました」「戦争が終わってから、初めて日本人に会えた」など、皆が日本語で話しかけてきて、大歓迎である。私たちの感覚では、日本の植民地支配を受けた人たちであるから、日本を嫌っていると思えるのだが、そんな様子は全くない。むしろ「日本人は正直だ。真面目だ」などと言う人ばかりである。

食卓に坐つての例の乾杯合戦が一通り終わると、誰ともなく、歌い出す。歌がしばらく続くと、踊りましょうと踊りが始まった。花蓮の観光村で見た一人おきに手を交叉させて繋ぎ、アミスの歌にあわせて輪になって踊る。踊っていれば乾杯合戦を逃れられるかと思ったらそうは行かない。酒瓶とコップをもった一人が、踊りの輪に近づいて、一人ひとりに酒を注ぐ。これも飲み干さないと、継ぎ足して再度勧められるというより飲み干すように強要される。

父や大高さん、青山さんたちは、踊りの輪の真ん中に座って、のんびりと談笑している。酒も好きなように飲んでいる。その時の父の心底くつろいでいる様子には驚いた。酒好きの父は知っているが、これほど無警戒で打ち解けた様子を見たのは初めてだった。

8月12日

父と大高さんは、山地に居住するタイヤルやブヌンの調査に行くと言って、出発してしまった。前にも述べたが、日本の統治時代から山地に住む先住民族と、平地に住む先住民族は区別されてきた。表向きは、山地の先住民族は遅れているから保護するためとなっているが、おそらくは先住民族同士を分断することで対立させ、反乱を防止するための政策だろう。このため、山地に入るには入山許可を役所でもらわねばならず、私たち学生ではもらえないため、父と大高さんだけが出かけていったのである。

さて、残された私たちにはどうすれば良いのか等の指示は全くないままである。私たち4人の内2人は、一昨日の宜湾での宴会の二日酔いからまだ立ち上がる気力もない。そこで、もう一人と私で相談し、宜湾へ行ってみようということになった。

一昨日は父の調査だったので、村の中をほとんど見ていなかったが、水牛が牽いていた木造の荷車の車輪が、木を丸く車輪状に繋ぎ合わせたものだったり、茅葺きの小屋などがあり、いかにも古いものが残っていそうだったからだ。

ということで、10時頃のバスに乗って二人で宜湾に向った。父の調査の邪魔をすることになるので、田さんや青山さんを頼るわけにはいかない。かと言って、当てがあるわけではないし、一昨日の宴会で親しくなった人もいるが、記憶が定かではない。

どうしたらよいだろうかと思案しつつ宜湾に入ると、丘の上に教会が見えた。もしかすると欧米人の神父がいて、英語が通じるかも知れないと思って、とりあえず歩き出した。

教会へ行くと、スイス人の神父さんが上半身裸で畑を耕していたが、私たちが声をかけると、「おー、日本人か」とかなり訛りのある日本語で対応してくれた。十年ほど前まで、日本の青森の教会にいたという。これはラッキーだと思ったが、訛りが強すぎてあまり日本語が通じない。

そうこうしている内に、色の黒い水牛のようにガッチリした50歳前後の男性がやってきた。私たちを見ると、「日本人ですか」と丁寧な口調で尋ねてきた。「はい、そうです」と返事をする、「それなら、こっちです」と人の手を握りしめて引っぱる。慌てて荷物を持ってついていくと、「さあ、こっちこっち」とさかんに急かす。

何故、日本人ならこっちなのか、彼が誰なのかなど、一切わからないまま教会の裏手の道を降りて行くと、茅葺きの小さな家に着いた。すると、その男性が家の中に向かって「コエ！日本人が来ましたよ」と叫んだ。すると、40歳くらいのおばさんが飛びだしてきて、「日本人ですか？そうですか。さあさあ、遠慮しないでお入りなさい」とやはり手を引っぱる。

身をかがめるようにして小さな入口の中に入ると、6畳ほどの文字通り土の土間があり、小さな机と簡単な椅子が2つ置いてある。片隅には、手作りらしい寝台らしきものがあり、土間の左右には、少し高い床の部屋が見える。

おばさんも、おじさんもひたすら笑顔である。「さあさあ、ここに坐りなさい」と寝台らしきものを指さすので、とりあえず坐った。しばらくはおばさんが矢継ぎ早の質問を浴びせてくる。日本のどこから来たのか、親は誰か、何しに来たのか、一昨日来た日本人なのか等々である。それに答えている間に、おじさんは酒瓶を持ち出してきて、「さあ、何もないけれど、台湾のお茶ですから」と米酒を注いでくれた。「日本の清酒は本当に美味しい。台湾にはそんなものはないから、これで我慢して下さい」という。

アミスの飲み方の一つが、茶わん酒である。それも一人に一つの茶わんではなく、酌をする人が茶わんに注いで回る方式だ。これが、一番困る。飲む側のペースではなく、酌をする人のペースで飲まなければならないからだ。酒を飲みながらも、質問攻めはそれからも続く。とにかく日本のことが知りたくてたまらない様子だ。

「今上陛下はお元気ですか」と聞かれたが、「今上陛下」の意味がわからない。多分天皇のことだと思って、元気ですと答えると、「それは良かった」言う。東京は大きな町なのか、日本は世界で何番目になっているのかなど、矢継ぎ早に質問してくる。

合間を見計らって何とかこちらも質問して、今現在、いったい誰に世話になっているかを聞き出すことができた。

おばさんは昭和元年生まれで45歳、植民地時代に小学校に通っていたが、その時の日本人の先生が大好きだったこと。先生の当番をやっていたこと（いっしょに生活する小間使的な仕事らしい）、先生は厳しいが優しくしたことなどである。その辺りでようやく私たちも質問する余裕が出てきた。おばさんは日本名山田 光子、アミス名はウスイ、おじさんは51歳、日本名浜村 一郎、アミス名アヒナ。高砂義勇隊に参加し、ポートモレスビーの近くまで行ったが、そこで撤退して生き残ったという。数年前酔っ払って橋から落ち大けがをしたために、まだ体が良く動かないので、教会の神父のところでは炊事係をしているという。農家だが分家したために田んぼが狭く、それだけでは暮らしがキツイという。それでも、長男は台北の師範大学に行っており、次男は船員で遠洋航海に出ている。三男は中学生、長女のパナイ、四男のフラウは小学生だという。



（ウスイ家の前で：左からアヒナ、パナイ、ブタル、フラウ、ウスイ、ドギ）

そんな話しをしている内に、ようやく本題に入り、物知りの年寄りはいないかたずねると、うちのお祖父さんが良いだろうと、トロという老人の家に案内してくれた。トロは推定90歳～100歳の間(生まれた年を覚えていないため)で、村で一番歳を取っているという。この年齢の人は、日本語は話せないで、ウスイが通訳をしてくれる。

さて、いよいよ念願の文化人類学調査の開始だ。とは思うのだが、いざとなるとどうしてよいか見当もつかない。父の調査を見ていたけれど、相手はプロでこちらは目的も何もない。しかし、今さら引込みがつかないから、とりあえず系譜を聞くことにした。ところが、これがそう簡単ではない。トロの祖母あたりまでははっきりしているのだが、それ以上は覚えていない。まあ、私自身、祖父母の名前は覚えているが、祖父母の兄弟だの、それ以上の世代などはまったく知らないのだから、当然と言えば当然である。すぐに話題が尽きてしまったので、トロが宜湾に来た頃の様子、村の政治、病気の治療法、はては父の聞いていた臼や舟の事まで聞いて見た。何故、臼と舟のことをいっしょに聞くのかはわからないが、とにかく真似をしてみた。ということで、後でこの時のノートを見ると、何の脈絡もなく支離滅裂である。

それでも、ウスイやアヒナのアドバイスも受けながら、何とか人生初めての文化人類学的調査の真似事ができた。ただ、帰りのバスの中では、同行した友人とほとんど話しをしなかった。二人ともあまりの無様さに、しょげかえっていた。

8月13日

昨日の惨めな結果も、一晩明ければそれほど気にならなくなる。何しろ素人なのだからと開き直りが出てくる。ということで、この日も宜湾に行くことにした。

バスで宜湾に着くと、真っ直ぐウスイの家に行った。昨日のトロの調査では、トロよりもウスイの方が記憶もしっかりしており、色々なことを知っていることがわかったので、今日はウスイを中心に調査しようと考えたからだ。

ウスイの家に着くと、大喜びで迎えてくれた。今日は、挨拶代わりの酒は

断り、すぐに調査を始めた。ウスイの系譜からはじまり、アミスの親族の呼び方、親族の範囲、粟や稲に關係する農耕儀礼、フィナオランという青年団のような男性の組織、男子年齢階梯組織などについて、順調に聞き取りすることができた。台湾に来る前に、一応アミスについては報告書などを読んでいるので、昨日よりもうまく進められた。というより、ウスイの話しがうまいのだ。知っていることと知らない事、忘れたことをきちんと区別して話してくれるし、「こんなこともあるよ」と、こちらが聞き忘れたことまで話してくれる。トロは、親切心からか忘れたことや、知らない事まで無理に答えてくれようとしていたが、ウスイの話しは要領が良い。

昼近くになったので、樟原の食堂に頼んで造ってもらった弁当を食べようとする、いつの間にかアヒナが昼食を用意してくれていた。さすがに恐縮したが、せっかく用意してくれているので、ありがたくいただくことにした。酒まで用意されていて、昨日と同様に相手のペースで飲まされた。しかも、紹興酒という米酒の4倍も高い酒だ。

食事が終わると、昼寝しなさいと言う。これは助かった。台湾は暑いので、朝早く行動して、昼寝すると調子が良い。宜湾のアミスは、一番鶏で起きて炊事をし、田畑に出かけるという。つまり3時頃から活動するのであるから、昼寝は必要なのだ。

昼寝から起きてからは、民具や民族衣装の写真を撮らせてもらった。昼の酒が効いていて、質問する元気がなかったからである。民族衣装をだしてもらって撮影していると、近所の70歳くらいのおばあさんとウスイの妹だというおばあさんが参加してきた。おばあさんはロゲと言う名で、日本語は全然駄目だが、そんなことはお構いなしに、盛んにアミ語で話しかけてきては大笑いしている。ともかく陽気なおばあさんだ。ウスイの妹は、オクサンと言う名前だ。日本人が「奥さん、奥さん」と女性に言っていたので、名前だと勘違いしたという。ちなみに、ボウヤだのアニキだのという名前もあるという。

8月14日

前日宜湾に行っている間に、父と大高さんが帰っていたので、今日から

は樟原を拠点とするアミスの調査を終えて、プユマやパイワンの他の地域を回ることになった。

まず、台東市に近い利家村に向った。ここはプユマの村で、村のリーダーの家に泊まることになった。ここを拠点に、檳榔村、卑南社などを回り、さらにパイワンの太麻里村も訪問した。どの村も、戦前父が調査に入っており、アミス同様、久しぶりに日本人が来たと歓迎してくれた。要するに、どこへ行っても、宴会である。どこも農家なので、豚と鶏が犠牲になってごちそうになった。大高さんによると、昔であれば水牛が殺されるところだが、今は水牛も少なくなったから豚しかごちそうできないのだろうとのことだった。アミスと同様、40歳以上の人は、きれいな日本語を話し、日本の植民地時代を懐かしんでいた。アミスでも感じたが、ここらへんがよく理解できない。支配され搾取されたはずなのに、何故日本への反感がないのだろうか。ともかく、ひたすら歓迎してくれた。



(プユマのブランコ)



(パイワンの民族衣装)

また、大高さんも顔が広く、どこへ行っても「カキタアン」と呼ばれて丁重にもてなされていた。カキタアンというのは、日本語では「頭目」と訳されているが、村や地域のリーダーを指す言葉である。ある村のリーダーが、大高さんは台湾の3大頭目の一人だったと言っていた。飄々とした風貌の大高さ

んだが、確かに貫禄はある。ところが、当の大高さんは、私たちがプユマやパイワンの人の家に泊まるのに、毎日台東市の旅館に泊るために戻って行く。訳を聞くと、「プユマもパイワンも臭い」と一言。丁重にもてなされ、尊敬されており、抱き合って再会を喜んではいるが、内心では部族間の対立が根深く残っているのだろう。かつては、首狩りをしあったり、支配・被支配の関係もあったにせよ、すでに100年近く前の話だと思うのだが、そう簡単には行かないようだ。

とは言え、プユマやパイワンについては、まったく事前の勉強をしてこなかったもので、面白くはあったが観光旅行のようなものになっていた。

8月19日

ようやく、父のプユマやパイワンの調査が一段落して、台東市から汽車で池上に向った。日本の植民地時代に建設されたという鉄道で、おもちゃのような年代物の列車に揺られて1時間程で池上に着いた。台東市も大都會だが通過しただけで印象がなく、田舎暮らしが続いた後なので、池上はいかにも町という感じである。駅前から、商店街が続いている。

駅から徒歩で10分ほど歩いて商店街が終わった辺りに、大高さんの生家があり、これからはそこを拠点に調査することになっている。

間口8間ほどもある豪邸である。広い前庭（モミ干し場）と、菜園、池まである。すでに私たちが来ることは知らされていたらしく、数人の人が外まで出迎えてくれた。まずは、荷物を部屋に入れ、汗を洗うと、玄関を入ったところにある20畳ほどの大広間で、休む間もなく宴会である。豪華な料理が用意されていて、酒も早速始まった。

この家の当主は、中国名高 光雄、日本名大高 光雄、ただしだれもが金太郎と呼んでいる。名前の通り、豪快で快活、話もうまい。奥さんは愛子さん。優しくてよく気がつく人だ。二人とも40歳後半で、養女の信子さんと高校生と中学生の兄弟がいる。

これは後で知ったことだが、愛子さんは池上の大きな池の東の山沿いにあるトアピという村の頭目の娘だった。戦前、大高正一さんのすぐ下の弟のイラオと結婚したが、戦死してしまったために、復員した弟の光雄と再婚したという。



(大高一族：前列左から2番目が金太郎さん)

100年ほど前に当時トアピ村に住んでいた大高家の祖先が、トアピの頭目たちと折り合いが悪かったので仲間を率いて現在のトアポに移住してきた。そのため、両村は争いが絶えなかったため、トアピ村の頭目の娘とトアポ村の頭目の息子を結婚させ、和解が成立したらしい。そのため、イラオが死んでも、愛子さんは実家に帰ることが難しかったと言う。

とは言え、そのようないきさつとは無関係に、見ていて微笑ましい夫婦である。あえて言えば、腕白な金太郎さんを、温厚な愛子さんが見守っているという構図だろうか。

また、本来は長兄である大高正一さんがこの家の当主だったのだが、戦後、精米所をやったり、沖縄との密貿易をやって失敗し、弟の金太郎さんに家督を譲って山で自給自足の生活をしているという。この家の内情を聞くだけで、充分面白い。

昼食がてらの宴会が一段落すると、いつものようにお昼寝の時間である。散々飲み食いしたので、ありがたく熟睡させてもらった。

夕方目を覚ますと、外が騒がしい。覗いてみると前庭にはおじさんたちが数十人坐っており、裏の炊事場にも20人ほどのおばさんや若い女の人が立ち働いている。

大広間に行くと、金太郎さんが10数人の老人達と話していたので、「今日は、何かのお祭りですか」と尋ねてみた。「大頭目の正一と、兄貴の馬淵先生が久しぶりに帰ってきた。しかも日本人の若者を連れてきた。日本人を見るのは戦争が終わって25年ぶりだから、皆なつかしくて集まってきた」という。愛子さんの実家のトアピ村からも頭目以下、主立った人たちが駆けつけたという。そうこうしている内に、大広間には10人は座れる大きな中華テーブルが6つ並べられた。私たちと年長の男性はここに座り宴会が始まった。外を見ると、やや若い男性やおばさんたちは前庭にいくつかの輪になってしゃがんで、鍋や大きなどんぶりから手づかみで食べている。

まずは、金太郎さんがアミ語で挨拶をした。意味はわからないが、身振り手振りも交えた迫力ある話し方だ。これに対して正一さんが返礼の挨拶をし、さらに父が簡単に挨拶して、乾杯。

今回はとにかく人数が多い。例の名指しの乾杯でも、同じテーブルの人だけではない。他のテーブルの人でも次から次にやってきて乾杯していく。私たち学生の席には、7、8人が並んで順番を待っている。とにかく皆一様に「なつかしいね。よく来たね」と歓迎の言葉を述べてくれる。これは、身が保たないと思っていると、先ほどから心配そうに見ていた愛子さんが、金太郎さんになにやら耳打ちした。すると、金太郎さんが、「さあ、日本の若い者に歌を聞かせてやろう。踊りも見せないだ。せっかく来たのだから、本当のアミスを見せてやろう」と、声を上げると、「それではまず、この金太郎が歌います」と、歌い出した。

「ホリトゥノタムラーウ、アノーマリター」と、これまで聞いていたアミスの囃子詞だけではない歌詞がある歌だ。しかし、よく聞いてみると、なにやら日本の歌に似ている。確か「伊豆の山々、月青く」というような歌だ。私もその程度しか知らない古い歌である。金太郎さんは声が良く通る。強弱を付けた哀愁あふれる歌い方である。

このため、しばらくは座が落ち着いたが、しばらくすると、他の老人達が次々に歌い出した。「日本の歌をうたいます」と直立不動の姿勢で軍歌を歌う人もいれば、日本の演歌を歌う人もある。私が、金太郎さんに「アミスの歌を

聞きたい」と頼むと、ようやくアミスの歌が始まった。すると金太郎さんが先頭に立って踊り出した。例の一人おきに手を交叉させて繋ぐ踊りである。いつの間にか前庭の真ん中にかがり火が燃やされており、その回りをぐるぐる回りながら踊るのである。

最初は10人ほどだったが、あっという間に40人ほどの列になった。合間にいつものようにお酌係が酒を注いで回るが、順番待ちの行列相手に乾杯するよりは楽だ。しかし、飲んで踊るのもかなりキツイ。大高さんと父は、いつものようにゆつたりと籐椅子にすわり、二人で悠然と飲んでいる。

踊っていて気づいたのだが、この場にいるのは金太郎さんと同年代前後かそれ以上の人ばかりだ。若い人はいないのだろうか。そう思って、金太郎さんに尋ねると、「日本人は珍しいから、みんな集まって来て見ているさ」と笑っている。街灯も無く、灯りは中央のかがり火だけなので前庭の外は見えないが、目を凝らすと確かに人の気配がするし、若い女の子らしいひそひそ話しや、クスクス笑い声もする。どうやら、家の周りの暗がりに若者たちが見物に来ているらしい。



(踊り)

しばらく踊っていると、金太郎さんも疲れたらしく、「せっかく日本の青年が来たのだから、若い者にいっしょに踊らせよう」と行って、外に出て行った。すると暗がりからキャーキャーと悲鳴が聞こえる。しばらくすると、金太郎さんに引きずられるようにして、5,6人の女の子が連れてこられた。若い

と言っても、今度は若すぎる。どう見ても中学生くらいだ。それでも、回りの人たちは、やんやの喝采である。何となく、旅回りの一座になった気分だった。

12時近くになると、さすがに疲れたのか、一人減り二人減りといつのまにか人の数も減ってきた。愛子さんがやってきて、「さあさあ、疲れたでしょ。もう休みなさい」と言って、家の前に椅子を並べてくれた。やっと一息入れることができた。真夏とは言え、さすがにこの時間になると涼しい。満点の星空に、すらりとした檳榔樹の影が浮かんでいる。

すると、一人のおばさんが私の前にやってきて、「サトルさん、おばさんが歌をうたってあげます」と、やおら歌い出した。アミ語の哀調を帯びた歌であった。歌詞はわからないが、私に話しかけていることだけはわかった。すると金太郎さんが、「おい、おい、そうか。これは驚いたなあ」と慌てだした。大高さんも「ほー」と、声を上げている。父は、大口を開けて笑っている。

歌い終わったおばさんは、「サトルさん、どうぞ」とビンロウを差し出した。断るのも悪いので、受けとって口に入れた。するとその場にいる人たちが、いつせいにどよめいた。

すると、金太郎さんが話しかけてきた。「サトル、このおばさんが今歌ったのは、こういうことだ。遠く海を越え、日本から長い旅を重ねて、懐かしい日本の若者たちがやってきてくれました。私たちは貧しいので、粗末な食事やお酒ですみませんでした。でも、私たちが皆さんを心から歓迎する暖かい心があることはわかって下さい。ここを我が家と思って、ゆつくりと旅の疲れを癒してください。私は、みなさんを心から愛しく思います。サトルさん、あなたのおとうさんは、今のあなたと同じ歳にこの村のこの家にやってきました。それから40年、今サトルさんが同じ様にここに来ています。これはとても深い縁があるからです。私はあなたが、私の息子であつたらと願います。幸い私には歳ごろの娘がいます。私の娘は決して美しいとは言えません。けれど、気立てのよい優しい働き者です。サトルさん、お気に沿うことがあれば、どうか私の娘と結ばれて、この深い縁を続けてくれませんか。もし、私の願いを聞いてくれるなら、このビンロウを受けとって下さい、と言う意味だ」

これには驚いた。その解説は先にして欲しかった。母親からのプロポーズで、ビンロウを受けとったら受諾の意味だと後から言われても今さら遅い。おまけに口に入れてしまった。金太郎さんが、たたみかけてきた。「さあ、サトル、どうする」

どうするも何も、返事のしようがない。ところが、一座の人は、私の答を待っている様子で、私を見つめている。父に助けを求めようと思ってみたが、相変わらず楽しそうに笑っている。

後で考えると、この時ビンロウを受けとって噛んだのがまちがえだった。ビンロウには、魂が込められているという側面があることを、その頃は知らなかった。ビンロウに鉄片を突きさして呪いをかけたり、収穫祭の時に未婚の女性は踊っている好きな男性にビンロウを渡すことで気持ちを伝えたりする。義理の親子や兄弟になるときもビンロウを交換して噛む。そんなことは後から知ったことで、この時はせつかくくれるのだからと、軽い気持ちで受けとって噛んでしまったのだ。

さて、どうすると迷っていると、おばさんがまた歌い出した。今度は金太郎さんが同時通訳をしてくれた。「これからの旅の途中で、美しい花にも出会うでしょうが、どうか手折られることがないように（早くも、浮気するなどクギを刺している）、どうしても結婚する気になれないのなら、せめと子種だけでも残して欲しい云々」。アミスは婿入り婚なので、夫は通ってくるだけの場合もあることも後から知った。

歓迎のイベントの一つだと思いたいところだが、おばさんの真剣な表情を見ると、どうやら本気のような。となると、ともかく、何とか断らねばならない。せつかくの気持ちを傷つけないようにするにはどう答えればよいかな。ない知恵をどう絞っても、何も思いつかない。

とりあえずは、まだ学生であるので、結婚のことは考えたこともない。自分の将来のことどころか、再びここに来ることができるかどうかともわからない。あなたの娘さんが素晴らしい人だとは思いますが、だからこそ、幸せな結婚をして欲しい。ただ、あなたの私への思いやりは大変ありがたいので、私はあなたの息子として、あなたを母とよびましょう。そうすれば、あなたの娘は

私の妹になりますと、言い逃れたが、そんなことで納得してくれる様子はない。また、歌い出そうとすると、後から愛子さんになにやらささやかれていた金太郎さんが、「今日は、ここまで。ロゲの歓迎の気持ちは充分かってもらえた。これ以上は、かえって楽しくなくなる」と、止めてくれた。まさに、愛子さんありがとうである。

8月20日

朝から、金太郎さんの案内で、歩いて一時間ほどのブヌンの集落を見学に行った。近ごろは、山から平地に移住してくるブヌンも多いという。父が少し調査していたが、移住者では情報が不足しているようで、不満げだった。

ブヌンの集落からの帰りは、金太郎さんが池上の街を案内してくれた。駅の近くの商店街は、ほとんどが漢民族の店だそう。商店街と言っても、国道の両側にならんでいるだけで、その後にはない。大きな街に見えたが、それほどではない。商店街の裏側に食材中心の公設の市場があった。豚の頭だの脚、生きた鶏、食用カエルだのも売られていた。金太郎さんは、顔が広いらしく、あちこちで声をかけられていた。その度に、私たちを紹介していたが、日本人というだけで、誰もが歓迎してくれて、タバコやビンロウを勧められた。何人かは、食事をしていけと誘ってくれた。これまでもそうだったが、台湾の人は、必ずと言って良いほど、食事に誘ってくれる。食事に誘うのが、歓迎の意思表示という文化なのだろう。

夕方になると、トアビにある金太郎さんのお姉さんの家に向った。金太郎さんによると、昨晚の宴会にも来ていたが、どうしても日本人を招待したいと言ってきたので、断れないと言う。

トアビは、金太郎さんの家から池の縁を通って、小一時間ほどの所にある集落だった。お姉さんの家は、その集落からさらに1 kmほど山の中に入った所にあった。

日本語はほとんど話せないが、金太郎さんの姉さんらしく、アミ語でよく話す陽気なおばさんがタバコ、ビンロウを勧めて歓迎してくれた。そうこうする内に、家の中にいつもの丸テーブルが2つ並べられ、料理が並べられ、

宴会が始まった。料理をしているのはお姉さんのご主人だという人で、金太郎さんによると、親戚で一番料理が上手いそう。たしかに、麻婆豆腐だのエビチリだの、私たちが知っている中華料理らしい料理が並んでいた。酒が入ると、後はいつものように歌と踊りである。

食事が始まって2時間ほどすると、入口にまだ会ったことのないがつしりした青年が顔を出した。その人物を見ると、金太郎さんが「さあ、次へ行こう」と立ち上がった。もう一軒、近くの親戚の家から招待されているという。そういうことなら、その家の人たちに御礼を言って別れの挨拶をしていると、「まあ、良い。どうせ後から来るから大丈夫だ」という。

よく分からないものの、ともかくお姉さんの家を出ると、最前来た青年が、松明を持って待っていた。その人に案内されて夜道を10分ほど歩くと、やはり山の中の一軒家に着いた。出迎えてくれたのは、さっきの家でいっしょに食事をしていたおばさんだ。いつの間にか抜け出して、準備していたらしい。ここでは、丸テーブル3台が用意されていた。もしかすると、また夕食なのかととまどっていると、金太郎さんのお姉さんのご主人が炊事場から料理を運んで出てきた。この家でも料理担当なのだ。確かに、まったく同じ料理が出てきた。そういえば、今日の昼間、池上の公設市場で買い物をしていたおじさんだ。このために買い出しに行っていたのだ。

いずれにせよ、しばらくすると、最前いた家の人たちもやってきて席に着き、前の家のことはなかったかのように再び夕食が始まった。この家のおばさんが「さあさあ、お腹がへったでしょう。遠慮なく食べて下さいね」と勧めてくれるが、先ほどの家でお腹一杯食べてしまっているので、なかなか箸が進まない。すると、「さあ、自由に、自由に」とさらに勧めながら、肉や魚などの料理を取り分けて、私の皿に置いてくれる。後になって、この「自由に、自由に」という言葉は、食べる側の自由ではなく、勧める側の自由なのだとわかったが、この時は半ばやけになって無理矢理口に詰め込んだ。

ただ、台湾の田舎の宴会の良い点は、犬が放し飼いになっていることだ。台湾の食事のマナーとして、骨や皮などの食べられない部分は、テーブルの自分の皿のそばに置くか、犬がいる場合はテーブルの下に投げてやる。つま

り、骨付きの鳥肉を口に入れ、肉をほとんど食べないまま、テーブルの下に投げてやると、犬が大喜びして食べてくれるので、こちらが食べてないことがバレない。

そうは言っても、全部は犬に任せられない。それなりに食べて飲んで、また歌と踊りが始まった。その時は、まさかもう一軒はないよなど、仲間と話していたのだが、そのまさかがあった。

ここでも2時間ほどすると、また、青年が入口に立っていて、金太郎さんが、「もう一軒行こう。まだかまだかと待っているらしい」と言う。そこでまた、松明を持った青年に先導され、もっと山奥へ向かい、林間の一軒家に着いた。やはり、一軒目から会っているおばさんとおじさんが出迎えてくれた。家の中に入ると、何とまた最初の家からの料理担当のおじさんがおり、同じ料理が並んでいた。こうなったらヤケである。喉まで食べたものがあふれている感じだったが、無理すれば押し込めるものである。父や大高さんはランクが違うらしく、自分のペースでたまに箸を動かす程度だが、私たち若い者はそうはいかない。「さあさあ、若いのだからまだまだ食べられるでしょう。まだまだ飲めるでしょう」と勧められ続ける。そして例の「自由に、自由に」である。ここでも、後半は歌と踊りである。

夜中近くなって、ようやくお開きになり、フラフラしながら暗い夜道を歩いて帰った。驚いたことに、ポイント、ポイント毎に、青年が松明を持って立っていて道を照らしてくれている。街灯もないし、懐中電灯もないので、これは助かる。

「一軒だけ行って、他に行かないと、何故私の家には来ないのだと、後から文句を言われるから仕方ない」と、金太郎さんが説明してくれたが、先に言ってくれていれば、調節して飲み食いできたのにと、やや不満は残る。ただし、それ以降は、何回夕食があるかわからない場合は、押さえて食べる様にした。智慧はこうして身につくものだ。

8月21日

さすがに、朝から調子が悪い。連日の大宴会と昨夜の食べ過ぎで、午前中

はフラフラしていた。昼過ぎからは多少元気になったので、池上のあちこちを見学して歩いた。ここは、アミスの村から発展したのではなく、100年ほど前に、大高さんの祖先がここに移住してきた頃は、すでに数軒の漢民族が稲作をしていたという。大高さんの祖先は、この漢民族と仲良くなり、稲作を教えてもらい、豊かになれたという。アミスは、元々は陸稲を栽培していたが、ここ200年ほどは粟作が中心になっていた。稲作は、まだ新しいのである。池上は名前の通り、大きな池があり、その周辺の湿地帯が水田に適していて、稲作が盛んになったらしい。

このように、最初から漢民族と暮しを共にしてきたせいも、これまでの地域よりも漢民族とアミスの関係は良好なように見える。池上だけであれば、漢民族の割合が7割近くを占めているそうだ。

街を歩いていると、あちこちから声がかかる。「日本人ですか？寄ってらっしゃい」「ご飯食べましたか？」「さあ、いらっしゃい」などと、上手下手はあるものの、日本語で話しかけてくる。明らかにアミスとわかる人たちもいるし、漢民族の商店の人もいる。日本人が来ていることは、街中の噂になっているのだろう。それほど、日本人が珍しいようだ。

夕方になると、昨夜トアピでもてなしてくれた人たちや、一昨夜の集まってくれた人たちが、三々五々集まってきた。今日も宴会である。この夜は、若い女の子たちも積極的に参加して来た。一昨夜のおばさんのプロポーズの一件で、私たちが婿さん候補であることが知れ渡ったのだろうか。

あのおばさんの姿が見えないなと思っていたら、8時を過ぎた頃、女の子を連れてやってきた。

「この娘が、一昨日お話しした私の娘のミチコです。今年16歳になります」と、紹介された。台湾は数え年で年齢を言うから、実質14歳か15歳だ。見た目もまだ子どもである。いくらアミスは早婚だとは言っても、無茶な話しである。

今回は、金太郎さんがしっかりと仲裁してくれて、とにかく結婚の話は無しにして、あくまでも妹としてこれからも扱うという事をしっかりと話し

た。おばさんは、残念そうであつたが、当のミチコはケロリとしている。この日から、踊りが始まるとミチコは必ず私の隣に入つて踊るようになったが、兄弟が隣で踊ることはよくあることだと言うことなので、安心していたし、これで結婚云々の話は解決したと思つていた。

しかし、この話は、その後何年も尾を引くことになってしまった。私は断つたつもりでも、相手は希望を持ち続ける。私でなくても、とにかく日本人と結婚させるといふのが、このおばさんの夢だったのである。また、言い出した手前、引込みもつかなくなったのだろう。その内、当の娘もその氣になってきたらしく、最後は、神奈川県の人と結婚した。それまでの間、会う度に説得を繰り返さなければならず、金太郎さん、愛子さんにも苦勞をかけてしまった。

私のピンロウを受けとるという行為への無知さが生んだ、笑えないドラマだった。

8月23日

父と大高さんは、ブヌンの調査で山地に入つていった。1ヶ月の観光ビザで来ている私たちの日程も、残りわずかとなった。ここから、樟原に戻り、田さんの家に預けてある荷物を回収して帰国することになった。

池上は、わずか6日の滞在であつたが、金太郎さんという名前にふさわしい素晴らしい人に出会えたし、奥さんの愛子さんの細やかな心配り、親戚や子どもたちの暖かいもてなしに、ただただ感動した。特に私の場合、親子2代の縁というのが心の垣根をとりはずしやすくしたようだった。

愛子さんによれば、私は戦死したイラオの生まれ変わりだと言う。戦前、大高正一さんと知り合った父は、弟のイラオが優秀なので台北に連れて行き、中学に通わせていたと言う。そのため、戦死したイラオの靈魂は日本に行き、世話になった父の息子つまり私として生まれ変わったのだというのである。「だから、サトルにも笑窪がある。イラオと同じよ」と、愛子さんは言う。まあ、悪い話しではないので、受け入れることにした。いずれにせよ、以降私は、大高家ではイラオと呼ばれることになった。アミスは、名前には靈魂が宿る

と信じているので、私にはイラオの靈魂が宿っていることになった。したがって、私にとって大高家は、台湾の実家・本家と言うことに決まった。

こうして、私の初めての台湾調査、アミスの文化の調査は、無事に終了した。まあ、調査とは名ばかりで、ほとんどが見るだけ、飲むだけ、食べるだけだったが、少なくともアミスの生活の一端を体験することはできたし、ウスイやアヒナ、大高正一さん、金太郎さん、愛子さんなどのアミスと親しくなることができた。そして、来年もまた来たいと強く思うようになっていた。

1971年 第2回調査

1971年3月9日

前年、台湾から戻ってから、アミスとの日々が忘れられず、また行きたくてたまらなかった。それには理由が必要だ。卒業論文のテーマをアミスの文化や社会組織にすれば良いと考えた。実は、私が文化人類学の世界に入ったのも、単にアミスとの関係を続けたかったからであり、学問分野自体に惹かれたわけではなかった。

ということで、夏休みに台湾から帰ってからは、台湾へ行くための旅費稼ぎのバイトに明け暮れ、アミスの文献を読み漁った。昨年台湾へ行く前も、多少はアミスについて学んだのだが、やはり実際にアミスの人々、生活に接した経験があると、取り組む姿勢も変わるし、理解もしやすくなる。純粹に面白いと感じるようになった。

昨年夏は、友人三人で行ったのだが、その内二人は「あの人たちと、一生付き合っていく人生を思い描けない」と参加しなかった。もう一人のSは、文化人類学の道を選びたいということで、彼と二人で行くことになった。

期末試験が終わり、さらにバイトに精を出して資金を稼ぎ、Sと台湾へ向った。昨年同様、大阪まで夜行バスで行き、そこから那覇港まで船、那覇からは飛行機で台湾へというルートだ。東京から台湾へ飛行機だけを使うと、往復10数万かかるが、これだと3万円弱で行けるからだ。こうして3月9日に沖縄経由で台北の松山空港に着いた。現在の桃園国際空港も、成田国際

空港もない時代だ。

空港に着くと、ホテルの客引きが何人も集まってくる。最初は一人8米ドルから始まり、最後にツインルームで一人3米ドル（当時の1米ドルは360円）の太陽ホテルにした。台北駅から5分ほどの交通の便の良さが気に入った。ホテルまでは客引きの車で行けるので、これも助かる。ホテル自体は、古くて薄汚れていたが、それでもトイレ、バスルームが着いているので、充分満足だ。

3月10日

昨年はチャンスがなくて見られなかったが、故宫博物館の見学に行った。中国古代王朝の遺物などは素晴らしかったが、まだ研究が始まったばかりだそう。昼食は館内のスナックで肉まん二個と砂糖抜きの汁粉。これで6元（約60円）。とにかく物価が安いのが嬉しい。

3月11日

朝7時40分、台北駅発の花蓮行きのバスに乗る。バスの車掌さんは昨年と同じ女の子で、私たちを覚えていてくれたらしく、親しげな笑顔を見せて片言の日本語で話しかけてくれた。と言っても「どうぞ」とか「15分休憩です」とか程度だが。

昨年一往復して慣れているので、昼はカブトガニー匹ずつ、イカと白菜の煮込み、炒飯、コーラの昼食。二人で72元（720円）。台北よりさらに安い。

例の断崖絶壁の道を通って16時に花蓮着。昨年泊まった遠東大飯店に宿泊。1泊一人100元（千円）。ホテルが少ないせいか、台北並の価格だ。

3月12日

11時半のいわゆる特急列車で池上へ向う。台湾の汽車の座席には、500ccサイズの分厚いガラスのコップが備え付けられている。お茶の葉が入っていて、汽車が動き出すと、ここに大きなヤカンから熱湯を注いでくれる。

池上までの二時間ほどで、二回入れてくれた。ただ、後で気付いたのだが、客が変わってもコップはそのままだ。

13時45分に池上駅到着。「ベントーン、ベントーン」と、いつもの駅弁売りの女の子の姿が懐かしく感じられる。この頃は、大きな駅では売店で駅弁を売ってはいたが、駅弁を入れた箱を前に抱えてホームで売るのは、まだ珍しかった。

金太郎さんの家に着くと、「おう、来たか、来たか、よく来た」「イラオ、お帰り」と温かく迎えてくれた。何か、ほっとする。

「さあ、お腹がへったでしょう。お昼食べなさい」と、早速食事が始まる。私たちの顔を見てから料理を始めたというのに、見る間に10品ほどの料理が並ぶ。確かに私たちが着いてすぐ、裏から鶏の叫び声が聞こえた。そして、鶏酒である。鶏酒は、出産直後に産婦に与えるという御馳走である。鶏をぶつ切りにして、生姜を入れた米酒で煮ただけの料理であるが、なかなか強烈な味である。鶏は家で飼っているし、米酒は安いので、一番安上がりな御馳走である。鶏の香りが強くて苦手だが、そういう事情で私は好物だということにしている。

食後はお昼寝タイム。私たちが寝ないと、相手も寝られないので、眠くなくても言われたらすぐ寝ることにしている。とは言え、昼酒は効くので、横になるとすぐ眠ってしまった。

夕方目を覚ますと、すでに夜の宴会の準備が始まっている。丸テーブルは2卓と昨夏ほどではないが、それでも三々五々、顔見知りが集まってくる。そして、いつものように酒と歌と踊り。

3月13日

朝起きると、近所のカツアウというおじさんから朝食の招待。金太郎さんによると、食事の招待が次々に来ているという。ともかく、日本人が懐かしいのだという。日本人を自分の家に招待したと自慢できるとも言う。「私の家だけだと、私がケチだと言われるから、少しは認めてやらないとだ」とまで、金太郎さんは言う。昨年からの疑問だが、かつての植民地支配者で、搾取した

りいじめたりしたはずの日本人を、なぜ、これほどアミスの人たちは特別視するのだろうか。

朝っぱらから、テーブル一杯の料理と米酒である。金太郎家で毎晩集まる顔が揃っている。昨夜の酒が残っている上に、また乾杯攻めで、早々に退散してのびていると、昼食は、トンソの家からの招待だという。このおじさんも、大高家の夜の宴会の常連だから、何も改めてと思うのだが、面子というものなのだろう。結局、トンソの家で夕方五時半頃まで飲み、そのまま、大高家の夜の宴会へ。常連たちも、朝からの酒で弱っているらしく、今夜は大人しい。その代り、今夜は若者たちが大勢やってきた。こちらは、酒は飲まないで、今風の歌と踊りで盛り上がっている。そっちの方は、まったく駄目なので、私たちももっぱら見物にまわり、酒もあまり飲まず休養。金太郎さんも早々と姿を消していた。

3月14日

台湾へ飲みに来たわけではないので、今日からは調査開始。池上の東南の山際にある雷公という集落にバスで向った。金太郎さんが心配して、案内すると言ったが、あまり頼るのも良くないので、ご遠慮願った。

池上から雷公へは、バスで30分ほどだった。山間の小さな集落だが、トアボやいくつかの集落がここを母村（出発点の村）としている。

雷公に着いて、金太郎さんに紹介された有馬さんという人を訪ねた。歩いている人に日本語で話しかけて、有馬さんの家はどこですかと尋ねると、すぐに案内してくれた。その点は、日本の田舎と変わりがない。

有馬さんは、60歳前後の上品な人で、日本から来たかと挨拶すると、「それでは、私の本家に行きましょう」と、別の家に案内された。有馬さんの生家である。生家に入ると、「日本人を連れてきたぞ、酒だ、酒だ」と、お茶代わりにと米酒を勧めてくれた。とにかく、酒、タバコ、ビンロウは、歓迎の意を表す挨拶なのだ。

有馬さんは記憶や知識も正確で、こちらの質問にもスラスラ答えてくれた。この人も、日本の植民地時代に教員をやっていたという知識人だ。

アミスは、前にも述べたが婿入り婚である。アミスの家は、女が中心だからと有馬さんは言う。田畑や家屋敷などの財産は、母から娘へと相続される。そのため、夫の立場は弱い。婿入り先では、ほとんど発言権さえないという。自分の子どもの将来についても、決めるのは、妻の親族だという。そこら辺の感覚がわからない。有馬さん自身も、婿入り婚だという。そのためか、有馬さんの家を訪ねた時に、すぐ有馬さんの生家に連れていかれたのだ。生家では、あたかも主人のように振る舞っている。お姉さんのご主人もいたが、同席もせずに、給仕や料理に忙しくしている。

この時の疑問が、後に私の研究テーマになった。アミスの家族とはどういうものなのか。特に夫＝父はどういう立場なのか。あるいは、アミスの男性は家族の中でどのような地位と役割があるのかである。

話を聞いている内に、昼食の用意ができたということで、昼食になった。酒の飲み直しである。昼食を食べながら、先ほどの有馬さんの話を頭の中で整理し、午後は、親族全体の話しや、トアポとの関係などを聞こうと考えていた。

昼食後、二時間ほど話を聞いて、帰ることにしたが、バスは当分来ないという。この頃は、台湾の田舎は一日2,3本しかバスが通っていなかったのだ。しかたなく、最寄りの鉄道の駅まで歩くことにした。そこから池上へは汽車で一駅だ。ほろ酔い加減どころではないまま、一時間以上も歩いて駅に着き、池上へ帰った。昨年夏の訳のわからない宜湾での調査に比べると、かなり進歩したと内心満足だった。

3月15日

今日は鹿野という街で調査をした。金太郎さんが、どうしても自分も行きたいと言って案内してくれた。考えてみると、昨日はアミ語もできず、中国語もできない日本人の学生が、知らない土地へ行くのだから、帰るまで心配でならなかったのだろう。

鹿野は、池上と同様、地域の中核都市（と言っても人口3千人ほどだが）で、漢民族の商店街が並んでいる。もともとは、この地域で一番大きなアミス

の村だったそうだ。

鹿野では、ルビン、オカル、コボガル等の長老の話しを聞くことができた。3人とも優れた記憶力の持ち主で、金太郎さんの通訳のうまさもあって、様々な話しを聞くことができた。鹿野の歴史、神々、まじない、農耕儀礼や通過儀礼、親族関係など、文献で読んできたことを、再度具体的に聞くことができた。今日は、酒抜きで朝10時から夕方5時半まで、びっしりと調査できた。さすがに疲れたが、通訳と解説してくれた金太郎さんは、もっと疲れたらしく、「参った、参った」を連発していた。しかし、帰り道にこんなことも言っていた。「東一先生やサトルたちが、何をしに来ているのか今まで良くわからなかったが、私たちの大事なことを調べていることがよくわかった。今日の話は、私も知らなかった事ばかりだ。これは、私らに大事なことだ」

池上に着いたのは7時過ぎだったので、夕方日本人目当てに来た客もあきらめて帰ったらしく、今日は宴会なしで、酒も少しにして、早々と寝た。

3月16日

愛子さんの親戚の結婚式があるからということで、トアピに行くことになった。金太郎さんは「今日は行かない。トアピの連中は大酒飲みだから、危ない」と、言う。そこで、昼前に愛子さんに連れられて、トアピに行った。一昨日御馳走になった家よりもかなり手前の、集落の入口に近い大きな家だった。100坪はありそうな広い前庭に丸テーブルが4,50卓並んでいて、おびたしい人が集まっていた。結婚式自体は終わって、披露宴が始まっているらしい。私たちが着くと、「日本人が来た！」と大騒ぎになった。新郎新婦にも会わないまま、席に着かされた。

披露宴自体は、漢民族式の結婚式で円卓のご馳走だった。同じ卓の人と、一人ずつ乾杯していたまでは良かった。しばらくすると、後ろにおじさんが立っていて「日本人と会うのは30年ぶりです、乾杯して下さい」という。もちろん乾杯した。すると、他の人が「私も」と言って続く。そしてまた次。よく見ると、20数人が行列して順番待ちしている。しかも、一度乾杯した人が、また列の最後尾に並んでいる。200ccのグラスで、20度の米酒を乾杯し続けるとどうなるかは、私にもわかる。友人と一緒にだったのでその友人の

方を見ると、これも行列を従えている。愛子さんが、必死に並んでいる人を追い払っているが、誰も言うことを聞かない。そこで脱走を計ることにした、

あとになって、この様なときの逃走術をいくつか確立した。曰く小便の術、タバコの術、水遁の術、火遁の術である。この時はまだ素人だったので小便の術である。「ちょっと小便行ってきます」と、とりあえずその場を逃れた。そして牛小屋の牛車の轆(ながえ、牛車の前に2本ある長い棒状の部品。その間に牛を繋いで引かせる)に寝そべって二人で隠れた。金太郎の奥さんが、さりげない風をして、自転車を2台牛小屋の前に引っ張ってきて、「逃げなさい」と言ってくれた。さすがの奥さんもこれは危ないと思ったのだろう。当時の台湾(1970年頃)は、まだ自動車は珍しく、バイクもほとんどなかった。友人(今は故人)と、素早く自転車に飛び乗って、結婚式会場を突っ切り、脱走した。「待て」「逃げるな」という声も聞こえたが、命あつての物種である。ひたすら自転車をこぎ続けた。ところが、地理がわからない。その上、運の悪いことに新婦の親戚の一人がタクシーの運転手だった。タクシーに、5,6人が乗って追跡劇が始まった。自転車では追いつかれるのは時間の問題なので、取り敢えず一軒の家に飛び込んだ。おじいさんとおばさんがいたので、「助けて下さい、追われてます」と頼んだら、理由も聞かず押し入れの布団の後ろに、私を隠してくれた。もう一人の友人は、寝床の下に隠れた。間もなく、途中で乗り捨てた自転車が見つかり、追っ手の数もますます増えてきたようで、外は大騒ぎになっている。一軒ずつしらみつぶしに探しているようだった。そしてとうとう、私たちが隠れている家に、十数人が入ってきて、哀れ友人は発見されてしまった。「ちくつたら、絶交だぞ」と念じながら、息を殺していると、私の方は見つからず、友人だけを拉致して行った。私はその後、老夫婦の自転車を借りて、金太郎さんの家に無事逃げおおせることができた。ついでに言うと、私が帰って金太郎さんに報告すると、すぐ金太郎さんは親族を集めて救助隊を組織し、友人を助けに行ったのだが、この救助隊も結局はそのまま飲み会に参加しただけのようで、意識不明の友人を担いで放歌高吟しながら帰ってきたのは深夜を過ぎてからだった。

3月17日

昼食後、池上の西の中央山脈の麓にある陸安に金太郎さんの案内で調査

に行く。徒歩1時間ほどだ。陸安には、山から下りてきたブヌンも共住しており、トアボやトアピとは何となく雰囲気が違う。4,50年前までは首狩りをしあって対立していたブヌンとアミスが共住するようになったと、金太郎さんは不思議がっていた。陸安では、カイロンという60歳後半の老人が話しをしてくれた。南のプユマとの関係や、ブヌンとの首狩り、村の組織など、明確に話してくれた。プユマは、台東周辺に居住する種族だが、人口は昔から少ない。しかし、クラス・マハンハンという大頭目が登場したときに勢力を拡大し、池上の北の富里付近アミスの村までが、クラス・マハンハンに粟や水牛、ブタなどの貢納を収めていたという。プユマは呪術に優れており、それを恐れたからだそう。また、トアピのトンソというアミスの英傑の話もしてくれた。トンソは赤眼赤髪の偉丈夫だったという。若い頃から腕力が強く、豪快な性格だったトンソは、やがて青年組のリーダー格になった。その頃、今のトアピにまでブヌンが出没し、畑仕事をしていたアミスの女性が襲われ首を獲られた。これに怒ったトンソは、長老たちが止めるのも聞かず、青年たちを引き連れてブヌンの部落に攻め込んで、家々に火を放った。ブヌンは急な攻撃と火事に驚いて逃走してしまった。トンソは、燃えさかる家に飛び込み、腹が減ったとブヌンが残した粟粥を手づかみで食べてからブヌンを山奥まで追跡し、ついにブヌンの若者に追いつき、これを斬り殺して首を獲って帰ったという。このためブヌンは、トンソのいるトアピには近づかなくなり、南のプユマもトンソを恐れて貢納を求めなくなったという。このトンソは、金太郎の3代前の祖先だそう。トンソについては、金太郎さんも聞いたことがあるが、これほど詳しくは知らなかったと興味津々だった。

夜の宴会は、だいぶ人の集まりが減った。さすがにみんな飽きてきたのだろう。それでも、金太郎さんと仲の良いリボン、トンソはいつものように来ていた。この三人組は、普段から毎晩のように飲んでいるらしく、毎晩、「今夜限りで、酒は止めよう」と誓い合うので、私は「禁酒同盟」と名付けた。それでも比較的平穩な飲み会だった。私も、さすがに疲れており、酒が進まない。早々に休ませてもらった。

3月18日

朝九時半の汽車で、池上の北隣の富里駅から1時間ほど海岸山脈に入っ

たところにある徳高へ行った。ここは、海岸山脈を越えて、太平洋岸へ出る道があるので、海岸線のアミスとの交流があるという情報があったからだ。しかし、行ってみると、紹介されたアミスは全員不在。たまたま地元の家政指導員（生活改善指導員）に出会ったので、誰か物知りの年寄りはいませんかと尋ねて、数人を紹介してもらった。しかし、どの人も良い人なのだが、記憶が曖昧で調査にならない。わずかな経験しかないが、世間話や簡単な質問をして、その人の信頼度がわかるようになってきた。悪意ではなく、善意から一生懸命考えて答えてくれるのだが、不正確な情報はマイナスである。そんなこんなで、調査は諦め、食堂で簡単な昼食を済ませてから、池上のいつも買い物をする店の人に紹介された、製糖工場へ行ってみた。ここでも日本人だと言うと、社長が大歓迎してくれて、食べたばかりだというのに昼食をごちそうになってしまった。社長によると、海岸山脈を越える道は今もあるという。ただ、最近ではほとんど使う人はいないので、どうなっているかわからないという。ここから海岸山脈を越えると、あの宜湾の近くに出るはずなので、いつかは越えてみたいと思った。

製糖工場から帰ろうとすると、お土産だと言って、それぞれに砂糖の10kg入りの袋を渡された。日本は砂糖が高いからという親切心からだが、駅まで1時間は歩かねばならないので、正直閉口した。と言って、捨てるにはもったいないので、結局池上まで持っていって、愛子さんへのお土産にした。

このお土産攻めも、結構大変だった。バナナ一枝（房が10ほど連なっていた）を持たされたときも閉口した。日本人はバナナが好きだからというのだが、そこまで好きではないし、しかもメチャクチャ重い。さすがに、これは途中の山道で捨てた。日本は米が高いからと米1俵（60kg）を日本へのお土産にともらったこともあった。ダイコン50本ということもあったし、2升の餅ということもあった。どれもありがたいのだが、とにかく重い。まだ交通機関が発達していない頃だから、歩いて運ぶしかない。これは、何年も続いた。

夜は、トンソ家で招待。昨夜は、私たちも金太郎さんたち三人組も疲れて早じまいしたので、今夜はやる気だという。トアビからも呼び集めて、歌と踊りで盛り上がった。

3月19日

今日はどうしようかと迷っていると、一昨日調査に行った陸安のカイロンが訪ねてきてくれた。まだ、話し足りないという。もっと、アミスのことを記録に残して欲しいという。午後遅くまで、集落の連合や、親族の集まり、集落の組織などについて話してくれた。カイロンの話しは、誰が何をどのようにしたと言う、具体例を示してくれるので理解しやすい。特に集落の組織（註3）については詳しい。

カイロンの話しは、夕方まで続いた。先日の赤眼赤髪のトンソの話しも、さらにしてくれた。

夕食後、トアピの愛子さんの実家から迎えが来た。アミスの衣装を着て踊るので見に来なさいと言うことだ。トアピは、漢民族との混住がわずかなので、フィナオラン（男子年齢階梯組織）も残っており、秋の収穫祭ではアミスの衣装を着て踊るとのことだ。今夜は、アミスの生活を調べている私たちにそれを見せてくれることになったらしい。これも、アミスの心配りである。ありがたく見せていただいた。もちろん、食事と酒は当たり前のように用意されていた。

3月20日

朝9時5分の汽車で、台東へ。さらにバスで太麻里に行き、昨年世話になった田明輝さんの家に行く。田明輝さんは、樟原の田明来さん、宜湾の田明発さんの弟で、太麻里の衛生所（保健所）の医者である。田明輝さんも、また来たと喜んで迎えてくれた。太麻里は仕事場なので、接待できないと残念がるが、こちらは調査が目的なので、太麻里から小一時間の金崙へ案内してもらうことにした。といっても、50ccのスクーターに2人乗りだ。助手のスクーターと2台で行ったが、その飛ばすこと。なかなかスリルがあった。

金崙は、パイワンの集落だったが、パイワンについては準備不足だったので、あまり収穫がなかった。将来のための顔繋ぎが目的だったので、何人か知り合えただけで良しとしよう。

勤務時間中のはずなので、早めに切り上げたが、田さんは、このまま台東に行って食事をしようと誘う。次回来たときにと約束して、池上に戻る。夜は、相変わらずの宴会。

3月21日

昨日と同じ9時5分の汽車で台東へ向かい、台東からはバスを乗り継いで樟原へ。午後3時半に到着。田明来さんの家にお世話になることになった。この時期は台湾大学の考古隊が来ていないので、受け入れてくれた。田さんの家の良い所は、酒を飲まないことだ。田さん三兄弟の内、酒を飲むのは太麻里の田明輝さんだけだ。おかげで、久しぶりに酒拔きの一日になった。

3月22日

9時20分のバスで宜湾へ向う。10時過ぎに宜湾に着き、ウスイの家へ。ウスイ、アヒナが大喜びして迎えてくれる。

「久しぶりに帰ってきたのだから、まずは一杯」と、さっそく米酒でささやかな歓迎会。ウスイの妹のご主人の浜田さん、隣の植園さん、伝道師リボクさんなども参加。昼過ぎに一段落すると、「さあ、休みなさい」とウスイに言われて、昼寝。小一時間眠ってから、ウスイの本家のツカスの話を聞いた。ここでは、池上方面にはみられない母方オジの権威の話や、男系による母方オジの権威の継承などを聞いた。池上方面では、漢民族との混住の歴史が長いので、親族関係についてはかなり変化しているようだが、海岸線のアミスは、漢民族との関係が薄いのでか親族の関係が今でも強固なようだ。伝道師のリボクさんは、下半身が麻痺しており松葉杖の40歳前の人だが、日本語が非常に達者で、通訳としては最高だった。

夕食も、ウスイ家で宴会、ウスイの妹夫婦が二組、リボクの母なども参加して、楽しい夕食だった。ウスイは、泊まっていけと強く誘ってくれたが、7時20分の終バスで樟原にもどった。風邪気味なのか、頭痛、微熱があるので、抗生物質を服用。同行のSも同じ症状だ。

3月23日

9時半のバスで、北へ1時間半ほどの静浦へ調査に行ったが、話しをできる人がだれもおらず、一度樟原に帰り、昼過ぎに再度静浦へ行った。今度は、カパという老人を見つけたが、どこかへ出かけなければならないというので、次回を約束して、樟原に近い大俱来へ行き、宮原さんという老人に話しを聞くことができた。特に、母方オジの権威の継承や、最近の母方オジの役割など、面白い話しが聞けた。

午後、静浦へ行った時から、知らない中年の男性が、ずっとついてくる。誰かの知り合いかと思ったが、そうでもないらしい。カパの家にも、宮原さんの家にも、黙って入ってきて後に坐っている。何とも気味が悪い。もともと、宮原さんのところで話しを聞いている内に、いなくなってしまったが。宮原さんに尋ねると、知らない男だが多分公安警察だろうという。台湾は戒厳令下にあり、原住民を扇動しているのではと疑われたのかも知れない。もともと、あまりにつまらない話しなので、問題ないとなったのだろう。いずれにせよ、次の日からは誰もつけてこなくなった。

5時前に樟原に戻る。夕食後、すぐに寝る。体調がますます悪い。Sも同じだという。

3月24日

朝起きたものの、Sも私も動く気力がない。微熱も頭痛も治まっているのだが、立ち上がるのもおっくうだ。思い切って、今日は一日休養日にしようと思ひ合った。昼食も摂らず、一日中ひたすら眠った。おかげで、夕食の頃は、元気を取り戻した。

3月25日

すっかり体力を取り戻せたので、9時前のバスで宜湾に向った。前回行ったときに、「この次来る時は、必ず泊まりなさい」とウスイに言われていたので、田さんにその旨断って出た。



(宜湾での調査：左2人目からウスイ、アヒナ、S)

ウスイの家に着くなり、「まず、休みなさい」と命令された。「勉強ばかりしていると、体に良くないから、たまには休みなさい」と言う。「酒ばかり飲んでいると・・・」なら身に覚えがあるのだが、あまり強く言うので素直に寝かせてもらった。昨日の今日だから、多分、そんな顔色をしていたのだろう。



(フラウ老の調査、左はアヒナ)

昼前に起きて、ウスイの本家に行き、父のフラウに話を聞いた。人の良いおじいさんだが、あまり覚えていないようだ。フラウも婿入り婚だったので、婿としての生活の経験を聞いた。子どもの教育や結婚については、口を出したことはないという。「カラボ(婿)は、そんなことには口を出したらいけないものだ」と言う。決めたのは、ウスイの母の弟のリワイだという。理由を聞いても、「婿は、誰よりも早く起きて働くだけ。アミスの男はそんなものだ」

と、笑っている。私が、アミスの父と子の関係に興味を惹かれたのは、この時からだ。

話しが一段落すると、ウスイの家に戻って昼食。席に着こうとすると、ウスイに「手を洗って来なさい」と、叱られた。なかなか口うるさいおばさんだ。昼食が終わると、今度は「休みなさい」との命令。しかし、疲れがたまっていたせいか、夕食まで寝てしまった。目を覚ますと、今度は「水を浴びなさい」ときた。家の前の炊事小屋に大きなタライが置かれていて、バケツに水が入っていた。タライで行水というのは、小学生以前にやったような記憶があるが、一応汗を流せたのですっきりした。

「まだ、勉強があるから」と、夕食は酒抜きだったが、飲み疲れているのでありがたかった。食事が終わってから、現在の顧問つまりカキタアのツパイに話しを聞きに行く。村のリーダーだけあって正確な記憶の持ち主で、フィナオラン（年齢階梯組織）の実際の役割などの話しを中心に聞いた。スビ（男子集会所）での生活、規則、道路修理や橋の建設、収穫祭や雨乞い、日乞い、虫負いなどの儀礼での役割などを聞くことができた。宜湾では、スビが無くなったので、以前のように青年が泊まり込むことはできなくなったが、公共事業や、儀礼は今でもフィナオランが中心に行っているという。これも、興味を惹かれる話だ。11時頃まで話をして、ウスイの家に帰って寝た。頭を使ったので、結構疲れた。

3月26日

朝食後、昨年の夏に話しを聞いたトロを訪ねたが、体調が悪いらしいので、早々に引き上げた。昼食後、樟原に帰った。

3月27日

朝9時前のバスで静浦へ行き、そこから対岸の大港口という集落へ行った。大港口は、海岸線のアミスがここから移住したという故地である。宜湾のツパイが教えてくれたカツアウという人の話を聞いたかったのだが、あちこちの家で尋ねてもみつからなかった。困っていると、村の人が、ラワイという50歳ほどの人を連れてきてくれた。あまり、昔のことは知らないようだが、大港口から中央山脈の中に入ったところにある奇密という村が、アミス全体

の故地であるという話をしてくれた。池上を拠点に調査したときに、徳高で聞いた海岸山脈を越える道というのが、ここに通じていたのだ。山道があるだけで、徒歩3時間程だという。ただし、かなり危険な場所もあるらしく、徳高から行った方が良いという。興味はあるが、次の機会を狙うしかない。

あまり収穫はなかったが、それでも大港口という古い村を見ることができた。宜湾に比べると、一軒一軒の家が大きく、またアミス本来の建築様式のように思えた。

午後早々に樟原に帰る。

3月28日

田さんに誘われ、田さんのトラックで静浦に魚取りに行った。先日会った、静浦のカパと田さんは知り合いだったので、カパが魚取りをしようと誘ってくれたらしい。田さんの子どもたちもいっしょに行った。

静浦と大港口の間には、秀姑巒溪という大きな川が流れている。この川の源流は池上だそうだ。川の浅瀬で、カパが「バッテリー」と言う漁法を見せてくれた。自動車のバッテリーのそれぞれの電極に電線を繋ぎ、一方は竹の棒の先に電線をむき出しにして結び、他方を針金で輪を作ってある網の金網に接続し、二つの電極の間を通る魚やエビを痺れさせて網ですくい取るのだ。感電しそうだが、カパは平気である。小一時間で、かなりの量の魚、エビ、ウナギが獲れた。それを河原でたき火をして、煮て食べた。ちょっとしたハイキングである。



(秀姑巒溪でのバッテリー漁)

食べている間に、カパが辺りを見まわしていたが、突然、「ハチがいる」と走りだした。後を追っていくと、河原の近くのヤブの中の木の所でハチの巣を見つけたようだ。カパが振り返って「ハチミツが採れるぞ」と言う。しかし、道具も防護服もない。「刺されませんか」と言っても、「平気、平気」呑気なものだ。

こちらは怖いので少し離れてみていると、カパがなにやらハチの巣に向かって話しかけている。その内、ポケットからタバコを取りだして草の上に置いた。続いて腰にぶら下げていた山刀を置いた。それから、ハチの巣に素手のまま手を突っ込み、一塊のハチの巣の中身を掴み出し、もう一方の手で最前置いたタバコと山刀をひつつかむと、「逃げろ!」と叫んで逃げだした。私たちも慌てて後を追って逃げた。

後で聞くと、ハチの巣に向って「ハチさん、ハチさん、このタバコをあげるから、少しミツを下さい。ハチさん、ハチさん、この山刀もあげるからミツを下さい」と話しかけていたそうだ。それからミツをとって「やっぱり止めた」と言って逃げだしたそうだ。

アミスはこうやってミツを分けてもらうそうだ。たくさん取りたいときは、煙を使って取ることもあるが、少しのおやつ程度なら、この方法で失敗しないと言う。本当とは思えないのだが、実際に見たのだから疑いようがない。しかし、後から何人かのアミスに話を聞いたが、そんなやり方は知らないと言う。どうやら、カパが何か細工したらしい。

昼過ぎに、バスで宜湾に行った。今日も宜湾で泊めてもらうことになっていた。着くとすぐ、ウスイに昼寝しなさいと言われた。「今日は一日休みなさい」と、調査もさせてもらえなかった。昼寝の後、ウスイやウスイの妹の夫の浜田さん、裏の植園さんなどが集まり、世間話に花が咲いた。あそこの婿は働かないから離婚された。あそこの家で誰々が死んだが、その遺産を巡って娘と息子が対立している等々。ウスイたちには世間話でも、私たちにとっても興味津々の話である。ノートを出して調査しなくても、いい話はたくさん聞けることがわかった。むしろ、このような会話の中でこそ、本当の話が聞けるようだ。私の調査スタイルが、この時芽生えたと言って良いだろう。

夕食はウスイの本家の下の家で、新築後最初の満月の祝いがあり、そこ

に招待された。しかし出てきたのは犬の肉だ。アミスには御馳走らしいが、さすがに箸がでない。柔らかく煮込んであり、香辛料も効いていてまずくはないのだけれど、やはり気持ちが悪い。アミス本来の料理ではなく、漢民族の真似をして最近食べるようになったという。

3月29日

近くの村でウスイの親戚の結婚式があるということで、それに参加した。アミス本来の結婚式ではなく、漢民族式の結婚披露宴だった。飛び入り参加なのに、日本から来たと言うことで大歓迎された。花嫁、花婿、それぞれの両親に先導されて、各テーブルを回って挨拶させられた。日本からまで参加するというのが、自慢なのだろう。池上で結婚式の乾杯には懲りているので、できるだけ自分の席に留まらず、こちらからあちこちのテーブルを回り、乾杯攻めは逃れることができた。

その後、宜湾の南隣の重安へ行き、ウスイの妹の家を訪問した。ご主人は日本時代の予科練出身ということで、大きな体で日本の軍歌ばかりを歌っていた。今は小学校の教員だが、「台湾の教育はなつとらん」と怒っていた。ともかく、日本が正しいの一点張りで、アミスの文化にもまったく興味がない。これでは、こちらの仕事にならないので、重安の元カキタアンのリボクに話を聞きに行った。しかし、あまり覚えておらずというより、小学校の教員がいるせいかアミスの習慣は駄目だという話ばかりなので、諦めた。

10時頃になって、徒歩で宜湾に帰った。月明かりの海岸沿いの夜道は、気持ちが良かった。帰ると、浜田さんやリボクさんが待っており、しばらく世間話をして、12時過ぎに寝た。

3月30日

今日で宜湾を離れ池上経由で帰国することになっているので、朝から見送りに皆が集まってくれた。ウスイは、「また、必ず来なさい」と言ってくれたが、その後はお小言。「旅行するときは、ハンカチ、タオル、歯ブラシと着替えを持って歩きなさい。朝起きたら、必ず歯を磨きなさい。食事の前は必ず手を洗いなさい。あんたたちは、どれもできていない」と、小うるさい。

昼過ぎに樟原へ向う。出がけに「何もないから」とウスイがハンカチを渡

してくれた。樟原に着いてからハンカチを開けてみると、100元札が入っていた。貧しい農家にとっては大金だ。散々世話になった上に、こんなことまでしてもらっては、こちらの気が済まない。そうかと言って返しても受けとるはずもない。来年、必ず御礼に来ようとSと話し合っておりがたく受けとることにした。

3月31日

樟原の田さん一家の見送りを受け、バスで台東へ。そこから汽車で池上へ。自分の中でも、池上と宜湾のどちらが好きか判断がつかない。池上に来ると、やはり懐かしく、ほっとする。

金太郎さんの家に着くと、大喜びで迎えてくれた。愛子さんは「立派になったねえ。苦労したでしょう」と、褒めてくれた。ウスイの小うるさい優しさと愛子さんの大らかな優しさ、これも甲乙付けがたい。

夕食は鶏酒。いつものメンバーが集まって小宴。

4月1日

昼食には、愛子さんがまだ食べたことがないだろうからと、粟粥を炊いてくれた。何となく甘くて、それなりに美味しいのだが、米飯のようにお腹が一杯になった気がしない。息子さんの明生が、山に行つて藤の芯を取ってきてくれた。藤はトゲだらけの太い蔓で、民生はキズだらけだ。金太郎さんが「こいつは、兄さんたちにアミスの食べ物を食べさせたいと言って、一人で藤を取りに行つたんだ。慣れていないから、キズだらけだ」と、笑っていた。

藤の芯は塩で茹でるだけだが、苦みがあつて酒の肴にはピッタリだ。味よりも、愛子さんと息子さんの気持ちが嬉しい。

午後は、近所の家々を回り、帰国の挨拶。夜は、明日一足先に帰るSの送別の宴。いつものように、酒と歌と踊りが12時過ぎまで続いた。その後は、金太郎さん、愛子さんと内輪の宴会。

4月2日

朝、10時半の汽車で、Sが先に帰る。その後、金太郎さん夫妻にミチコの

件を相談した。昨年、ミチコの母親が私にビンロウを渡し、それを私が受けとって噛んでしまったのが事の発端である。ビンロウを渡すのは求婚の意味で、それを受けとるのは求婚を受け入れたことになるのだ。初めてアミスと接した私には、そんな文化があることは知るよしもない。それで、すぐに妹として、これからも大事にするということにしたつもりだし、金太郎さん夫婦も、その様にミチコの母親に言ってくれた。

ところが今年来てみると、母親の方はまったく諦めていない。自分の娘は日本人と結婚することになったと、公言しているという。

私はともかく、ミチコが可愛そうである。今年やっと15歳の、まだ子どもでもある。母親が言い張れば、その気になりかねない。ともかく、私の無知が原因だから、はっきりさせておかなければならない。

愛子さんは、ミチコの母親の見栄でこんなことになったと手厳しい。金太郎さんも、あれは酒の上の楽しみだったはずだと否定的だ。

その後、ミチコの母親を呼んで、ひたすら謝り、理解してくれるようにお願いした。その場は、ミチコの母親も「わかりました」と、納得してくれた。このために、一日出発を遅らせたのだから、一応の目的は果たせた。

夜は、私の送別会。愛子さんが、トアピの親戚にも声をかけたらしく、若い娘たちも含めて大勢参加してくれた。これは、愛子さんの作戦だった。踊りの時に、最近ミチコが当たり前のように私の隣に入るのだが、今夜は、金太郎さんの親戚の家政指導員の女性が、トアピの娘を引き連れて私の回りで踊り、ミチコが入らないようにしてくれた。

その夜は、遅くまで宴会が続いた。トアピの人たちは、明日見送りたいからと、泊まり込んでくれた。広大な金太郎さんの家も、さすがに満員状態。

4月3日

朝から、トンソ、リボンが酒を飲もうという。別れの水盃だという。皆が、次々とお土産を持ってくる。愛子さんは、私が好きなバナナ餅を2升分用意してくれていた。これは重い。昨夜、私をガードしてくれた家政指導員さんは、ピヨピヨ鳴く小鳥のおもちゃをくれた。まだ、お前は子どもだと言いたい

のだろう。

9時過ぎの汽車で出発、皆、ゾロゾロと駅まで見送りに来てくれて、いつまでも手を振ってくれた。池上の人たちと、池上の街並みに手を振りながら、私はいつもの疑問を繰り返していた。

「何故、こんなに優しいのだろう。何故、再び会えるかどうかもわからない旅行者に、これほどの思いやりを注いでくれるのだろう」。これは、私にとって、アミスの文化の研究以上に重要なテーマとなった。その疑問を解くために、またここに来なければならない。

1972年 第3回調査

1972年3月2日

昨年の夏は、熱気球を飛ばすプロジェクトをやっていたので、台湾に来る時間も資金もなかったが、ようやくメドがついたので三回目のアミスの調査に行けるようになった。

今回は、Sも同行しない。2回いっしょに調査に行ったがそれぞれの関心が違うため、聞きたい内容が一致しないので、やはり単独調査が良いということになったのだ。

今回は、少しでも調査時間を長く取るために、羽田から飛行機で台湾の松山空港へ飛び、台北で1泊し、翌日いつものようにスリル満点のバスで花蓮へ行き1泊、池上で2泊してから宜湾へ直行した。これまでは樟原を拠点にしていたが、時間が惜しいので、宜湾に拠点を移すことにしたのだ。時間が惜しいこともあるが、昨年、ウスイに言われたせいもあった。

「サトル、本島人（戦前から住んでいる漢民族のこと。戦後大陸から内戦で蒋介石が率いて逃れてきた漢民族は外省人という）のところにいと、アミスは気持ちが悪い。本島人は狡いから、アミスの財産を奪ったりして嫌われている。次からは、うちに泊まりなさい」というのが理由だ。私たちにとっては、本島人も皆親切で良い人たちなのだが、その忠告に従うことにしたのだ。

一年振りなので三仙台も丘の上の境界も懐かしい。バスの運転手が覚えていてくれて、バス停ではなくウスイの家の前で降ろしてくれた。ここら辺は適当だ。

ウスイとアヒナが満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。まずは、手と顔を洗わされた。相変わらず小うるさい。

アミスは、挨拶をくどくど言う習慣がない。会った時の挨拶と言えば、「ガアイホ」だけである。これは英語のハローの様に、時間帯に関係なく使われる。帰るときも「ミノカイ ト カコ（私帰る）」だけである。また、ありがとうに相当する感謝の言葉がない。だから、喜んでいるのかどうかわからない。また、同席している人を紹介しない。これは、フェイス トゥー フェイス、つまり顔を合せる範囲が社会となっているためだろう。



（宜湾遠景：右手の海岸沿いの白い部分が集落。少し大きいのは教会）



（宜湾の海）



（夕暮れに漁に出るテッパイ＝竹筏）

そんなことを考えながら、まずしばらくは互いの近況などを話していると、どこで聞きつけたのか、知らない人が盛んに出入りしてなにやら慌ただしい。すると、ウスイが言い出した。

「サトル、せっかく来てくれたのに悪いけれど、この家を建て替えることにしたんです。この家ももう古いし、サトルが来ても部屋もないからね。お父さんと相談して、ちゃんとした家を建てることにしたんです」

となると、忙しい最中に世話になるわけにも行かない。それで、「明日、樟原に行って、田さんの所に泊まります」というと、とんでもないと怒られた。

「サトル、私はね、サトルが何月何日に来ると知らせてくれたから、ちゃんと準備しています。この家がなくても、親戚の家があるんだし、親戚とも相談してあります。だから、サトルの世話くらいできます。来るなり他所に行くなんて、絶対に許しません」とウスイは頑固に言い張る。アヒナも、「なあに、サトルさん、心配ない。大丈夫、大丈夫」と言って止めるので、しばらくは様子を見ることにした。

そこへ、伝道師のリボクが顔を見せた。

「おう、サトル、来ましたか。良かった、良かった。お元気ですか」と、相変わらず日本語をかみしめるように話しかけてきた。

「せっかく来たのに、あんたのお母さん（ウスイ）が、丁度家を新築するって言うからね。でも、かえって勉強には良いでしょう。これもアミスの習慣だから、よく見たら良い」と言って、アミスの家の建築（註4）について、色々教えてくれた。昨年、私たちの調査に何回か同行しているので、要領がわかっているのだ。そして私は、その日から2軒後のリボクさんの家で寝起きすることになった。

私が着いたのはパクロト（家の建築前の会議）の当日であつたので、日程的に最後の落成式までは滞在できそうにないが、かなりの部分は見られそうだ。これは、予想外の幸運だと内心喜んでいた。

その夜7時からパクロトが始まるということで、三々五々親族の人たちや近所の人たちが集まり始めた。こんな時には何となく席が決まっているら

しい。入口付近にはウスイの親族の男たちが坐り、女たちは土間の北側（炊事場の入口でもある）、親族の青年たちは土間の南側、私やアヒナ、近所の男性たちは土間の奥の西側である。土間の奥だから上座かと言うとそうではない。ここは発言権のないただの参加者の席だとのことだ。入口付近がアミスでは上座らしい。なお、集まった親族はウスイの親族だけである。前にも書いたがアミスは婿入り婚なので、ウスイの家にアヒナが婿で入ったのである。従って、これはウスイの家の改築なのである。

最後になって、青山さんと中村さんが現れた。この2人がこの家のヴァケ（広義の母方オジ）である。2人が入口の両側に席を占めると、パクロトが始まった。

この日の出席者は、ウスイの所属するパチダル（pa-tsidal）氏族から8名、ウスイのヴァケの息子のチカトパイ（tsi-katop-ai）氏族から5名とチラガサン（tsi-rangas-an）氏族から1名、ウスイの祖父の氏族であるチヴィディアン（tsi-vidi-an）氏族から4名、ウスイの3人の妹の夫が3名、近所から2名の計23名であった。女性は出席者として数えないが、ウスイの妹たち、アヒナの妹たち、近所の人の妻たちなど8人ほどいた。アヒナも出席者として扱われない。

会議は、中村さんの挨拶から始まった。中村さんはpa-tsidal氏族から婿に出たvakeの最年長の息子で、やはりヴァケあるいはミトアサイ（mi-to' as-ay：ヴァケの男系子孫）と呼ばれていた。挨拶の内容は、一族のウスイの家を建てるので、親族の皆は協力しなければいけない、近所の人も助け合って欲しいというもので、その後アヒナが日程や段取りを説明した。その後中村さんが再度立って、各家、毎日1人は手伝いを出すこと。出せない場合は1日50元（約500円）の罰金を支払うこと等の約束事を話した。その後は、酒を飲み、ビンロウを噛み、タバコを吸って宴会である。本来は、中村さんが祖霊へ家の改築について報告するなどの祭祀もあったそうだが、カトリックが浸透しているため、今では割愛されている。

酒が入ると、その場は私の歓迎会に移行。青山さんが立って挨拶をしてくれた。

「今日は、パチダルのパクロトである。日本からサトルが、わざわざ駆けつけてくれたのだから、私たちパチダルの者は、この建築を一致団結して成

功させて、日本人に恥ずかしくないようにしようではないか」と言うような内容であった。別に駆けつけたわけでもないが、このようなストーリーにするのは、アミスの得意とするところだ。

宴会になると、いつもの乾杯攻めである。今までは複数できていたから分担して逃げることもできたが、1人では逃げられない。夜半には、完全に酔いつぶれてしまった。

3月3日

朝5時半起床。まだ胃がむかついているのに、朝から山盛りのご飯。さすがに断ると、早速ウスイのお説教が始まった。

「あんまり無理に飲むからいけない。酒ばかり飲んでると体を壊すでしょう。ちゃんと考えて飲みなさい」とのことだけど、昨夜は「あんたの歓迎会なんだから、さあ飲みなさい」と、散々私に飲ませた一人ではないか。

一日中むかつく胃袋に悩まされながら、リボクやウスイに家造りについて話しを聞いた。考えてみると、これが生まれて初めての単独調査だ。少し自信が持てた。

夕方、ウスイの家の2軒後のリボクの家に荷物を運ぶ。明日はいよいよミタスタス(家壊し)なので、今後はここで寝泊まりすることになるのだ。リボクのお母さんのロゲが、相変わらずアミ語だけでペラペラ話しかけてきては笑っている。

夜は、ウスイの家で宴会。今夜限りでこの家も壊されるので、本来なら家に住み着いている祖霊に挨拶する場面なのだが、この家ではまだ死者はでていないし、ウスイの祖霊はウスイの生家に住んでいるはずなので特に儀式は無い。その夜やって来たのは話し上手の青山さん、身振り手振りで日本の歌ばかりうたう中村さん、この二人はヴァケとして参加している。その他、ウスイの妹のオクサン(「オクサン」は、個人名である)。その夫の浜田さん、この人も日本の海軍に従軍していた。それに一番年下の妹のミオコと夫のマサチ、リボクであった。さすがに、しみりした宴会だった。

3月4日

朝3時頃、リボクの家で目を覚ますと、ウスイの家の方で人声がする。も

う家の解体が始まるのかなとは思ったが、昨夜も12時過ぎまで飲まされていたので、さすがに起きる気になれずウトウトしていたら、益々人声が大きくなってくるし、凄い物音もする。慌てて駆けつけて見ると、もう柱一本残っていない。周りには60人程が右往左往している。ぼくに気づいた青山さんが声をかけてきた。

「サトル、遅いよ。あんまり家が小さい上に、こんなに大勢来たから、20分で家がなくなったよ」と、笑っている。確かに、少し太めの柱が8本ほどで、後は茅と竹と薄い板だけの10坪ほどの家だったから、これだけ人手あればあつという間だったろう。数人が後片付けをしているだけで、他の人は手持ちぶさたそうにタバコを吸ったりおしゃべりをしている。すぐに朝食になった。ザルに盛られたハクハク（おこわ）と丼に盛られたシラオ（塩漬けの豚肉）で、5、6人ごとに車座になり、手づかみで食べる。私も、アミス式会食の初体験ができた。その日は、敷地の地固めを手伝った。目の前の海岸から直径20～30センチの丸石を運んできて、敷地にピシリと並べるのである。明日には、その上にコンクリートを流して平らにするらしい。何しろ人数が多いから、これも2時間ほどで終了。今日の作業はここまでとのことで、中村さんが皆に礼を言い解散した。



（建築中のウスイ家：左からウスイ、アヒナ、植園、大工、ドゲ、リボク）

昼は、リボクの暇を見つけてトロ老に会いに行った。昨年よりもさらに老い込み、もう質問などできなかったが、思い出深い人なので、とにかく会え

て良かった。夜は、ツパイ顧問を訪ねたが、夕食後行ったのが間違いで、既に酔っ払っており、結局散々飲まされただけで帰ってきた。

こうして第3回目の調査が始まったが、後にも先にも、これほど辛い調査はなかった。どうもタイミングが悪かったようだ。訪ね歩いた物知りと言われている人が留守だったり、引っ越していたり、亡くなっていたりと計画の3分の1しか会うことができなかった。初めての単独調査という経験不足もあったし、この頃はまだ人見知りする方で、初対面の人と話すのが苦手だったこともある。

ともかく、宜湾について2週間を過ぎても、一向に調査が進まない。10日も過ぎた頃からは、正直なところ着いた頃の元気は完全に失せてしまった。家の建築と言っても、次の棟上げ式まではこれと言った儀礼もなさそうだし、それも帰国するまでに間に合いそうにない。ひとまず帰国して出直そうかとさえ考えた。そうは言っても、来てしまった以上ともかく続けるしかない。「調査は水もの」と自分に言い聞かせながら、ともかく毎日口述者を探して、海岸アミの村々を歩きまわった。

この頃は、徒歩かバスしか交通手段がなかった。ただし、バスは一日4往復程度なので、あまり使えない。バスで行って、帰りは歩きと言うことが多かった。10km程度歩くのは、ほぼ毎日のことだった。20km歩いたことも何度かあった。

しかし、苦し紛れにやったことではあったが、存外後から役にたった。歩いていて集落に入ると人と出会うと、たいがい声をかけられた。「日本人ですか」「どこへ行きますか」などである。この頃は、薄汚れたナップザックを背負って歩いていたから、日本人だとわかったらしい。それと、ここ数年、この海岸線に日本人が訪ねてきているという噂が広まっていたらしい。そして、日本人だとわかるとたいがい家に連れ込まれた。いずれにせよ、こうして宜湾から北の大港口までの村を全て歩きまわる結果となり、あちこちの村に知り合いができた。後でわかったのだが、調査というのは情報が肝心なのだ。この時は、仕方なくやっていたが、後になってからこの時知り合った人たちからの情報にずいぶん助けてもらった。

この時の私の調査の目的は、まず広くアミスの文化や社会を知ることだった。文献である程度学んではいたが、やはり実際に話を聞くとよく理解できる。その中から自分のテーマを探したかったのだ。ただ、前の調査の頃から興味があったのが、親族についてだった。アミスはこれまでの研究では母系制社会であると言われていた。母系制というのは、生まれた子どもは母の集団のメンバーとなり、財産は母から娘へと相続され、役職や地位は母から娘か息子に継承され、婿入り婚を行うというのが典型的だとされていた。日本人には馴染みがないので興味を惹かれていたのだ。

そんな中で、あるきっかけで調査のテーマが掴めた。この調査の時はリボクの家泊まっていたのだが、私がある朝5時過ぎまで寝ていると、リボクのお母さんが「いつまで寝てるんだ。大ヴァケが来るよ」と脅す様にして起こした。最初は「お仕掛けが来る」と言っているのかと思ったが、「大きなヴァケが来る」と言っているとわかった。この場合の「大きな」は「一番偉い」というような意味のようだ。母系社会だから、女性が偉いのかと何となく思い込んでいたのだが、それほどヴァケが偉いということは、どういうことだろうと疑問が湧いてきた。そう言えば、ウスイの家の建築でも、指揮しているのはヴァケと呼ばれている中村さんや青山さんだ。二人とも他の家に婿に入っている。それに、この二人の次に中心的役割を果たしているのは、ウスイの母の婿に出た兄（tsi-katop-ai氏族に婿に行った）の息子のラバクである。ラバクはチカトバイ氏族のメンバーであるにも関わらず、ウスイのパチダル氏族で大きな顔をしている。これは、どういうことなのだろうと思ったのだ。

ちょうど調査にも行き詰まっていたときに、身近なテーマが見つかった訳だ。家族や親族のことだから、誰に聞いてもわかる。そこで、出歩くのを止めて残りの日程はこのテーマに集中することにした。

まず調査すべきは、親族名称である。自分を中心として、父母や叔父叔母をどう呼ぶかである。なお、日本では呼びかけるときは「おかあさん」とか「おじさん」と言う風に表現が変わってくる。これは親族呼称であり親族名称とは異なっている。しかし、アミスでは親族名称と親族名称が一致している。



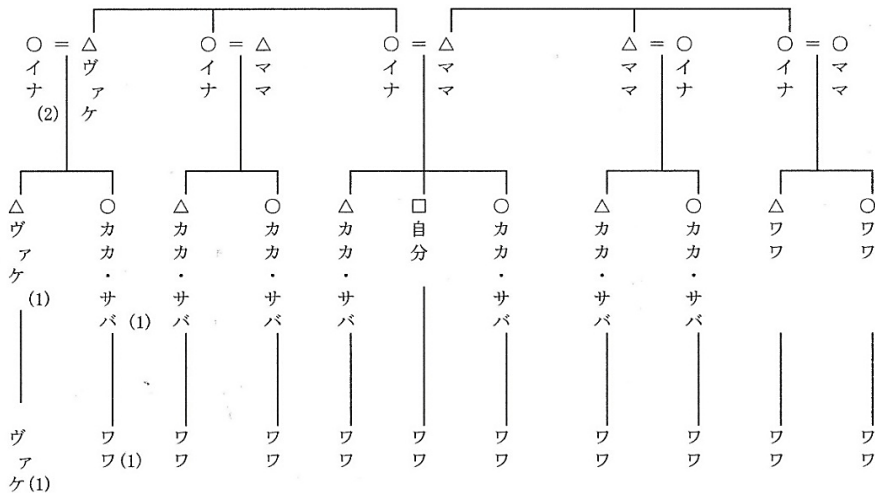
(リボクの母、ドゲ)

アミスの親族名称は単純である。基本的に自分より上の世代の女性はイナ（ina）、男性はママ（mama）、同世代で自分より年上ならカカ（kaka）、年下ならサバ（saba）、自分より下の世代はワワ（wawa）である。日本で言う祖母とか祖父もイナ、ママであるし、孫もワワ、イトコもカカかサバである。ところが、母の兄弟については少し違ってくる。母の兄弟だけはヴァケと呼び、さらにその息子、さらにその息子までヴァケと呼ぶ。つまり自分と同世代であっても、下の世代であっても母方オジと同様に呼ぶのである。つまり自分より上の世代とするのである。これは単に呼ぶだけではなく、そのように接するということでもある。反対に、自分が男性である場合は、父の姉妹の子どもは同世代のイトコであってもワワ、つまり子どもと呼ぶのである。これも子どもとして接するということである。

ヴァケは畏怖され、尊敬されるべき存在とされている。ヴァケをないがしろにすると、不作、不猟、不漁、事故、病気など様々な厄災を被ると信じられている。反対に、ヴァケを喜ばせることは、その反対の結果、豊作、豊猟、豊漁、安寧、健康、富裕などの良い結果をもたらすことになる。それに対してヴァケは、自分をヴァケと呼ぶ人々を、庇護し彼らの利益を守ってやるべきだとされている。宜湾では、ヴァケの親族名称が、ヴァケの息子、さらにその息子にまで継承されていることがわかってきた。つまり、父のラインで親族

名称やその役割が継承されているのである。母系制と言われていたアミスの社会に、父系ラインが存在することになる。何故このような父系ラインが存在するのかをテーマにして、これから事例を集めていこうと考えた。

図表 2. 海岸アミの親族名称



- (1) mi-to'as-aiとする地域もある
(2) vaiとする地域もある。

3月11日

午前中、日課のノート整理（夜は毎晩酒を飲まされるので、翌朝前夜のできごとや仕入れた話をノートすることになっていた）をしていると、ウスイが飛びこんできた。「サトル、すぐに着替えなさい」と、凄い剣幕で言う。昨夜着替えたばかりだからこれで良いと言っても聞かない。仕方なく着替えると、厳しく点検してから「金太郎さんが来ているから、おいで」と案内する。きちんと世話していると見せるために着替えさせたのだろう。大急ぎで植園さんの家に行くと、金太郎さんと愛子さんが来ていた。

「おう、サトルさん、元気か？あんまり長く帰ってこないから、おかあさん（愛子さん）が心配してな。とうとう見に来たよ」と、大喜びで話しかけてくる。「サトルさんが出た後、おかあさんが毎日、食べ物に慣れないだろう、病氣していないか、娘につかまっていないかとうるさくてたまらん。それで、そんなに心配なら見に行こうと言うことになって、やって来たんだよ」と言う。まったく、どこまで優しい人たちなのだろう。バスに乗るとすぐ酔ってし

もう愛子さんが、わざわざこんな遠くまで来てくれるとは思ってもよらなかった。金太郎さんと植園さんとは、戦争中に日本軍の軍人仲間、戦友だという。それもあって訪ねてきたらしい。

その夜は、北隣の村の戦友も駆けつけ、植園さんの家で大宴会になった。青山さんやリボクも参加していたが、二人とも金太郎さんの話しに圧倒されて大人しかった。「アミスの言葉だけであれだけの話しができる人は他にいない」と青山さんが言っていた。アミ語は3千語から4千語の語彙があるとされており、不足する語彙を日本語や中国語で補っている。しかし金太郎さんはアミ語だけで話しをできるらしい。

金太郎さんのお兄さんの大高正一さんは、この地域でも有名だと、青山さんが教えてくれた。その話しによると、正一さんは終戦まで小学校で教員をやっていたが、終戦後に国民党が大陸から逃げてきて政権を握ると、これに反発して辞職したという。その当時、反国民党の活動が台湾各地で盛んになり、原住民にも参加するように反国民党側から要望があったという。この頃はまだ、原住民の部落には武器が大量に隠されており、しかも日本軍に従軍した若者も多かったので、軍事的にもかなりの勢力だったという。正一さんは、アミスの大頭目として有名だったので、当然誘われた。他に当時はパイワン族とブヌン族に大頭目がおり、この3人が相談したという。他の二人は反乱に賛成し蜂起しようと主張したが、正一さんが反対したので原住民は反国民党の暴動には参加しなかったという。これが、2・28事件（1947年の反国民党の民衆蜂起事件）の結果を左右したという。正一さんはその後、沖縄との密貿易を企て、成功（宜湾の南10kmほどの港町）の港から船を出したが途中で難破、全財産を失ったという。この村にも、その密貿易に参加した人が何人かいるという。私の専門ではないが、詳しく聞いたら面白い歴史秘話になるだろう。

翌朝、金太郎さん夫妻は帰っていったが、朝食が面白かった。ウスイが「サトルさんは日本人だから、うちでは朝にはパンを食べさせてる」と、パンらしきものを出してくれた。アヒナが長方形の木箱の左右に電線を繋げたアルミの板を置き、間に小麦粉を溶いたものを入れて電気を入れて焼き上げるという、かなり怪しげなものだ。イースト菌も何も入っていないから、ガチガチの塊ができる。勿論バターもジャムもない。自分の家では私を大事にしているというウスイのアピールなのだろうが、不味かった。

金太郎さん夫妻が帰ってから、さらに宜湾での調査を続けた。ウスイやアヒナは家造りに追われていたが、リボクや青山さんなどが可能な限り協力してくれたし、浜田さんやオクサン、ミオコやマサチが生活面で世話をしてくれた。あまりにも迷惑をかけすぎていると思って、何度も樟原や池上に行こうとしたが、その都度「勉強が終わるまで許しません」とウスイに一喝されて駄目になった。

3月26日

宜湾での調査を終えて、池上に向う。昨夜は、勿論送別会。家はまだ完成していないので、浜田さんの家で送別会をやってくれた。今回は一人で来て3週間もいたので、片言のアミ語も分るようになったし、アミスの歌もいくつか歌えるようになったので、みんなも喜んでくれた。もう少し長期滞在すればもっとアミスの言葉も覚えられるだろう。

今朝、起きてみると、家の前にダイコンの束だの、バナナの房だの、藤の芯の束だのが積まれていた。お土産に持って帰るようにと置いて行ってくれたのだろうが、どう考えても無理なので、ウスイに頼んで返してもらった。そう言えば、滞在中には魚や伊勢エビ、バナナの房などが、時々家の入口に置いてあった。誰かが私に食べさせようと置いていつてくれるのだ。御礼を言おうにも、誰が置いたか分らない。後ろ髪を引かれる思いというのを初めて感じつつ、皆に見送られて出発した。バス停まで歩こうとすると、皆が「かまわん、かまわん」と言っ、家の前で待てと言う。結局通過するはずのバスを強引に止めて乗り込んだ。

バスで台東まで行き、池上行きの列車を待つ間に駅近くの店で昼食。この頃の私の好物は排骨麵というブタの骨付きアバラ肉を揚げたものを乗せた麵だった。それと500ccのパパイアの生ジュース。これには練乳を入れるのが普通だが、特注でヤクルトも入れてもらっていた。

1時の汽車で池上へ向う。宜湾も好きだが池上は何故か故郷のような安堵感がある。2時半頃金太郎さんの家に着くと、やはり大喜びして迎えてくれ、そのまま宴会に突入。池上では私の好物は鶏酒ということになっているので、早速鶏が締められ、あつという間に御馳走が並べられた。いつものメンバーもすぐに駆けつけてきて、大騒ぎになった。途中で見たこともない料理

が出てきた。金太郎さんが、「これは日本人が好きなパンだ。さあ、食べなさい」というが、まあ、パンらしきものではあった。ウスイに対抗して作ってくれたのだろう。金太郎さんはワサビ醤油で食べていた。

飲んだ勢いで、宜湾で覚えてきたアミ語を披露してみたが、あまり通じない。池上はアミスでも秀姑巒アミと呼ばれるグループで、宜湾は海岸アミであるため、方言が異なるのだろう。

こうして、私の第3回目の調査は無事に終了。何とか成果らしきものも挙げることができ一先ずは満足して帰国した。

1973年 第4回調査

1973年6月中旬にウスイからハガキが来た。7月14日から収穫祭があるので、至急帰りなさいと書かれていた。大急ぎで準備を終え、ギリギリまでバイトで稼ぎ、7月5日に台湾に向かった。私にとって4回目の台湾調査である。

7月5日

昼過ぎに台北に着き、ホテルにチェックインしてから、父の古い友人のLさんを訪問。Lさんは、70歳位の本島人（第二次世界大戦前から台湾に定住していた漢民族）で、大変な食通。おかげでいつも美味しいものを食べさせてくれる。この時は昼は四川料理、夜は広東料理を御馳走してくれた。

Lさんの奥さんが、「これから蛮地に行つて、ろくな食事もできないだろうから、たっぷり栄養付けて行きなさい」と言ってくれた。同じ台湾に住んでいても、原住民の生活は野蛮だと信じているのだ。多民族国家の難しさを改めて知らされた。

Lさんとの夕食を終え、ホテルに戻ってフロントでカギを受けようとしていると、「サトルさん」と後から声をかけられた。見るとリボクさんではないか。思わず駆け寄ると、抱きついてくる。「懐かしいねえ。懐かしいねえ」と涙ながらに何度も言う。こちらもホロリとさせられてしまった。とりあえず、ホテルのバーでビールを飲みながら話をした。

「サトルさん、本当によく来たね。卒業論文も終わって、仕事（調査のこと）も無くなったから、もう台湾には来ないかと思っていたよ。でも、やっぱり来たね。アミスを忘れないね」と、リボクは手放しで喜んでくれた。ウスイから、私の予定を聞いたと言う。それからリボクは、自分が何故台北にいるかを説明してくれた。

昨年11月にリボクの母のロゲが亡くなった。そのため体が不自由なりボクの面倒を誰が見るかで親族の間で話し合いがなされ、ロゲの弟の妻の家が引き取ることになったが、結局は気まづくなって宜湾を離れたという。台北に出てきてカトリックの教会を頼り、伝道師として採用されたが、宜湾のような田舎と違い、台北での伝道活動は脚の不自由なりボクには身体的に難しかった。そのため伝道師を辞めて政府の職業訓練所に入り、裁縫技術を習っているという。リボクは話そうとしなかったが、宜湾から飛び出すのは余程のことがあったのだろう。頼り切っていた母を失い、親族も失って、おそらく失意のどん底にいたのだろう。そこへ私が来たので、余計に嬉しかったのだろう。私にしても、昨年散々世話になったリボクに、台北に来て早々会えたので嬉しさに変わりはない。夜中の一時を過ぎても話は尽きなかった。

7月7日

いつものようにバスで花蓮に行き一泊し、そこからバスで宜湾に向った。相変わらずのデコボコ道を5時間揺られてようやく宜湾に着いた。見慣れた宜湾の風景が見えてくるとやはり懐かしさがこみ上げてくる。

バス停を降りると、付近に居た人たちが一斉に集まってきた。

「サトル、また来たね」「ご飯食べたか?」「まだ、元気だね」などと話しかけてくる。子どもたちも「サトル、サトル」と呼びかけてくる。何だか自分の村に帰ってきたような安らぎを感じる。

ウスイの家に着くと、パナイとフラウが気づいて、「ミノカイ ト チ・サトル（サトルが帰った）」と大声で叫ぶ。すぐにウスイとアヒナが飛びだしてきた。

「よく来たねえ。元気だねえ」「さあ、さあ入って、入って」家の中に招

き入れてくれる。新築の家だが、前の家とほぼ同じ構造だ。入ったところは土間で左手（南側）に部屋が二つある。西側にも一部屋。右手にドアがあり、炊事場と食堂になっている。



（ウスイ家での夜の宴会）

「さあ、これがサトルさんの部屋ですよ」と、アヒナが荷物を運び入れてくれたのは、左手の東側、3畳ほどの部屋で、畳が敷いてある。

「去年、サトルさんが帰った時、もう来ないと思っていたんだよ。研究も終わったし、台湾に用が無くなったものね、サトルさんは、また来ると言っていたけれど、もう来られないだろうねって、皆で話していたんだよ。でも、また来たねえ。やっぱりサトルさんはウチの子だねえ」と、ウスイがしみじみ言う。するとアヒナが口をはさんだ。

「だから私が言っただろう。サトルさんは必ず帰って来るって。宜湾の家を忘れないって。私にはサトルさんの気持ちがわかるからね」

どういう訳か、私はアヒナと一番気が合う。極端なまでに無口だし、物知りでもないの、共通の話題があるわけでもない。しかし、何故か一緒にいても気にならない。そしていつも遠くから見守ってくれている気がするのだ。

その夜は、当然歓迎会だ。青山さんや浜田さん、植園さん、マサチなども加わっての食事はやはり楽しい。久しぶりの米酒がうまかった。

7月13日

朝4時過ぎにウスイに起こされた。今日はミサフラツアン (misa-furatsuan) と言って、イリシン (i-risin: 収穫祭) の準備の日で、12、3歳~35歳前後の若者は、カエル獲りをしなくてはならないという。イリシンは、フィナオラン (finaorang: 男子年齢階梯組織) (註5) が中心の儀礼である。

私はカパ (kapa' h: 青年階級) の6つのカプット (kaput: 年齢組) の下から3番目の組で、私たちのより上の組はカエル獲りの監督だけで良いが、私たち以下は言わば第一線の兵隊としてカエルを獲る役が命じられている。私は、気楽に参加したが、上の組の前に整列して、「一人2斤 (1.2kg) 獲ってこい。獲ってこなければ罰を与える」と、命令された。

さて、カエル獲りと言われても、勿論分かるはずがない。まず、どこにいるかも分らない。ウスイが気を利かせてフラウを付けてくれたので、フラウに手を引かれて海岸段丘の上の水田に行った。この時期、宜湾では田植えの前なので、水田には水ははってある。確かに、そこら辺中で、ゲコ、ゲコとカエルの大合唱である。しかし、声はすれども姿は見えずである。さて、どうすると考えているとフラウが自分を指さし、こうしろとばかり手本を示してくれた。

まず、カエルの泣き声がする方で足音を立てて近づいていく。すると泣き声がぴたりと止んで、ポチャン、ポチャンとカエルらしきものが畦から水田の水に飛び込む。泥水だからカエルの姿は見えないが、水面に蛙が泳いだために巻き上げられた泥の航跡が浮かぶ。それを見て航跡の少し前に手を差し込み、泥と一緒にカエルを捕まえるのである。捕まえたカエルは持ってきた針金に突き通しておく。これも、いささか抵抗があったが仕方ない。

フラウが捕まえたのは小さな雨蛙ほどのカエルである。これを1.2kg分捕まえるとなると、何匹捕まえないといけないのだろうと、思わず計算して見た。一匹10gもなさそうなので、最低でも120匹、おそらくは150匹は必要そうだ。フラウのおかげで捕まえ方は分ったが、理論と実践は違う。水田を這いつくばって頑張ってみたが、30分でやっと2匹捕まえただけだった。7時までという時間制限があるので、この調子だと10匹にもならな

い。それでも、やるしかないので頑張った。ところが、習うより慣れろである。だんだんコツが掴めてきて、それなりに針金のカエルも増えてきた。締め切り時間直前には、23匹になっていた。とは言え、あと100匹は足りない。そこへ姿を消していたフラウが、マサチの娘のサナイやフミを連れてやって来た。それぞれ針金に通した4,50のカエルを持っている。あの日本人はとても駄目だと思って、応援してくれたのだ。

フラウが全部のカエルを1本の針金にまとめて、私に持たせて家に帰ることになった。家並みに入ると、フラウとサナイは「サトルが、カエルを獲ったぞ」大声で叫び回った。獲物を持って凱旋する私の晴れ姿を見せびらかせようと言うのだろうが、その時の私の格好は、海水パンツ一つの泥まみれ。晴れ姿にはほど遠かったが、フラウたちの声に、何人かのアミスが出てきて、大笑いしたり、はやし立てたりしていた。

家に着くと、ウスイたちが待っており、ひとしきり私の姿に大笑い。ウスイは、「で、サトルさん、あんたは何匹獲ったのかい」ときく。「23匹」と答えると、また大笑い。

その後、ママーノカパ（mama-no-kapa'h：青年組頭の組）が待つ広場に獲物を持っていき、検査を受けた。獲物を差し出すと、ママーノカパは口をあぐり開け、私の顔と獲物をしげしげと見つめた。そして、この日本人どうなってるんだという風に首をかしげながら計量してくれた。一応、2斤ちょっとなんかということにしてくれたようだ。他のカパたちも獲物を持って集まってきたが、皆、私の倍近くも持ってきていた。

カエル取りが終わったからと言って放免されるわけではない。カパは、休む間もなく今度は海で魚取りをしてこいと命じられた。今度は、一人3斤のノルマである。これは無理だ、と思ったが、拒否できるわけではない。ところが、ママーノカパの一人が私を呼んで、「お前は無理だから魚を獲らなくても良い」と言われた。助かったと内心喜んだが、「その代り、11時まで海から上がるな」との条件が付けられた。まあ、魚取りは無理だから、その程度の努力はしろ、ということなのだろう。すぐに海岸に向かい、泳ぎ始めた。海での泳ぎは好きだが、かれこれ3時間続けて泳ぐというのは経験がない。幸い波が穏やかだったので、泳いだり浮いたりを繰り返して時間を過ぎた。

11時になったとフラウが合図してくれたので、岸に上がって広場に行くと、今度は昼食の準備である。これがまた、大仕事と言って良い。カプット毎に仕事を割り当てられる。薪を集めに山へ行くカプット、カマドを造り、大鍋を用意し、皿代わりのパロ（ビンロウ樹の葉の根元部分、竹の皮に似ている）を集めるなど食事の準備をするカプット、年寄り組の坐る場所に日よけの小屋がけを作るカプット、そのための竹や藤、茅を集めるカプット等々。私たちラホキには、日よけの小屋がけ造りが割り当てられた。

切り出してきた竹の棒に、穴を開けたり、竹の皮で縛ったりして柱と梁を組み立て、連結し、ビンロウの葉やゲットウの葉で屋根を葺く。あっという間に広さ30畳位の日陰ができた。私は、皆の器用さに見とれているだけで、手も足も出せない。広場の片隅には、海岸の石を運んできて急ごしらえの大きなカマドが作られ、大鍋が2つ置かれていた。ともかく、どの作業を見ても手際が良い。

正午を過ぎた頃から、三々五々マトアサイ（年長者）が集まってきて、カプット毎にまとまって座る。最年長のカプットが全員そろくと、まずその組から食事を運ぶ。今朝方私たちカパが獲ってきたカエルの塩ゆで、各家庭から届けられたハクハク（おこわ）をパロに盛って出すのである。カエルはアミスにとっては高級食の一つなのだ。マトアサイの全部の組に食事を配付し終えてからは、マトアサイが食べ終わるまで、カパは回りで踊っている。



（食事の準備をする若者組）



（マトアサイの食事）

マトアサイは、食事を終わると談笑しながら帰って行った。マトアサイの食べ残しに大鍋に残ったカエルの塩煮を加え、次はカパ以下の食事だ。カブット毎に円陣を組んでしゃがんでハクハクとカエルの昼食が始まった。

カパの上の組から食事を終わり、残った食べ物は下の組に渡す。もらった組も満足すると、さらに下の組に残り物を渡す。こうして一番下のパカロガイ（準青年組）には、かなりの量の食べ物が渡される。彼らはそれを食べきらなければならない。とても食べきれぬ量ではないので、パカロガイが残そうとすると、上の組の者がよってたかって無理矢理食べさせる。昔は本当に全部食べさせたそうだが、今は形だけで済ませていた。



（カブット毎の食事）

カパの昼食が終わる頃になると、またマトアサイたちが集まってきた。カパたちが、あちこちの家からプラスチックの椅子を集めてきて、日よけの

下に席を設ける。これから、宜湾のコモン（komon：顧問、日本語をそのまま使用、註6）の選挙があるという。私も何回か会って話を聞いたことのあるツパイがコモンだったが、最近亡くなったので後任を選ぶという。

コモンは、最近の名称であって、本来はカキタアン（kakitan：頭目と訳されていた）というアミス本来のムラの首長のことである。宜湾は南隣の重安と博愛里という行政村を形成しており、博愛里には里長（いわゆる村長）が、普通選挙によって選ばれているが、里長は中華民国の行政制度であって、これとは別にアミスの首長としてコモンを置いているのである。

里長は、日本と同じ様に成人の住民の投票で選ばれるが、コモンはマトアサイたちの互選によって選ばれる。女性は一切タッチできない。一応、そう言う決まりだが、今回のコモンの選出を見ていると、中高年の女性たち、いわゆるおばあさんやお母さんたちの井戸端会議の方が決定力がありそうだった。「○○は、口先ばかりだ」「△△は、女好きだ」「xxは、奥さんとの仲が悪い」など、情報を持ち寄って話し合っており、一番人気のある男性が決まっていた。男性のみの互選と言っても、家で奥さんや母親からこの決定を吹き込まれているので、結果は明かだ。どこの国でも、強いのは女性なのだろうか。

マトアサイが集まると、青山さんが議長役を買って出て、コモンにふさわしい人を推薦するように求めた。こんな小さな村なのだから、それほど揉めないと思っていたが、意外と皆興奮していた。3人ほどが立って、誰かを推薦する演説らしきものをやっていたが、かなり熱くなっていた。その後、投票が行われ、マルタが36票、以下13票、5票となってマルタがコモンに選出された。マルタは長身の優しそうな老人だが、あまり嬉しそうではなかった。後で青山さんとアヒナに話を聞くと、宜湾はだいたい3つの派閥があり、その内の2派閥がマルタに投票したという。この派閥は、親族関係に基づいているという。小さな村でも、それなりの葛藤はあるようだ。

選挙が終わるとそのまま解散。私も家に帰って一休みした。さすがに疲れていたし、何となく熱っぽい。

夕方5時になると、再びカパは全員集合。今度はパカラビ（pakarabi：夜の会食）の準備である。ブタの半身をぶつ切りにして、大釜で塩煮し、米酒を運び込み、竹のコップやパロの準備などであるが、パカロンガイとカパの一番下のラコカイがほとんどやるので、すぐにご用済みになり、家に帰って休憩。

7時に、再びカパの集合がかかる。ウスイがアミスの民族衣装を着せてくれた。キピン（kiping：短上着）にカヤップ（kayapu：短い腰巻き）、その上にイナピル（inapir：帯）をグルグル巻き、その上からタパフス（tapafus：脚の前だけを足首まで覆うズボンの様なもの）を着る。それからタポロス（taporos：ボシエットの様な小物入れ）を肩から袈裟懸けにして一応終わり。最後に、ウスイがメノウの装身具を2条持ってきてくれ、左右の肩から袈裟懸けにした。長径2センチ近くのメノウが、1条に61個も連なっているという豪華なものだ。「ムコ入り前の息子だから、きれいにしないとね」と、ウスイは笑っていた。

かなり恥ずかしかったが、途中で行き会う人から冷やかされながらともかく広場に駆けつけると、もう踊りが始まっていた。ママーノーカパ（青年組頭の組）が踊りの先頭になり、以下上の組から順番に手を繋いで踊っていた。踊りの先頭にいるママーノーカパの最年長者は右手に長い杖を持っており、一人おきに体の前で手を交叉させて繋いで踊るのである。私もラホキの所に入って踊り出した。同じ組の場合、年齢が上のものが前になるので、私はラホキの4番目だ。しかし、カパが踊っているだけで、まだ見物人もまばらで何となく白けたが、それでもひたすら歌いながら踊る。広場の真ん中には大きなたき火が燃やされており、それが唯一の照明となっている。たき火の周囲に円形に椅子が並べられている。30分ほどそうやって踊っていると、三々五々、マトアサイがやって来て並べられた椅子に座っていく。これも一番上の組から順番に坐っているようで、若い方の組から埋まっていく。女性や子どもも、広場の回りに続々と詰めかけて見物している。



（カパの盛装：左から二人目が私）

「ヘイヤーホホ、ハイヤーホホ」と単調な歌をうたいながら、カパはマトアサイの席の周りを何十回となく踊りながら回った。少しでも踊りを怠けたり、歌をごまかしたりすると、ママーノーカパから組名を挙げて怒鳴りつけられる。酷いときは、尻を竹の棒で引っぱたかれる。

踊り始めて一時間も経った頃、ようやく最年寄りのマトアサイたちが席に着いた。彼らは、マトアサイの中でもカラス(karas: 日本語からの可能性がある)と呼ばれている。これで、メインゲストは全部そろったらしく、ママーノーカパが「さあ、みんな集まったから頑張って踊れ」と、大声で命じる。そして、ママーノーカパの組がすぐ下のラヘイタイ組に、「ラヘイタイ」と怒鳴る。するとラヘイタイ組は、次の組に「ラシカン」と怒鳴る。こうやって一番下のパカロンガイまで行くと、パカロンガイの組は「オウ!」と応える。この声も、精一杯の大声で出さないとやり直しを命じられる。しかし、さすがにみんな疲れているようで、やけっぱちの感じである。私も、脚は棒みたいだし、喉はカラカラ。水を飲むのは禁止である。時折パカロンガイが、バケツに入れた米酒を竹製のひしゃくで飲ませてくれるのが唯一の水分。イリシンがこんなに重労働だとは、思ってもいなかった。

10時頃になってようやく休めの号令がかかった。カパは、踊りの体制のまま、その場に座り込んだ。すると、青山さんが中央に進み出て演説を始めた。今日の昼に行われたコモンの選挙の結果を発表しているのだ。前のコモンのツパイの功績を称え、新コモンのマルタがその役職を引き継ぐことになったことを正式の宣言したのだ。そして、新コモンを中心に、宜湾の村民の一層の団結を呼びかけるかなり長い演説であった。次に新コモンのマルタが立って、コモンに就任した挨拶をしたが、こちらは簡単なものであった。

マルタの演説が終わると、また踊りが始まった。20分ほど休んだとは言え、疲れ果てている。こうなればヤケだ。余計なことは考えずに、ひたすら踊り、歌い、飲んだ。踊っているカパに、時折回りの暗闇から娘が駆け寄ってきて何か渡している。ビンロウやタバコらしい。収穫祭の時に、娘が踊っている男性にビンロウを渡してプロポーズするという話を聞いていたが、これがそれらしい。ビンロウには懲りているので、渡されないことを祈るのみだ。しかし、見てみると片っ端から男性にビンロウを渡している娘もいる。おば

さんたちもビンロウを渡しに来ている。プロポーズとしてのビンロウの授受は、そう多くはないようだ。ただ、時折娘がビンロウを渡すと、回りのカパたちがはやし立てるときがある。これはプロポーズなのだろう。こういうことは、聞き取りではわからない。やはり実際に見聞するしかないようだ。

夜中の12時頃になると、ママーノカパの組とパカロンガイが、夕方料理した豚肉を、パロに載せてマトアサイたちの所に運んできた。マトアサイたちは昼の時と同じ様に組毎にしゃがみ込み、食事を始めた。これはパカラビ（pakarabi：夜の食事）である。パカロガイが酒を注いで回る。

昼の会食と違う点は、マトアサイたちが食事をしている間も、カパは回りで踊り続けていなければならないことだ。もう、ほとんどフラフラ状態だが、それを知ってか知らずか、マトアサイたちは談笑しながらノンビリと食事をしている。それでも、30分もすると、一人二人と連れだってマトアサイたちは満足げに帰って行った。しかし、どこの世界にもいるらしいタチの悪い酔っ払いが数人いて、なかなか帰ろうとしないどころか、酒を飲み続け、カパたちに「踊れ、踊れ」と怒鳴ったりしている。中には酔っ払って坐ったまま居眠りしている老人もいる。マトアサイが一人でも残っている限り、カパは踊り続けなければならないのだから、何とも恨めしいが、まさか年長のマトアサイに帰れというわけにもいかず、みな顔を見合わせながら踊り続けた。とは言え、しばらくすると居残ったマトアサイの奥さんたちが現れ、叱りつけて連れ帰ってくれた。

踊りは終わり、マトアサイたちの食べ残した豚肉やハクハクで今度はカパの食事が始まった。その間、ママーノカパたちがお説教。歌の声が小さい、踊りに元気がない、仕事をさぼっている等、メチャメチャに叱られた。しかし、これも儀式的なものらしく、誰も気にしていないようだ。その後、後片付けをして解散したのは午前1時半過ぎだった。こうして、朝の4時過ぎに始まった、恐ろしく長いイリシンの準備の日が、ようやく終わった。

疲れ果ててウスイの家に帰り、倒れ込むように寝たが、1時間もしないうちに、凄まじい寒さを感じて目が覚めた。いくらふとんを被ってもガタガタと震えが止らない。おまけに手足が言うことをきかない。これは高熱を出しているなど、やっと気づいた。一瞬マラリヤかなと思ったが、台湾にはもう

マラリヤなどあるはずがない。風邪か日射病だろうと思ったが、とにかく涙はボロボロ出るし、震えは止らないし、身動きもできない。ウスイを起こそうかと思ったが声すら出ない。

台東の病院までいくら急いでも3時間はかかる。もう駄目かと思ったが、まあ、それも良からうという気がした。これも本望だ。とは思ったものの、やはり心細さは募るばかり。単独での調査は、複数での調査よりずっと楽だけれど、こういう非常時には困るものだ。10分か20分だけ経って、ようやく震えが止ってきた。まだ手足に力が入らないが、恐る恐る起き上がって持ってきていた抗生物質を3錠飲み下した。それで、少し自信が出てきたので、台所について湯冷ましをコップに2,3杯飲んだ。その後も、朝まで何度か震えが発作的に起きたが、その感覚もだんだん間遠になり、朝にはスッキリしていた。しかし、その後一週間ほどは、時折熱が出たうえ、胃痛と下痢に悩まされた。

多分、急に過激な運動をしたために、生理構造が狂ってしまったのだろうということにした。後にも先にも、台湾で病氣らしい病氣になったのはこの時だけだが、台湾なら開けていて生命の危険などあり得ないという気楽な考えは、さすがに改めた。それなりの心構えと準備は必要なのだ。

7月14日

今日は、ミフォロッツ(mi-foro')と言い、この日はカパ以外の村人も踊りに参加できる。踊りは午後からだというので、午前中は、ウスイ、アヒナ、浜田さんに、様々な農耕儀礼の話を聞いた。これまでの調査でも何度か聞いているが、実際に収穫祭をやっている最中に聞くと、また違った話しが出てくる。

午後2時から踊りが始まった。私は、この日もカパの盛装で参加した。昨日と同じ様に、まずカパが踊り始めた。その後しばらくすると、三々五々マトアサイや中年のおばさんたちが集まってくる。マトアサイは、今日も日除けの小屋がけの下に並べられた椅子に座り、見物している。マトアサイの服装は、アミスの民族衣装を着ていたり、洋服だったりとまちまちだが、おばさんたちはたいがい民族衣装を着ていた。ただ、どちらもカパや娘の衣装ほど派手やかではなく、地味な感じだ。おばさんたちは、遠慮なく踊っているカパの

間に入って踊りに加わるが、娘たちはなかなか入ってこない。未婚の娘が未婚の男性の隣に入って踊れば、それは公然たる「愛の告白」であり、さすがに尻込みしている。

その内、ママーノカパがパカロンガイに大声で何か命令した。するとパカロンガイたちは、広場のあちこちを走り回り、キャーキャー言う娘たちを捕まえては、恋人とおぼしき男性の隣に引きずって行って、踊りの輪に無理矢理入れる。ほとんどの娘は満更でもなそうで、抵抗していた割にはあっさりと一緒に踊り始めるが、何人かは本当に怒って踊りの輪から逃げ出す娘もいる。そんな時は、引きずっていったパカロンガイが、ぺろっと舌を出したり、頭をひねったりしている。そうこうしている内に、娘たちも自分から踊りの輪に入ってくるようになり、踊りの輪が大きくなっていった。昨夜のカパの踊りは、むしろ精悍な感じだったが、今日は華やかさばかりだ。



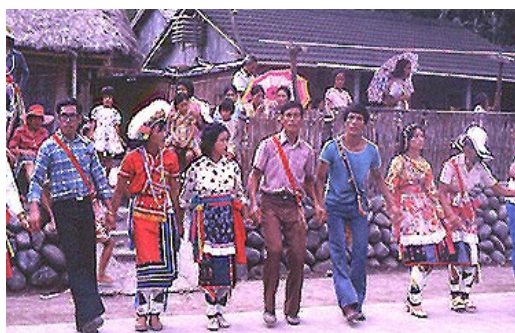
（マトアサイの回りで踊るカパ）



（女性も参加しての踊り）



（踊るパカロンガイ）



（ママーノカパの踊り）

私の両隣には、ウスイが手配したらしく、オクサンの娘のアムイとサウマの娘のラカウが入って踊っていた。アミスは成員権が母系制なので、この

二人と私は、実の兄弟と同様で結婚できない。こういう所がウスイの芸の細かいところだ。

1時間ほど踊った後、ママーノークパの命令で踊りが中断され、パコモラン（pa-komor-an：演説）があった。新コモンのマルタが、全村民に対して団結を呼びかけるだけの簡単なものだった。夕方6時過ぎには踊りは終わり、早々家に帰って休んだ。さすがにまだ体調は最悪。食事もそこそこにとまかく寝た。

7月15日

この日は第二回パコモラン（演説）の日で、前日同様、昼過ぎに踊りが始まり、合間にマルタの演説があった。夕方、踊りが終わった後、カパが集められ、翌日の準備のために各組に仕事が割り当てられた。客用の日除け作り、タケノコ掘り、カエル、沢ガニ、カワエビ獲り等の仕事である。日除け作りは、夕食後すぐに済んだが、カエルなどの獲物を獲りに行かねばならない。夜11時頃、ラホキの仲間が迎えに来て、山の沢に登っていった。ラホキは、カワエビ、沢ガニ獲り担当なのだ。2日前のカエル獲り同様、真つ暗な中では何をどうしてよいかわからない。早々に、「ミノカイト、サトル」と、帰るように進められた。要するに足手まといでしかないらしい。当然の判断である。ここは意地を張らずに素直に従って帰宅した。

7月16日

今日は、ピアラタン（pi-arat-an：招待の日）で、お客を招待する日である。朝7時過ぎにカパは集まり、昨夜獲ったカエルや沢ガニ、カワエビ、豚肉等の料理、客用の椅子や机の準備、客用の竹箸、竹コップ作り、酒の買い出し等、凄まじい忙しさである。私は、昨夜早々に追い返されて寝る時間があつたが、他のカパはほとんど寝ていないのではないだろうか。それでも、皆テキパキと立ち働いている。私は、もっぱら回りをウロウロするばかり。

12時前には全ての準備が整い、さて休みかというそうではない。仕事を終えたカパには、民族衣装に着替える時間だけが与えられ、すぐに踊りを始めた。1時前から、近隣の村の代表者、教員、警察、兵隊、役人などの招待客が席に着き始めた。パカロンガイたちが、食事や酒の給仕をしている。



（女家長の踊り）

今日は、50歳位までのマトアサイもカパの踊りの先頭の方に加わり、娘たちもどんどん参加してくる。また、この踊りの組とは別に、フォツォーノーロマ（fotso-no-roma' h: 女家長）たちの踊りの列もできていた。こちらは、かなり高齢の女性たちが多く、黒っぽい民族衣装で派手さはないが歌と踊りには迫力がある。やがて二組の踊りの列は、先頭から接近し、二列になって広場を踊りながら回ったり、渦巻き状になったり、分れたりという複雑な踊りの流れを繰り返した。地縁に基づいた男子年齢階梯組織の踊りの列と、血縁に基づいた女家長の踊りの列とが合体する様は壮観だった。この二組の踊りが、収穫祭のメイン・イベントと言って良いだろう。村落を形成し狩猟（漁労）を行う男性と、親族を形成し農耕を行う女性が一体化することで、豊穡や繁栄を願うのであろう。

真夏の台湾でしかも好天。気温36度以上はありそうだ。そんな中で昼から踊り続けるのはかなりキツイ。しかも水を飲むことはタブーなので、時折竹のコップで飲ませてもらう米酒だけが唯一の水分。しかも、単調な歌を歌い続け、単調な踊りを繰り返しているのだから、一時間もしないうちに気分的にはハイになる。思考能力が停止し、トランス状態に入り込む。私も、後半になると何の記憶も無くなっていた。

招待客は3時頃には帰っていったらしいが、踊りは相変わらず続いている。女家長たちの踊りは、適当に休んでいるが、カパの方は休みなどない。ひ

たすら踊り続けるだけである。踊りが終わったのは夕方6時頃だった。その後は、後片付けといつものお説教である。その後、食べ残しを集めて食事をして、ようやく解散。しかし、まだ終わったわけではない。

夜8時に再びカパの集合が命じられた。カパーマサーオポ(kapa' h-masa-opo' : カパの集まり)である。広場の片隅に、ママーノカパの組を中心に、カパ全員が円陣を作って座る。イリシンの間は、鬼かと思えたママーノカパが、この時は打ってかわって優しくなっている。ママーノカパが次々に立って、イリシンの間の皆の働き、頑張りを誉め、協力してくれたことに礼を言う。そして特によく働いたもの15名の名前を挙げ、皆の前に立たせ表彰して酒を飲ませる。それが終わると、ママーノカパのすぐ下の組の者が、ママーノカパの指導に賞賛と感謝を述べて、タオルや洗面器などを贈る。これに対してママーノカパは、皆の前に立って深々と頭を下げて感謝する。その後は、処罰もあった。6人の若者が呼び出され、イリシンの時怠けていたと叱られ、一人タバコ一箱の罰金を科せられていた。確かに、私が見てもかなりサボっていた連中だ。ママーノカパはよく見ているものだ。

その後は、パングラツ(pa-angratsu : 呼びかけと言うような意味か)になった。これは、自分の好きな娘の名前を、公衆の面前で公表するという行事なので、いつの間にか周囲にたくさんの村人が集まっていた。

まず、ママーノカパから順番に、円陣の中央に出てきて、「チ ママ アコ チーカツアウ、チーウィナ アコ チーパナイ、チーロゲ、ヒヒン！」というように大声で叫び、最後の「ヒヒン」を言いながら右脚で地面を踏み鳴らすのである。これは、「父は、カツアウ、母はパナイ、その娘ロゲ」という意味である。右脚を踏み鳴らすのは、地下に眠る祖先に誓うという意味である。ママーノカパはたいがい結婚しているから妻の名前を言うが、それでも他の者は囃し立てる。未婚のカパが、こうやって娘の名前を告げて、相手の親もその気があれば、親が飛びだしてきて乾杯することもある。こういうときは、回りも大賑わいである。

収穫祭の時、娘が踊っているカパにビンロウやタバコを渡すのが、いわば女性側からのプロポーズの第一歩であり、次に踊っているカパの隣に入って踊るのが、第二歩であるが、このパングラツで初めて男性側からの積極的な意思表示がなされるのである。いずれにせよ、この行事はひたすら娯楽で

あって、イリシンで疲れ果てたカパの慰労の意味もあるようだ。

7月17日

今日は、パ克蘭（pa-kurang：儀礼的川狩り）である。パ克蘭は、様々な儀礼の前後に行われるもので、男性だけが川に行き、カワエビ、沢ガニ、魚、ウナギなどを獲るのだが、女性の参加は禁忌となっていることから、私は狩猟の一種と考えた。アミスは、狩猟は男性、農耕は女性という厳しい分別がある。したがって、男性だけで行う川での漁は、狩猟と捉えた方が理解しやすい。

宜湾の村の真ん中あたりに、海岸山脈から流れ出た宜湾系が流れているが、この中流部分は、このイリシン後のパ克蘭のために禁漁区と指定されている。午前中、カパがここに行き川狩りを行った。石を積んで川の流れを堰き止め、網で獲物を獲るのであるが、一年間禁漁になっているので、カワエビやカニ、魚、ウナギなどたくさん獲れた。それを広場に持ち帰り、集まって来たマトアサイに御馳走するのである。これで、イリシン自体は終了である。

夜は、カプット毎に場所を決めて、カプットの宴会が行われた。これをミスダル（mi-sudaru：意味不明）と言う。本来なら、イリシンで残ったハクハクを醸造して酒ができる一週間ほどしてから行われる行事だが、都会に出稼ぎに行っているカパも多いため、イリシン期間中に終わらせることになったそうだ。

この時は、それぞれ妻や恋人、母親と一緒に出席する。料理はもっぱらカパがやる。イリシンの間、陰で手伝ってくれた女性たちへの感謝の意味の宴会のようだ。

ラホキのミスダルは夕方7時頃から始まった。私はウスイと一緒に参加した。とにかく、ママーノークパがいないカプットだけの集まりだから、ただ楽しめば良い。ラホキ独自のしきたりを作ろうと言う者がいて、全員上半身裸で参加することが決まった。次にスープはドンブリで回し飲みにもすることにした。しばらくすると、コモンのマルタが顔を出し、イリシンの間の労をねぎらってくれた。

酒が回ると、昨夜と同じパン格拉ツをやろうと言うことになり、勝手な名前を言って大笑いした。歌と踊りも、勝手な歌詞や振り付けで大いに盛り上がった。あまり日本語が通じる世代ではないが、こうなると言葉など必要ない。同年代だし、何しろ一緒にイリシンでしごき抜かれたのだから、気心は知れている。足手まといで大して役に立たなかったとは言え、私も最後までイリシンに参加したので、カプットの一員として認められるようになっていたのが嬉しかった。

体調も最悪だったが、何とか5日のアミスの収穫祭を体験できた。見よう見まねで山刀の使い方も覚え、カエル獲りや川狩りのやり方も覚えた。話して聞くだけでなく、実際に参加して、男子年齢階梯組織のこともよく理解できた。コモンの選挙も見ることができ、やはり体験に優るものはないと、かなりの満足を覚えていた。それにしても、えらくキツイ日々だった。

7月18日

北隣の胆幔部落のイリシンがあるというので見に行った。胆幔は、プロテストントが浸透しているために、イリシンはあまり迫力がない。さすがに疲労が酷いので、早々に宜湾に戻って休んだ。

夕方、ウスイが「サトル、今日からは川で水浴びしなさい」と言う。これまでは、台所でタライの水を浴びていたのだが、どうやらイリシンをこなしたので、部落の人間として認められたらしい。それが嬉しくて、浮き浮きしながらフラウと一緒に川に向った。

パ克蘭で行った宜湾溪は、河口から20メートルほど上流に橋がかかっている。この橋から更に50メートルほど上流の所で川は大きく北へ曲がっている。その付近が女性の水浴び場で、その30メートルほど上流が男性の水浴び場となっている。別に境界が決まっているわけでも囲いがあるわけでもないから混浴同然である。今までウスイが川での水浴びを許してくれなかったのは、そのためだったのだ。

川に沿って男性の水浴び場に行くには、どうしても女性の水浴び場の傍を通らなければならない。私が行くと、たちまち歓声が上がった。

「サトル、こっちにおいで」

「サトル、ムスメのオッパイ大きいよ」等と、からかわれる。こっちが照れて下を向いているのを良いことに、言いたい放題だ。

男性の水浴び場について、裸になり生ぬるい川の流に仰向きに浸かった。谷間になっているので、兩岸のうっそうとした木々の上に青空が広がっている。うれしさがこみ上げてきた。別に混浴同然を喜んでいるわけではない。イリシンで苦勞して、やっと他の村人と同じように川で水浴びを許されたのだ。言わば、宜湾という村のメンバーシップを獲得できたのだ。そんな感動に浸りながら、適当な石に頭を預け、ポケーツと手足を川の流に任せていた。

7月19日

今日は、一日ひたすら休み。朝からひたすら寝ていた。夕方起き出して、カレーを作る。日本のカレーが食べたいとアヒナが言っていたので、カレーのルーをお土産に持ってきていたのだが、ウスイは作り方が分からないと言うので、自分で作ることにした。タマネギ、ニンジン、ジャガイモ、ニンニクと豚肉があるので、そう難しくはない。作っていると、浜田さんが顔を出した。「懐かしい匂いだ。軍隊で食べたカレーの匂いだ」と喜んでいる。アヒナも、嬉しそうにしている。

夕食には植園さんもやってきて、日本時代の話に花が咲いた。台湾にもカレーはあるのだが、味も色も匂いも全然違う。日本のメーカーのルーなのに台湾仕様になっているらしい。日本の軍隊経験のある人たちには、受け入れられないようだ。

夕食が終わった頃、ひとつ上のカブットのラシカンのラバクが顔を出し、明日、山に獺に行こうと誘ってくれた。イリシンに参加した効果だろう。これは、楽しみだ。

7月20日

朝6時にラバクが迎えに来た。私は、アヒナの山刀と籐で編んだ飯入れカゴを持って、ついていった。フラウも来たが、ウスイが許さない。まだ、子どもには早いというのだ。

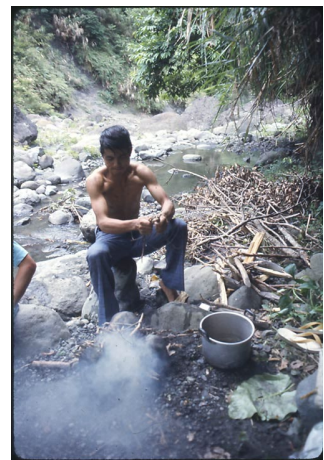
ラバクは、私より3歳年上で、がっしりした体格ながら、冗談を連発する

明るい男だ。収穫祭の時に、何くれとなく私に気を使ってくれていた。二人で、宜湾系を遡り、海岸段丘を越えて海岸山脈を登って行った。標高200メートルあたりに来ると、回りは熱帯雨林の様に、ビッシリと木々や藤などに覆われてきた。獣道らしきあるかなしきの道を、ラバクは迷う様子もなく辿っていく。上り坂になると、足が早くなる。ともかくついていくしかない。途中ラバクが手招きで呼ぶ。行ってみると、地面を指さす。湿った地面に、足跡らしきものがいくつもついていた。「ヤマブタ、男(オス)、3歳」と、ラバクが言う。それから、ヤマブタの足跡の見分け方を細かく教えてくれた。ヤマブタかどうかは、足跡の形で分る。オスかメスかは足の運びで分る。年齢は足跡の深さで重さを推定して判断する。その他、キョンやセンザンコウの足跡も地面に形を描いて教えてくれた。この山にいるのは、それくらいだという。さらに登って行って、何箇所か罠を仕掛けたところを検分して回った。どの罠にも何もかかっていない。罠は、ワイヤーと細い木を使ったもので、その作り方や仕掛け方、仕掛ける場所の選び方なども教えてくれた。途中で、急に足を止め、匂いを嗅げと合図してきた。何か腐ったような匂いがする。ヤブの中でガサガサとかすかな音がした。ラバクは、左手に細い棒を構え、右手に山刀を持って身構える。しばらくすると、ヤブの中から1メートルほどの黒っぽいヘビが出てきて横切っていった。ラバクが、「百歩蛇だ」とささやいて教えてくれた。噛まれると、100歩も歩かないうちに死ぬと言われる猛毒の蛇だ。蛇は、匂いで探知できるということは知らなかった。

ラバクは、藤を何本か切り、皮を剥いて白い芯を集めたり、タニノワタリの若芽を摘んだり、シュロの芯を採ったりして背負いかゴに入れていた。



(獲れたカワエビ、川魚)



(山での料理)

少し広めの谷川の川岸に着くと、枯れ枝を集めろと言われたので、何往復かして集めた。その間にラバクは、地面に穴を掘ったり、簡単な炉を作ったりしていた。そして、ゲットウの葉を何枚か切り取ってくると、掘った浅い穴に敷き詰めた。私が炉のところで火をおこして焚き火をしていると、石を何個か火の中に放り込んだ。そして、今度は川に入って沢ガニや小魚を探し始めた。大した量は獲れなかったが、それでもそれぞれ20匹ほど獲れた。次に、ゲットウの葉を敷き詰めた所に、沢ガニや小魚、藤の芯、ゲットウの芯、タニノワタリの若芽などを入れ、川の水を加えると、焚き火の中から石を何個か取りだして、そこに放り込んだ。どれくらいの温度になるのかは分らないが、結構湯気が上がってきていた。そこに、ラバクは塩を幾摘まみか放り込んだ。これでおかずの出来上がりだ。私が運んできたカゴの飯とで、野性味あふれる昼食を食べた。箸も皿もないから、全部手づかみだったが、かなり楽しめた。

昼食後は、後片付けをして帰路についた。下りだけだから、帰りは楽だ。歩きながら、どうやらこれはウスイが仕掛けたことだと思いついた。収穫祭に参加し、アミスの青年としてそれなりに認められるようになったのだから、一人前のアミスのカパになれるよう、山での猟の仕方も覚えた方が良いということになったのだろう。それで、信頼できるラバクに頼んだのだろう。確かに、この猟の後は、かなり自信が持てるようになってきた。

帰宅する途中に川で水浴びして、家に着くと夕方まで眠ってしまった。夕食にはラバクも参加して、今日の私の行動を、皆に面白おかしく話してくれた。そして、最後に「この若い日本人は偉い。何でも学ぼうとする」と誉めてくれた。

7月21日

今日は、池上に向うことにした。台湾に来てまだ挨拶もしていないので、とにかく顔を出さなければならない。ウスイも、「サトルの本家は金太郎の家だから、行かなければだよ」と言う。

9時頃のバスで台東に向った。台東で排骨麵を食べ、500ccのパパイヤの生ジュースを飲むのが、台東での楽しみだ。排骨麵は、ブタのアバラ肉のか

ら揚げが載せられた麺で、店毎に味が違うので楽しめる。パパイヤジュースは、顔なじみの店があり、ここは、生のパパイヤに練乳を加え、さらにヤクルトを足したジュースを飲ませてくれる。ヤクルトを足すと味がスッカリすると思って私が頼んだら、それが定着したのだ。

3時頃池上の金太郎さんの家に着いた。昼寝の時間帯なので静かだったが、遊んでいた子どもたちが、「サトル、サトル」と騒いだので、寝ぼけ眼の金太郎さんや愛子さんが起きてきた。

「おう、サトル、来たか。ほう、真っ黒になって、カパらしくなったなあ」と、金太郎さんが、しげしげと私の顔を見て言う。愛子さんも、「サトルさん、黒くなったねえ」と笑っている。この二人の顔を見ると、何故かホッとする。宜湾のウスイの家も安心感があるが、金太郎さん一家の包み込むような優しさは、確かに実家という感じがする。

いつものように、裏庭のニワトリが締められ、夜の宴会の準備が始まり、料理ができるまでの間に金太郎さんと愛子さんに、宜湾での収穫祭のこと、山での猟のことなどを話した。池上は、漢民族との混住が長いと、男子年齢階梯組織も無くなっているし、収穫祭も行われなくなったそうだ。ただ、池上のアミスは、元々7月には収穫祭は行わず、9月頃行っており、月見祭と呼んでいたそうだ。

金太郎さんは、宜湾のイリシンの話しに、盛んに感心していた。「偉いなあー、そんなにまで昔のやり方を残して、偉いなあー」と、盛んに言っていた。また、私がカプットの一員として、カエル獲りや準備、踊りなどに全部参加したことにも驚いていた。愛子さんは、「日本人に何もそこまでさせなくてもいいのに」と、いささかご立腹。そんな話をしている間に、料理もできてきて宴会が始まった。どう聞きつけたのか、トンソやリボンなどいつものメンバーが集まって来て、飲んだり歌ったりの相変わらずの騒ぎだった。

7月22日

今日は、富里へ行った。実は、海岸山脈の中に、キビット (Kivit) という村がある。アミスの神話では、大洪水の時に、石臼に乗った兄と妹がそこに流れ着き、そこから現在のアミスが拡まったとなっている。そのため、何とかそ

の村に行きたいのだが、交通手段がない。東海岸からなら静浦という所から、池上の近くなら富里から山道を歩くしかないというのである。今回は、富里からの道の様子を聞いて、どちらからアプローチするか決めようと思っていたのだ。

金太郎さんが面白がついてきてくれ、富里の友人の所へ案内してくれた。その人の話では、確かに道はあるがあちこち崩れているし、かなり危ない道らしい。アミスの脚でも、富里から4時間はかかるという。私の脚なら7, 8時間かかりそうだ。途中に、店もなければ人家もないらしい。どうも、このルートは無理なようだ。もっとも、静浦からのルートも、4時間の山道だというからあまり変わりはない。今の時代に、そんな村があるなど信じられないが、そうなるとうまうまう行ってみたくなった。

夜は、トンソの家で宴会。池上方面は友人のSが調査しているので、私はもっぱら飲み歩くことにしている。

7月25日

池上でノンビリ過して充分休養できたので、宜湾に戻った。金太郎さんの家を出るときに、「カパなんだから自分の山刀を持ちなさい。これはウスイの家に預けなさい」と、金太郎さんが山刀をくれた。その山刀をウスイに見せると、ウスイが大喜びした。



(山刀)



(同年組のピヌンと)

「これは、お前の大切な蕃刀だから、誰も使うことはできない。いつも、この家に置いておくから、来たときにお前が使えばよい」という。「私は、たまにしか来ないのだから、お父さんや兄さんが使ったらよい」と私が言うと、「いや、これは、お前のもので、誰も使うことはできない」という。私は、その時やっとピサーイツトゥーアノートブヌス (pisa-itsut-an to bunus : 山刀を預ける) という言葉を思い出した。「これが、pisa-itsut-an to bunusか」とウスイにたずねると、そうだという。

金太郎さんは、私が宜湾で一人前のアミ族の青年として育てられたことを認めてくれ、今後ウスイ家を仮本家とせよという意味で、山刀をウスイの家に置くようにさせたのである。ウスイ家もまた、お前の本家と同様なのだというのである。これによって金太郎家は、私の宜湾での本家としてウスイ家を正式に承認し、私を通じて対等の親族関係を結んだことにもなる。山刀一つででも、色々意味があるものだ。

宜湾でもキビットの情報を集めるが、ほとんど何もない。行ったことがある人が見つからないのだ。ウスイによると、カパという親戚はいるはずだという。しかし、住所も何も分らない。こうなったら、行くしかないので、明日向うことにした。意外なことに、ウスイもアヒナも止めない。ウスイが心配して反対するかと思ったが、ケロッとしている。本当に私が一人前のアミスのカパだと思っているらしい。正直、それほど能力も体力もない。

7月26日

誰も止めてくれないので、意を決してキビットに向って早朝出発した。ウスイがご飯とブタの塩漬け肉を弁当に持たせてくれた。腰には例の山刀を吊している。刃渡り40cmほどで、柄を入れると50cm以上もあり、日本でこんなのをぶら下げてバスに乗ったら大騒ぎだろうが、ここでは誰も気にしない。ナップザックに弁当や水筒、着替えなどを入れているので、それなりの荷物になった。重いのでカメラも持たないことにした。

10時頃、静浦のバス停でバスを降り、バス停前の小さな商店で缶入りのサイダーを4本買った。とにかく水が心配だった。ウスイが子ども用の小さな水筒を二つ持たせてくれたが、とても足りそうにない。アミスのカパな

ら水分補給できる植物を見つけられると言うが、勿論分らない。ともかく、持てるだけ持つしかない。

20分ほど歩いて秀姑巒溪の橋を渡ると、確かに山に向う幅50cmほどの細い道があった。勿論舗装などない。秀姑巒系に沿った道だと聞いていたから、これで間違いないだろう。時計を見ると10時30分だ。アミスの脚なら4時間とのことだから、今日中には着けるだろう。神話の村へ、いざ出発だ。

川沿いの道と言っても、川は時には100メートルも下を流れており、ほとんど見えない。道は急斜面に張り付くように続いており、ほとんど密林の中を通っていたが、密林の中なので風が通らないのでかなり暑い。ひとっこ一人通らない。崩れている所も数カ所あったし、倒木が道を塞いでいるところもあった。それでも、たまには人が通るらしく、一応道らしき道は続いていた。とは言え30分も歩くと気が滅入ってきた。後どれくらいあるのか、何時間かかるのか、何しろ先が読めないのだ。地図があればまだ気が休まるのだが、台湾は戦時中なので、詳細な地図は市販されていないから仕方ない。ひたすら歩き続けた。

2時間程歩いたところで、昼飯にすることにした。人通りがないから、道にそのまま座り込んでご飯と塩漬け肉を食べた。いつ着くのか分からないので、半分は残すことにした。食後の一休みと思って、そのまま横になった。道は斜面にあるので、適当な草むらを見つけて斜面に合せて横になり、木々の間にかろうじて見える青空を見上げながら、タバコを一服。何か、凄いことをしているような自信が湧いてきた。これは、いかにもプロの調査者みたいだ。そんなことを考えていると、ふとラバクと山に行ったとき嗅いだ、腐ったような匂いがしてきた。少し離れた草むらから、ガサガサ音もする。例の百歩蛇にちがいない。吸いかけのタバコを音のする方に投げ、さらにタバコに火を付け、吸ってはそちらに向って煙を吹きかけた。タバコの匂いは蛇や毒虫が嫌うと、ボルネオで兵隊に聞いたことがあったので、それを信じてやってみたのだ。しばらくすると、ガサガサいう音が遠のき、匂いも消えていた。

こういう道を歩くときは、確かに毒蛇対策は必要だろうと、遅まきなが

ら気づいて、山刀で細い木を切って棒を作り、それからは棒で前方を叩きながら歩くことにした。

さらに、2時間程歩くと、急に視界が開けてきた。密林地帯を抜けたのだが、そこから先は70度以上の断崖に、道が刻まれている。100メートルほど下には秀姑巒系が流れている。見たところ、この断崖の道は1km以上続いているようだ。先の方は川に沿って右に曲がっているのどうなっているか見えない。密林の中の道であれば、落ちて木に引っかかるから安心だが、この先の道は岩だけなので、落ちたらお終いだ。しかし、行ってみるしかないの恐る恐る歩き出した。道幅は普通に一人歩ける程度の広さがあり、気をつけて歩けば大丈夫そうだった。と言っても、直線ではなく岩肌に沿ってかなり曲がりくねっている。おまけに、直射日光をさえぎるものがないので、ひたすら暑い。時折道が崩れていて、岩肌に張り付いて蟹歩きせねばならないところも何箇所かあったが、何とか乗り切った。30分ほどかけて、ガケの道に入るときに見えていたカーブを越えると、その先が見えたが、結局同じ様な道がさらに続いているだけだった。ただ、次のカーブの遙か向こうに、密林ではなく開けた場所や人家らしきものが見えていた。キビットだ。さすがに胸が躍った。多分、あと2時間ほどだろう。そうすると、疲れも吹っ飛び、断崖の道を歩き続けた。次のカーブを越えてしばらく行くと、再び密林の中の道に入った。密林を抜けると、かなり平坦な場所に出た。畑があるし家もあちこちに見える。

時計を見ると4時になっていたが、ついに、キビットに到着だ。しかも、一人で来られたのだから嬉しい。ニワトリの鳴き声に、ホッと安堵感を覚える。宜湾や池上のように人家は密集していないが、なだらかな斜面に点在している。まずは、商店を探して、飲みきってしまったサイダーか何か清涼飲料を買おうと思って探すと、普通の民家の前にわずかな商品を並べている家があった。幸いサイダーもあったので、土産用の米酒4本と一緒に買って、片言のアミスの言葉で「カパの家はどこにある」か、聞いた。ウスイからこの名前の親戚がいるはずだと聞いていたからだ。そうしたら、もう少し上の方にカパという名前の男がいると教えてくれた。

ともかく、ここは一軒一軒が離れていて空き地が多い。少し歩いて2,3軒の家を回ってようやくカパというおじいさんが見つかった。典型的なアミスの家で、あまり豊かとは思えない。片言のアミ語で宜湾のウスイに聞いて

訪ねてきたと話したが、あまり嬉しそうな顔はしない。しばらく話していると、どこから来たと尋ねられたので、「東京」と応えると、東京はどこにあるという。「日本だ」と応えると、とたん態度が変わった。「日本人ですか、いや本島人だと思って失礼しました」と、流暢な日本語で話しかけてくる。「日本人が、こんな山奥にそんな格好して一人でくるはずないでしょう」という。山刀を下げてよれよれの格好なのだから無理もない。「日本人がここに来るのは戦争が終わってから初めてだよ。懐かしいね。さあさあ、ゆっくりしなさい」と言って、家を飛び出していった。しばらくすると、さっきの商店の人など数人を連れて戻ってきた。皆、口々に「日本人ですか、懐かしいね」と話しかけてくる。後はお決まりの米酒での乾杯。どこからともなく料理も運ばれてきて、人数も見見る増えてきた。話題はもっぱら今の日本の話である。ラジオはかろうじて聞こえるが、まだテレビもないので情報不足らしい。「今上天皇陛下は、どうされておられますか」と聞かれたときは、またかと思った。「今上天皇」などという言葉は、私たちの世代は聞いたこともないが、台湾では何度も話題になっているので、すぐ分った。「お元気ですよ」と言うと、「それは良かった、良かった」と涙ぐむ人さえいた。ともかく、調査どころではない。一方的に質問攻めである。

それにしても、この人を始め、台湾の人たちの日本への思いはどうなっているのだろう。植民地として支配し、搾取したはずなのに、日本が好きでたまらないようすである。これはおそらく、敗戦で日本の支配が終わり中華民国政府が統治するようになったが、アミスにとってはどちらもよそ者なのだ。日本の統治は厳しくはあったが、公平感があったようだ。その後の中華民国政府の末端の役人は、教育もなく賄賂を要求してばかりなどだったらしい。つまり、日本の後の政治が良くなかったから日本が余計によく見えるのだろう。

ともかく、入れ替わり立ち替わりたくさんの人がやって来て延々と宴会が続いた。疲れ果てていたが、何とか付き合っていたが、酒も入ってさすがに坐ったままウトウトしていたら、カパが寝床を用意してくれたので、喜んで寝た。

7月27日

朝から少し調査をしたが、カパはあまりアミスの文化に詳しくないし、昔のことに詳しい年寄りたちの多くが、キビットを離れて町で暮らしているという。男子年齢階梯組織もないし、収穫祭や他の儀礼も無くなっているという。一日中、聞き取りに回ったが、成果はほとんどなかった。せつかくあれほど苦労してきたのにも思いはするが、それはこっちの勝手であって、こういう空振りには慣れている。

その夜も、前夜と同じ様に宴会。こうなれば、そっちを楽しめば良い。それにしても、若い人はほとんどいない。皆、町へ出稼ぎに行っているとのことだった。

キビットに長居しても調査は進みそうにないので、翌日は帰ることにした。

8月2日

夕方、青山さんが来て、親族会議があるから参加しなさいと言う。話しによると、サイタウという青年が、遠洋漁業の船員になって航海に出ていたが、途中で事故死してしまった。会社から給料と保険金が支払われるが、それを誰が受けとるかで揉めているので親族会議を開くことになったという。

サイタウは結婚しており、1歳になる男の子がいるという。正直なところ、何で揉めるのか分らなかったが、青山さんによると、サイタウの親族は、給料と補償金はサイタウの遺産であるから、サイタウの母が受けとるのが当然だと主張しているという。アミスは母系制である。男性は婿に行っても所属は母の親族のままで、妻の親族にはなっていないのである。特に年寄りたちは、このアミスの伝統を主張しているという。これに対して、サイタウの妻のニカルは、遺産はニカルの母が受けとるべきだと主張しているそう。サイタウの遺産はサイタウの稼いだものなのだから、婿として妻の実家に入れるべきだということである。

話を聞いていて、頭の切り替えに苦労した。私の感覚では、遺産は妻と子どものものなのだが、妻と子どもが受けとるという話しはこれっぽっちも出てこない。確かに、母系制の考え方に従えば、サイタウ側の主張は正しい。

しかし、これまでのアミスは婿入り婚の場合も、妻の家の農業に従事するだけであつたから、彼が働いて得た収入は、全て妻の家のものになっていた。狩猟や漁労で獲った獲物を売ったとしても、その収入は妻の家のものになるとされていた。ただし、このような場合は、彼の個人的な小遣いになったり、彼の実家の母親や姉妹へも贈られていたが、これはこっそりであつて正式にはなかった。ということは、妻側の主張も正しいことになる。つまりどちらもアミスとしては正当な主張と言うことになる。

青山さんとしばらく話していて、青山さんもうどうしてよいかわからないらしいと察した。しかし、青山さんはニカルのヴァケなので、答を出さなければならぬ。それで私の考えを聞いたかつたらしい。

夕食後、青山さんに連れられてニカルの母親のカリティンの家に行った。カリティンの家には、15人程集まっていた。青山さん(アサラト)などのカリティン側のヴァケは、入口の南側の椅子に座り、サイタウ側のヴァケは入口の北側の椅子に座った。他の人は、奥の方にそれぞれ別れて座っていた。ニカルと思われる若い女性が、小さな男の子を抱いて座っており、その横にいるのがおそらくカリティンだろう。

宴会ではないので、酒は出ない。それでもビンロウとタバコは勧められた。やはり空気は重苦しい。ビンロウとタバコが一渡り回ると、青山さんの弟のニカルが口を開いた。

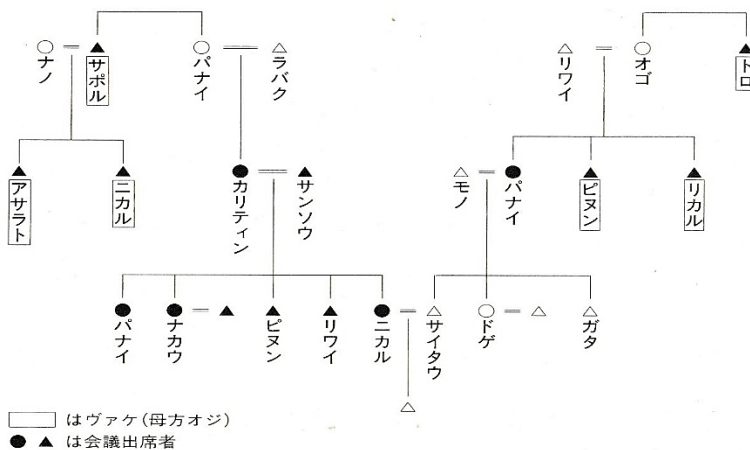


図1 サイタウとニカルの親族関係

「親戚の人たちよ、よく集まってくれた。今日、私たちが集まったのは、サイタウのためである。サイタウは皆も知っているように、真面目な働き者だった。しかし、遠洋航海に出て、事故で死んでしまった。とても悲しいことだ。パナイ(母親)の悲しみは、どれほど深いだろうか。心から気の毒に思う」

「さて、今日集まったのは、サイタウの残したものをどうするかを決めるためだ。モノ、サイタウの残したものは、どれほどだ」

すると、サイタウの父のモノが立って説明した。

「保険金が6万台湾圓と未払い給料が8千台湾圓の合計6万8千台湾圓(当時の日本円でおよそ60万円。その頃の台湾の大卒の初任給が1万台湾圓以下だったので、大金である)です」

「それは大金だ。それでは、これをどうする。皆さん、自由に意見を言つて下さい」

すると、サイタウのヴァケ(母の弟)のピヌンが口を開いた。

「サイタウは、本当に真面目で良い青年だった。姉のパナイの気持ちは壊れそうだろう。サイタウは、私たちチカトパイ氏族でこれからも祖先として祀っていく。アミスはそうなのだ。母の家の祖先となるのだ。だから、サイタウの遺産は、母のパナイが受けとれば良い」

すると、カリティン側のヴァケのサボルが反対した。

「サイタウは、本当に良い青年だった。私の本家のカリティンのカラボ(kadabo:婿)として、カリティンを本当の母のように大切にしてくれた。ピヌンは、母のパナイが遺産を受けとれば良いと言うが、婿としてサイタウが稼いだものは、やはりピーカラボーアン(pi-kalabo-an:婿入り先の家)のカリティンと一族が受けとるのがアミスの習わしではないか。それにサイタウには幼い子どもがいる。この子は誰が育てるのだ。やはりカリティンではないか。この子どものご飯は誰が食べさせるのだ。やはりカリティンではないか。それならば、カリティンが遺産を受けとるのが当たり前ではないか」

これに対してパナイの弟のリカルも口を出した。

「いや、そうではない。サイタウが開墾を手伝った田畑や、サイタウが建築を手伝った家などならカリティンのものにして良いが、このようにサイタウが稼いだものはサイタウの母親や姉妹が受けとるものだ」

こうして、しばらくの間それぞれのヴァケやニカル兄弟の言い争いが続いた。その間、女性是谁も発言しないし、ニカルやサイタウの父親も一切発言しない。未亡人のニカルも黙って泣いているだけであった。

途中から、だんだん皆興奮してきて、かなり陰悪なムードになってきた。すると、今まで黙っていた青山さんが、口を開いた。

「まあ、皆落ち着こうではないか。いくら私らが騒いでも、サイタウは戻ってこない。そうだろう？ここは、残されたものに一番良い方法を考えようではないか。幸い、ここには、日本人のサトルがいる。日本人だし、大学まで行って知識があるのだから、サトルの考えを聞こうではないか。皆も見たようにサトルは収穫祭で立派にカパとして働いていた。一人前のアミスとして、また学者としての意見を聞こうではないか」

それを聞いて、これは青山さんにうまく利用されたと思った。アミスにとって日本人は「正義」と「智慧」の象徴なのだ。どうせ揉めるであろうこの親族会議に私を参加させたのは、私に現代の智慧を披露させ、まとめようというのである。

しかし、私はアミスの文化を調査する立場であり、自分の文化を教える立場ではない。現地の文化に干渉しないことは、調査者の基本的立場である。私の意見を言うわけにはいかない。とは言っても、全員が私の発言を待っている。仕方なく、当たり障りのない答でごまかそうとした。

「日本は、結婚すると夫の家に妻が入ることが多い。そして、夫が死んでも妻は夫の家に残る。だから夫の親が遺産を受けとろうと、結局遺産は妻と子どもが受けとることになる。アミスとは習慣が違うから、日本と同じようにする必要はない」

すると、青山さんがたたみかけてきた。

「いや、サトル。お前はこうしたらよいと思う」

どうやら、青山さんは私に責任を押しつけたらしい。

「うーん、まあ、今の時代なら、子どもを育てるために遺産を使うのがいいでしょうね。これから、こういうことはまだまだ起きるでしょうから、そろそろアミスの習慣も変えなければならぬでしょうね」

かなりの問題発言ではあったが、これだけ出稼ぎが増えている現状では、変わらないとまずいとは思っていたので、思い切って言ってしまった。すると、青山さんが後を引き取って言い出した。

「さすが教育がある者の言うことは正しい。私も、これから時代は変わっていくと思う。今の若い者は、婿に行くことを嫌がっている。本島人（漢民族）の様に、嫁をもらうのが当たり前だと思い始めている。サイタウのカプットでも、婿に行ったのはサイタウだけではないか。とは言え、サイタウは婿に行った。サイタウを祖先としてこれからも拝むのは、やはりサイタウの生家なのだ。ここはこうしたらどうだろう。サトルの言うように、子どもを育てるためにサイタウの遺産の半分を子どもに残してやろう。そして残りの半分はサイタウの母親のパナイがもらってサイタウを祖先として祀ってもらおう。これでどうだろうか。それとニカルは若いのだから、すぐにでも次の夫が見つかるだろう。子どものことは、カリティンに任せれば良い」

結局、青山さんの提案は、双方の親族にとって唯一の妥協案であった。子どもの相続分は、ヴァケのサボルが預かることになって、一件落着。早速米酒で乾杯し、後は和やかな宴会となった。

この話には後日談がある。翌年私が宜湾に行くと、また親族会議が開かれるという。今度は、サイタウの乗った船が戻り、遺品のカメラが送られてきたので、それをどちらが受けとるかで、また揉めているという。青山さんが、その話をしてくれたので、私は巻き込まれるのが嫌で、こう話した。

「揉めるくらいなら、カメラを壊してサイタウの遺骨の代わりに墓に埋めたら良い」

何と、親族会議でその通りに決まったという。

8月5日

ウスイがここのところ、何度も言う。

「サトルが来てから、雨が一滴も降らない。田植え（宜湾は2期作で、8

月と2月が田植えの時期)をしたくても、水がないので困っている。皆、サトルが雨を追い払っていると言っている」

どうも私は、世に言う「天気男」らしい。確かに私が台湾に来てから晴天続きである。と言って、どうなるものでもない。

「あと三日雨が降らなかったら、雨乞いをしようとルチア会（カトリック教会の女性信者の会）で相談している」

調査の中で雨乞いの話しも聞いていたが、カトリックが宜湾に入ってから、何年もやっていないとのことだったので、もし実際に見られたらラッキーである。

「ルチア会では、サトルが見に来るならやろうという話しになっている」とも言う。

私がアミスの昔からの習慣を見たがっているというのが、浸透してきているようだ。

8月8日

朝、何人かのおばさんがやって来て、盛んに話している。ある程度はアミスの話しも聞き取れるようになっているが、おばさんたちの早口のおしゃべりにはついていけないので、ウスイに通訳してもらった。何と、雨乞いの相談だという。何年もやっていないので、どうやるかを確認しているらしい。

それにしても、カトリック教会の女性信者たちが、そんなことをしても良いのだろうかという疑問が湧く。その点をウスイに聞くと、教会の神父も賛成はしていないが反対もしないという。このカトリック教会の姿勢が、宜湾でカトリックが優勢な理由のようだ（註7）。

ウスイに教えられ、宜湾溪のいつもの男の水浴び場からさらに上流に行ってみると、30人程のおばさんたちが集まっていた。その中にカトリックの尼さんの格好をした人も二人混じっている。成る程、カトリック教会公認だけのことはある。河原には大量のゲットウの葉が積まれていた。雨乞いは女の儀礼であるので、私以外に男性の姿は見えない。そうすると近寄りがたいので、少し距離を置いて見物することにした。

3,40メートル離れていても、さすがにこれだけ女性が集まると迫力がある。年長の何人かが盛んに議論をしており、少し年下らしき女性はあちこちに集まっておしゃべりに興じている。どうやら、やり方が良くわからないらしい。それでも、何人かの年かさのおばあさんが、若手に命じてゲットウの葉を束ねたものを三つ作り、上の方を交叉させて三つ叉の支柱にして川の淀みに立てた。そしてこれに大きな飯炊き釜をヒモで繋いで川面に浮かべた。

それから、カトリックの尼さんが前に出てきて、皆でお祈りを始めた。カトリックに雨乞いの祈りなどあるはずがないが、「雨が降らずに村人が困っています。雨を降らせてください。アベ マリア」と唱えていた。

それから、それぞれゲットウの葉を持つと、淀みに立てたゲットウの葉の支柱を取り囲み、「ハイヨー、ホー、カリタン・パイヨ、パカオラル (paka-odar: 雨を降らせろ) トー」と叫びながら一斉にゲットウの葉で水面を打ち、それを大きく振り上げた。これを繰り返すのである。カリタン・パイヨは、宜湾の創始者の名前であるが、時折アベ マリアとも言っていた。そうこうする内に、浮かべられた釜に、巻き上げられた水滴が貯まっていく。どうやら、ゲットウの葉で水面を打って振り上げるときに飛び散る水滴で雨を模倣しているようである。当然、参加者もずぶぬれになっている。その内、「あんたは、まだ濡れてない」などと言いつつ、ふざけて川に突き飛ばし合ったりしはじめた。カトリックの尼さんも、完全に一緒になって楽しそうに水面を打ったり、突き飛ばし合ったりしている。



(雨乞い)

釜が一杯になると貯まった水を空け、また同じ動作を繰り返す。釜が三回一杯になった頃には、さすがに飽きたのか休む者も出てくるし、動作も緩慢になってきた。年長者がまた集まって協議をし始めた。終わり方が分らないらしい。それでも、これで充分だろうと言うことで、散会が提案された。

これまでの調査では、パカオラルは、最近夫を亡くした未亡人を集めて水をかけるなどしていじめるふりを演じ、それを見て死んだ夫が涙を流すのが雨になるとの話だったが、どうも当てにならない。アミスの感覚では、妻がいじめられるのを見て夫がそれほど涙を流すとは思えないからだ。どちらが、本来のものか分らないが、カトリックが微妙に関わっている点が面白かった。

8月9日

昨日の雨乞いの儀礼や日乞いなどの、農耕に関わる儀礼についてウスイに話を聞いて一日を過した。前回の調査は、空振りばかりだったが、今回は1ヶ月ほどで様々な内容の調査ができて充実していた。この頃から「調査は水もの」と開き直ることができるようになった。ともかく、相手の都合任せなのだから、焦っても仕方ないということが分ってきた。

夕食後、近所の浜田さん夫婦や植園さんたちも参加していつものように世間話をしていると、台所の方でウスイの緊迫した声がした。「サトル、早く来て!」、何ごとかに行ってみると、中村さんが山刀を振り上げてなにやら喚いている。アヒナが、素手で立ち向かっている。何がどうなっているかはわからないが、とりあえず止めるしかない。「中村さん、堪えてください。日本精神でしょうが」と、自分でも訳のわからないことを叫びながら、中村さんとアヒナの間に割って入った。いつも、日本精神とか大和魂だとかを自慢している中村さんなので、とっさに口にしたただけである。それと、私のような第三者を、まさか傷つけるはずがないという読みもあった。

何とか刀を取り上げて、中村さんを座らせ、酒を飲ませて落ち着かせた。中村さんは、すでにかなり酔っていたが、それでも山刀を振り回したわけを話し始めた。要するに、財産争いが原因である。中村さんも婿に入っており、奥さんの家の田畑を開墾したが、後から奥さんの妹の婿に来た義理の弟が、この田の所有権を自分のものとして勝手に登記してしまったらしい。それで、

色々交渉したが、ラチがあかないので殺してやるとなったようだ。まあ、どちらかという酒の上のことなので、本気とは思えないが、そうかと言って放っておけば、実際に刃傷沙汰になりかねない。

結局、さらに酔いが回った中村さんの不平不満をじっくり聞いている内に、中村さんは酔いつぶれてしまい、一件落着。翌日中村さんに会ったが、何ごともなかったような顔をしていた。

この村では、このような争い事は頻繁に起こっているようだ。一つには、婿入り婚から嫁入り婚に変わりつつあり、財産相続の決まりがあやふやなままであることが原因しているようだ。また、土地の所有権を役所への登記とするという新しい形式に慣れていないせいもある。このような、所有権を巡って、兄弟姉妹間の争いが多い。また、アミス独特の恥の概念があり、それに起因した争いも見られる。浮気が原因と言うのも数例ある。いずれにせよ、人口規模にしてはケンカ沙汰が多い村だ。

私が来る数年前には、土地を巡る争いから、殺人にまで発展した事件もあったという。青山さんの話では、警察も来て留置されたが、親族が引き取りに行きすぐに釈放されたという。その後、例の親族会議が開かれ、加害者側が水牛一頭を賠償として支払って、落着いたという。警察などは一切これに介入しない方針だそうだ。

私はこの頃から、「純真素朴で欲がない」といういわゆる「原住民像」に疑問を抱くようになった。彼らだって、私たちと同じ様に欲もあれば嫉みもある。「原住民は純真素朴」というのは、一種の差別意識なのではないだろうか。

8月12日

ここ数日は、これまでの記録の整理に取り組んだ。色々ありすぎて頭の整理が必要だ。朝食の後、ウスイが2日ほどアヒナと花蓮に行ってくるから留守番していると言う。花蓮の天理教会に行ってくるという。

「そりゃあ、私もアヒナも天主教を信仰しているよ。だけど、天理教は祖先を拝んでもいいと言うからね。だから、ちょっと行って話を聞いてこよ

うと思うんだよ」というのが、ウスイの説明だった。ここ数年、天理教が台湾で布教活動をしていることは聞いていたが、こんな田舎まで入り込んでいるとは知らなかった。カトリックやプロテスタント各派は、1950年前後に宜湾で布教を開始しているので、今さら天理教が入り込めるとは思えなかったが、ウスイの言うように、カトリックやプロテスタントは祖先崇拝を禁じているのに対し、天理教は祖先崇拝を認めているため、元々祖先崇拝を生活の中心に置いていたアミスにとっては、親しみやすいのかも知れない。と言うことで、二人は出かけていき、おかげで記録整理の時間がたっぷりとれた。夕食は、青山さんとラバクが招いてくれたので問題なかった。

これは後日談だが、結局ウスイは天理教に入信した。かと言ってカトリックから離れたわけでもない。数年後、ウスイは奈良の天理教本山に研修と称して来日した。ところが実際には関西の建設現場の作業所の調理担当としてほぼ3ヶ月働いていて、研修は最後の2日くらいだったようだ。待遇などを聞くと、台湾の天理教会は、台湾人の出稼ぎ幹旋ルートになっていたようだ。結局ウスイが出稼ぎで得たお金は、天理教本山で神具などを購入させられて、一銭も残らなかったという。このことがあった後は、天理教を捨てることもなかったが、特に関係を持つともしていない。その頃、台湾の天理教が急激に衰退していったのは、このような事情があったのかも知れない。

更に後になるが、1996年になると、ウスイの家には下の写真のような祭壇が設置されていた。右側にはカトリックの十字架やマリア像、左には天理教の神具とカトリックの位牌が置かれている。カトリックの位牌は、宜湾の修道院で購入したものだが、中央上に赤い十字架はあるものの、道教の位牌の流用である。そこに祖先の霊、故人の名前などが記されている。この位牌を購入して安置する際には、カトリックの神父が来てミサをしたという。

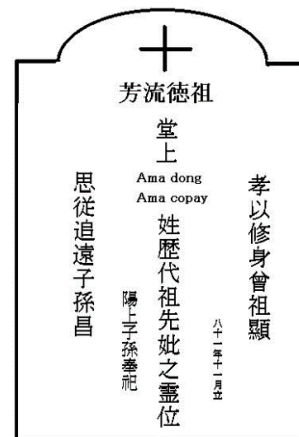
この祭壇は、どう見ても3つの宗教の寄せ集めである。ウスイにその点を尋ねると、別に問題ないという。「神様や祖先を大事にするのは同じよ」と、平気である。見方を変えると、カトリック、天理教、道教を、アミスの昔からの祖先崇拝に取り入れているだけなのである。



(ウスイ家の祭壇)



(道教形式のカトリックの位牌と天理教の神具)



(位牌の文面)

そう言えば、リボクが布教するときには、「イエスは、マラタオ(Maratao)、マリアはドゲ(Donge)のことだよ」と説明していた。マラタオはアミスの創造神・主神、ドゲは生命母神のことである。宗教についても、アミスはたかましいのである。

ウスイ夫婦が帰ってからは、いくつかの村を訪問して調査を続けたが、前半が盛りだくさんだったため、特段のこともなく、月末にはこの年の調査を終了した。

1977年 結婚式

宜湾に通うようになって、しばしばウスイに言われていた。

「サトル、結婚したら嫁さんを連れてきなさい。そして、ここで結婚式をきなさい。いくら日本で結婚式をやったって、こちらで結婚式をしなかったら誰も、サトルの嫁さんだと認めないでしょう。必ずここで結婚式をきなさい」

それも道理ではあるが、実は実際のアミスの結婚式を見たことがなかったので、私自身やってみたかったのだ。私がアミスの調査を始めた1970年代には、結婚式は漢民族の形式になっていたし、カトリックやプロテスタントの形式も浸透していたためである。もし、宜湾でアミス方式の結婚式をできれば、良い資料になると思っていた。

そこで、以下に私の結婚式の次第について記述しておこう。残念ながら、結婚式自体については私自身が主役であったため、自分ではほとんど記録する余裕がなかったので、リボクさんの著書を利用させていただく。出典は1989年 黄 貴潮 原著 黄 宣衛 編訳 「宜湾阿美族三個儀式活動的記録」 中央研究院民族学研究所 専刊丙種之二、中華民国である。

7月24日

1977年3月に結婚したので、ウスイと手紙でやりとりをして、宜湾での結婚式を収穫祭の後にするようになった。そこで妻の治美と大学院の後輩のKと沖縄経由で台湾に向かい、7月24日に宜湾に着いた。

いつものように、ウスイは大喜びして迎えてくれた。が、そこからが少々予定が狂った。家に入って一息つくと、ウスイが宣言した。

「ハルミ、あんたはまだ結婚していないのだから、サトルと一緒にの部屋に泊まるわけにはいかない。それにあんたが日本で誰の子どもだろうが、ここでは分らない。だから、あんたは青山さんの娘になることに決まっている」

そこへ、私たちの到着を聞きつけた青山さんと奥さんのパナイが顔を出した。

「さあ、ハルミ、一緒に行きましょう。まず、私の家に荷物を置いて、それからまたここへ戻れば良い」と、あつけにとられている治美を連れて行ってしまった。生まれて始めてきたアミスの村で、突然一人にされてしまった治美に同情はしたが、郷に入っては郷に従えである。治美も意外に平然としていたので、流れに任せることにした。

夕方、治美がパナイに連れられて手ぶらで戻ってきた。どうやら、青山さんの家に落ち着いたようだ。ただ、他の人が聞こえないところで「いったい、どうなってるの?」とは聞いてきた。いずれにせよその日から、朝になるとウスイの家で合流し、夕食に来る青山さんとパナイに連れられて青山さんの家に戻るといふ毎日が、結婚式終了まで続いた。

その夜は、歓迎会を兼ねて結婚式の打合せがあった。アヒナが遠洋漁業の船に乗って不在のため、私の父の代理は浜田さんに決まった。カヤカイ(kayakay: 橋=仲立ち人)はカワットと言う、人の良さそうなおじいさんで、奥さんも大人しそうな人だ。私のヴァケである、リワイやラバクなども参加した。主に話しを進めたのは青山さんである。台北からリボクも帰ってきて応援してくれた。

まずは日程である。少なくとも一週間はかかるから7月31日にしようということになった。その後、カトリックの教会での式をどうするかで少し揉めた。二人とも信者ではないし、アミスの結婚式で良いと主張して、納得してもらった。ただし、今回は婿入り婚ではなく嫁入り婚にするというのは、ウスイが譲らなかった。次は、どの範囲に連絡するかである。池上には当然連絡しなければならないが、双方の氏族にも全て連絡することになった。そうすると、ざっと300人近くの参加者があるという。こういうときは、漢民族式の卓料理で計算するようだ。1卓10人だから、30卓分用意することになった。

その後は、具体的な仕事の分担で、招待状の印刷、その配付、食材や酒の買い出し、炊事、商店やケータリング屋との渉外、炊事場や会場の設営など、様々な仕事の担当者が決められた。ともかく皆手慣れているせいか、早い。あっという間に段取りが決まった。後は、宴会。一応、日本から花嫁候補が新しく来たのだから、皆大喜び。いつもは控えめなパナイが、花嫁の母として張り切っている姿が微笑ましい。

さて、嫁入り婚であるなら、求婚に行かねばならないということになった。婿入り婚の時も、正式な求婚は男が女の家に行ってするという。それで、翌日はカヤカイのカワットの家に行き、打合せて26日の夕方7時に青山さんの家に行くことになった。

7月26日

青山さんの家に、求婚に行くと言っても、日本で結婚しているのだから実感が湧かない。形式的なものだろうと、リボクと一緒に出かけた。

行き慣れた青山さんの家に着くと、一家全員が揃っていた。結婚云々の話しはせずに、とりあえずは米酒とビンロウである。しばらく青山さんと世間話をしていると、カワット夫妻が打合せ通り現れた。そこで、また米酒の応酬があつてから、カワットが切り出した。



（右から二人目がカヤカイのカワット）



（左から次男のニカル、私、治美、パナイ）

「パナイとアサラット、今日、私が遊びに来てみると、ここにサトルが来ているではないか。サトルは、日本の大学にも行って見所のある青年だ。それにカパとしてもなかなかの働き者だと言うことは、皆も知っているだろう。幸いなことに、あなたの方の家にも、年頃の娘がいる。しかも日本の大学にも行っていた優秀な娘だ。二人は、ちょうど良い組合せではないか。二人を結婚させたらどうだろうか」

するとパナイが応えた。おしゃべりな青山さんは口を出さずにニヤニヤしている。

「確かに、サトルは収穫祭でもしっかりと働いていたし、教育もあるので、私の娘にはふさわしいと思います。サトルは婿として、申し分ないと私も思います。ただし、私の娘はどう思っているのでしょうか。娘の考えも聞いて見ねばなりません」

ということで、治美にアミ語で話しかけた。もちろん、治美には通じないので、リボクが通訳した。さすがに治美はきょとんとしていたが、私が合図を送るとそれなりに照れくさそうに答えた。

「はい、私もサトルと結婚したく思います」

それを、リボクが皆に通訳した。すると、カワットが言った。

「サトルは、先日私の所にウスイと来て、治美と結婚したいので、カヤカイをしてくれと私に頼んだ。だから、双方ともこの結婚を望んでいることになる。治美は、日本人であるが、親族は誰も来ていない。たった一人である。これでは、結婚が難しいから、アミスの習わしでパナイの家を本家としてパナイの一族となる。これで良いだろうか。そうすれば、二人を結婚させることに問題はないだろうか、パナイ」

「それで良いです。私は治美を本当の娘のように可愛く思っています。私にはサウマ（長女）の前に女の子を産んでいます。その子は1歳にもならずに天に召されてしまいました。だから、治美はその子の生まれかわりだと思っています」

「それでは、二人の結婚は決まったな。嬉しいことだ」と、カワットが言
って、一件落着かと思ったら、とんでもなかった。次男のニカルが、発言した。
彼は、私たちが着く前から飲んでいたらしく、かなり酔っていた。

「いや、私は反対だ。私の姉さんの治美を、サトルが本当に大切にするか
どうかわからない。結婚したら二人は日本に行ってしまう。そうなったら、姉
さんが幸せに暮らしているかどうか分からないではないか。確かにサトルは
カパとしても一人前だが、日本での生活までは分らない」と、かなり激しい口
調で言うのである。青山さんが、慌てて口をはさんだ。

「ニカル、心配するな。サトルを何年も見てきているが、真面目で優しい
性格だと言うことが分っている。これは確かなことだ。だから、治美を任せて
も大丈夫だ」

しかし、ニカルは納得しない。口角泡を飛ばして反対する。

「そうは言っても、サトルだって心変わりするかも知れない。そんな時、
遠い日本で一人きりの姉さんが可哀想だ」

求婚の真似事だったはずが、いつのまにか実の姉の結婚だと思い込みだ
したらしい。結局、毎年台湾に来て治美の幸せを確認させるからと言うこと
で、納得してもらった。そうなると、今度は、「兄貴、兄貴」と日本語で言っ
て肩を抱くようにして酒を勧める。ともかく純粹なのだ。

いずれにせよ、こうして私たちは無事結婚できることになった。

7月30日

今朝まで台風の影響で土砂降りと強風だったが、夜明け頃には通過した
らしく静かになった。ただし、ラジオのニュースでは、あちこちで道路が流さ
れているらしく、明日の結婚式に参加できない人も多いようだ。そこで急遽、
30卓を20卓に変更。

7時頃には大きなブタが運ばれてきた。結婚式用のブタだという。早速、
屠殺と解体が始まった。解体は男だけが参加するが、治美は食の研究家とい

うことで特別に参加が認められた。脚を縛られたブタを海岸まで運び、少し高いところにブタを仰向けに寝かせ、のど元から槍で一突き。血はバケツに貯めて、塩を加えてプディングにする。その後、内臓を手早く抜き取り、これもバケツに入れておく。その前に、胆嚢を採りだして胆汁を茶わんに絞り出し、米酒を加えて参加者で回し飲みにする。苦みが強いが、健康に良いと言って皆喜んで飲んでた。次は、肝臓を採りだし、海岸の石の上で刺し身に切り分け、そのまま参加者で食べる。この2つは屠殺参加者の特権だという。まだらな模様の肝臓は、いかにも危なそうだが、食べられないことはない。

それから、藁束に火を付け、ブタの毛を焼き、山刀や包丁で焦げた部分をこすり落とす。それが終わると、頭と尻尾の根元部分を切り取り、胴体だけにして縦に半身に分ける。半分は嫁方に贈るためのものだ。尻尾と生え際の周囲半径10cmほどは、一番年長のヴァケのために取っておく。ここが、一番美味しい部位だという。



（豚の毛を焼く）



（焦げた毛をこそぎ落とす）

これで、海岸での作業は終わり、治美はブタの半身と一緒に青山さんの家に帰っていった。私は残りの半身とウスイの家に戻ったが、すでに大鍋が2つ用意され、湯気が上がっていた。持ち帰ったブタは、すぐに何個かの塊に切り分けられ、鍋に放り込まれた。味付けは塩だけである。内臓と頭もそれぞれ別の鍋で煮られた。骨以外全部食べるのだ。ゆであがった肉や内臓は、細かく

切り分けられ、むしろや板の上に同じ量を積みあげていく。親族の一人ひとりに分配するためなのだ。生まれたばかりの赤ん坊から不在のものまで、親族全員に配分されるという。肉は貴重品なので、こういう祝い事や葬儀の時しか食べられなかったから、肉を公平に分配することによって、親族としてのまとまりを図っているのだろう。



（豚の解体）



（細かく切り分ける）



（親族一人毎に配分）



（一山が一人分）

午前中には、ブタの処理が終わり、一息ついていると、続々と招待客がやってきた。ほとんどがウスイ側の親族である。アヒナ側からは少ない。酒、タバコ、ビンロウが庭の中央に置かれ、それぞれ自由に飲んだり吸ったりしている。早速、私に酒を飲ませようとする連中も多い。女たちの多くは、あちこちで車座になってしゃがみ込み、おしゃべりに花を咲かせている。その内、嫁の顔を見せろと言われて探したが、見当たらない。ウスイもいない。ウスイと成功（南へ10kmほどにある人口千人ほどの地方都市）へ行ったらしい。そう言えば、ウスイが治美を成功のパンマ（パーマ）屋さんへ連れていくと言っていた。

夕方、治美が笑いをかみ殺したような顔をして帰ってきた。頭はかなりチリチリだ。話を聞くと、まずは成功の町のパンマ屋さんに行き、パーマをかけてもらった。パンマ屋のおばさんは日本語が分り、「あんたがアミスと結婚する日本人か。可哀想に」と涙を流していたという。説明するのも面倒なので「そうだ」と答えると、ますます同情してくれ、料金は要らないと取ってくれず、逆に金の指輪をもらったという。その後、青山さんの奥さんも合流し、衣料店へ連れていかれ、服を2着買ってもらったという。明日の結婚式で着るということだ。見せてもらったが、一着は腰のあたりまでスリットの入ったチャイナドレス。もう一着は歌手が着るようなド派手なドレス。日本ではどちらも着られるようなものではない。治美は、「こうなれば、何でもありでしょう」と、完全に楽しんでいるようだ。

夜になると、治美は青山さんの家に帰り、その後は集まって来た大勢の人たちとの宴会が深夜まで続いた。

7月31日

早朝3時前に、すでに皆起き出してきている。昨日あれだけ飲んで、よく平気なものだ。4時頃に、カプット（男子年齢階梯組織の同じ年齢組の者）の5人程がやってきた。皆、民族衣装を身につけている。土間に、木製の皿が置かれ、塩茹でした豚肉の塊と煮汁の丼が載せられ、米酒の入った甕も置かれている。これを皆で取り囲んで車座になって座り込み、嫁が来るまでのカプットの宴会が始まった。酒を注ぐのは、一つ上の組の代表のラバクだった。場合によっては婿の代わりに乾杯を引き受ける役でもある。小一時間ほど飲んでいると、カワットを先頭に、嫁側の親族が行列をつくって敷地に入ってきた。実は、そこから先の記憶がない。前夜からの酒で、完全に酔ってしまったようだ。したがって、以下はリボクさんの記録（前出）に頼ることにする。

リボクさんの記録によると、治美は青山家で嫁に行く儀式をカトリック式でやった後、親族と一緒にウスイの家に到着した。その後、同じカプットのピヌンの司会によって、新郎新婦が誓いの言葉を述べ、酒を酌み交わし、肉片を食べ合って、カプットとして結婚を認めて終わりだったそうだ。私のあいまいな記憶では、どちらかというに皆にからかわれただけだったように思うが、リボクさんの記録によると、なかなか厳粛な婚儀であったようだ。

なお、海岸アミスのやり方としては、婿入り婚の場合は、婿が生家を出る前にヴァケが祖霊に献酒儀礼をして、結婚の成立を告げ、嫁の家に着いたら今度は嫁のヴァケが嫁側の祖霊に献酒儀礼をして結婚の成立を報告したと言う。



（カブットの集合、右から二人目はカワット）



（カブットの宴会）



（カブットの結婚式、立っているのがラバク）

昼からは、いわゆる披露宴で、親戚縁者などが参加しての宴会。当時台湾で調査中だった日本人の文化人類学者2名も参加していたが、どちらも酔っ払って記録をとっていなかったそうだ。



(カブットとの記念写真)



(両家の記念写真：前列左から、カワット、私の父代理の浜田さん、
ウスイ、私、治美、パナイ、青山さん)

こうして、無事夫婦として認められたのだが、これには後日談がある。2004年に私が台湾調査に行ったおりに、台北市にある当時の台湾省立博物館に立ち寄ったところ、「台湾原住民族写真展」をやっていた。「ヘー」と思いながら見て回っていると、「阿美族式結婚式」と表記された写真があった(上の写真)。何と、私の結婚式の写真ではないか。解説には、「阿美族の伝統的な結婚式」と書いてある。慌てて事務所に飛び込み、担当者を引っばってきて、「これは阿美族の結婚式ではない。新郎は私だし、新婦は日本人だ」と主

張して、展示から外すように要求した。担当者は、写真と私の顔を見比べて、私だと納得はしてくれたが、「まあ、いいじゃあないですか」と笑っているばかり。後で、リボクさんに話を聞いたところ、博物館からアミスの結婚式の写真がないかと問い合わせがあったが、残っているアミスの結婚式の写真は、日本の植民地時代に、和服での結婚式の写真しかなく、私の結婚式の写真が唯一のアミス風の結婚式だったので、提供したという。まあ、一時的な展示だから諦めるしかなかった。

註

註1・台湾アミ

現在の台湾の人口はおよそ2200万人であるが、この中にインドネシア系先住民（台湾では原住民族）が40万人ほど含まれている。通常、このインドネシア系先住民は、アタヤル、サイセツ、ブヌン、ツォウ、ルカイ、アミ、パイワン、プユマ、ヤミの9種族に分類されている。

このインドネシア系先住民の内のアミ（'ami）は、先住民の中でももっとも人口が多く、東部海岸山脈の周辺に、南北に細長く分布している。アミは、地域により言語、文化、慣習に大きな差異が認められるため、さらに南勢アミ、秀姑巒アミ、海岸アミ、恒春アミ、卑南アミの5群に分類されている。ここで主に触れる宜湾は、海岸アミに属する集落で、戸数120戸余りである。

註2・本島人

台湾では、上に述べたインドネシア系先住民は少数民族であり、大半の住民は漢民族等大陸からの来住者である。この大陸系住民は、大きく分けて第二次世界大戦前に台湾に住んでいた人たちと、戦後台湾に渡ってきた人たちとに分類され、前者を本島人、後者を外省人という。

註3・集落の組織

アミスの集落は、ニヤロ（niyaro）と言うが、集落の行政・政治組織の特

徴として、首長制と男子年齢階梯組織がある。家や家族、親族組織は女性が中心だが、こちらは男性中心の組織である。

ニヤロには、首長が存在した。この首長は、アミの言葉ではカキタアン（kakitaan）、マトカンガイ（ma-tokang-ay）、バブロアイ（baburo-ay）、ミコモダイ（mi-komod-ay）、などと呼ばれていた。前の二つは、敵の首（アミスも一応首狩りの慣習があった）を乗せる棚や刺して晒しておく竹組などを意味しており、後者二つは演説を意味していた。おそらく、前者は本来首の祭祀を行う宗教的指導者を、後者は政治的指導者を意味していたのだろう。前者の場合、特定の家筋が世襲するが、後者は集落の男性たちによる選挙の場合も多くみられた。

戦後は、普通選挙法が導入され、地域の首長は成人男女の選挙で選ばれるようになったが、その首長とは別に、まだ旧来の首長は存続していて、この当時は「顧問」と呼ばれていた。

一方、男子年齢階梯組織は、フィナオラン（finaoran）と呼ばれ、日本の青年団の様な組織で、12,3歳位から60歳くらいまでの男子の参加が義務づけられていた。各ニヤロにはスビ（subi）と言われる集会所が設置されていて、特に青年たちは、そこに宿泊することになっていた。この組織は、集落全体の軍事・警察・司法組織でもあり、公共事業や、集落全体の収穫祭や、雨乞い、日乞いなどの宗教行事の中心でもあった。

この組織は、1970年代には、まだ本来の役割を果たしていたが、台湾が経済成長期を迎えると、都会への出稼ぎが増加し、実態が失われていった。

カイロンによると、トアポのカキタアンは、トアピからトアポに移住する際の指導者だった大高家が代々継いでいる。しかし、トアポが成立した頃は、すでに首狩りはほとんど行われなくなっていたので、首の祭祀家であるマトカンガイの家はなかったそうだ。陸安は、新しいために、カキタアンさえない。また、トアポのフィナオランも、漢民族との混住が進んでいるので、いまでは活動していないそうだ。

なお、清朝時代以降、日本の植民地時代までは、集落の首長のことを「頭

目」と表記していたが、戦後になって差別用語だと言うことで廃止された。しかし、1990年代後半になると、伝統文化であるということで「頭目」が原住民の意思で復活した。

註4・家の建築

1970年代のアミスは、家を新改築するときに、専門の業者を頼むことはほとんどなかった。この時も、コンクリートだけは業者に運んでもらっていたが、他はほとんど親族の協同作業でであった。家の新改築、葬儀、結婚、開墾は、親族が協同して行うことがいわばアミスの規範であって、参加できない場合は、現金や物品などの何等かを支払って償う。近所の人も参加するが、これは義務ではないので、欠席しても支払は必要ない。参加した親族や近所の人には、ハクハク（hakuhaku、おこわ）とシラオ（sidao、塩漬けの豚肉）、酒を提供する。それ以外の謝礼は必要ではない。このため、ミサロマ（misa-roma' h、家造り）は3月～4月、8月～9月の農閑期に行われる。

実際の家造りの2週間くらい前に、親族の中でも余裕のある家の男性だけでpa-buro'（矢竹取り）、次にパアレ（pa-are'、茅取り）、パワイ（pa-way、藤取り）が行われる。何れも家の建築に必要な資材である。柱にするような太い木は、古い家の古材を再利用することが多いが、最近は購入しているようだ。矢竹などがそろると、全親族を集めてパクロト（pa-kuroto'、建築前の親族会議）が行われ、仕事の分担、手順などが決められる。会議を仕切るのはその家の最年長のvake（広義の母方オジ）である（後に詳述する）。

次に、改築の場合はミタスタス（mi-tastas、古い家を壊す）から始まる。村の中で家が壊される日は、村中にパイシン（paisin、儀礼的休業）が課せられる。パイシンの時は、農作業をしては行けないとされている。しかし、狩りや魚取りなどについては規制がない。これは、家を壊すとその家の入口の鴨居の上、あるいは軒下に住んでいるその家の祖霊が居場所をなくして、その辺をうろつくからだという。病人のいる家や妊婦のいる家の人は、特にこの日は外出も控える。アミスは、他家の祖霊は悪霊であると信じているので、外を出歩いてそんな行き場をなくした他家の祖霊に出会ってついでにこられたりすると、病人の病状が悪化したり、妊婦は早産したり難産すると言われている。

ミタスタスが終わるとミサロマが始まり、屋根と壁ができるとイバヤン (i-bayan) という棟上げ式的なものがある。この時には、作業に参加した人たちに酒食が振る舞われる。その後、細部の仕上げが行われる。そして全てが終わるとパカウエ (pa-kawe'、落成式) が大々的に行われる。この時はチカワサイ (tsi-kawas-ay、呪医・祭司) が呼ばれ、独特の祈りの踊りと歌で、建築期間の間住む場所を失っていた祖霊たちを家に呼び戻してもらう。その後は、親族や手伝ってくれた近所の人たちなどを集めて祝宴が行われる。これで、家の建築は終了である。なお、ミタスタスとパカウエの前に、親族の男性たちがパ克蘭 (pa-kur-an、川狩り：様々な儀式の前に男性だけが集まり、川で魚やエビ、カニ、カエル、ウナギなどを獲る行事、男性のみで行うので狩猟と見なせる) をやることになっている。

註5・男子年齢階梯組織

男子年齢階梯組織はアミスのほぼ全域にみられる地域社会組織であり、首長制とともに地域政治の中核となっていた。男子年齢階梯組織は、12、3歳の少年から60歳前後の老人までが所属することが義務づけられているもので、パカロガイ (pa-karong-ay：準青年階級、12、3歳～15、6歳)、カパ (kapa'h：青年階級、17、8歳～42、3歳)、マトアサイ (ma-to'as-ay：老年組、44、5歳～61、2歳) に大別された。その分類の下に、3～7歳を一組としたいいくつかの年齢組があり、それぞれ組の名称をもっていた。この名称の付け方は、地域によって異なっており、パカロガイからカパに進級する時の事件に基づいて全く新しい固有の名称を命名される場合と、いくつかの名前が循環するもの、および固有の名称と循環する名称を併せ持つ場合があった。固有の名称を命名する例をあげると、日本が台湾を支配した時にkapa'hに進級した年齢組の名は、ra-dipon (diponは日本の意) であり、中華民国が台湾を統治した時に進級した年齢組の名は、ra-minkok (minkokは民国の意) である。

村には男子集会所 (subi) が1つもしくは複数あり、パカロガイ以上は、夜はここ集まり、宿泊することが義務づけられていた。集会所においては、年長者が若者たちに狩猟の仕方、共同作業の仕方、村の規範、神話、伝承、敵との戦い方などを教育し、訓練した。男子年齢階梯組織は、首長とママーノカパ (青年組頭) の指導の下に、村内の道路や灌漑水路の建設や補修、祭儀の執行、治安の維持、他村からの不法侵入の見張り、村の行政運営費用の徴収、村

の規範の背反者の処罰や罰金の徴収など、様々な公共的な仕事を行った。特に、収穫祭の執行は、現在でも重要な役割である。

戦後になって、徴兵制度や青年層の都会への流出によって、多くの地域で男子年齢階梯組織は崩壊してしまった。一部の地域では現在でも存続し続けているが、実質的にはほとんど機能しておらず、収穫祭の時などに登場する程度である。

下の表は、宜湾の年齢組の固有名は以下の通り（2006年に加筆）で、実に様々な名称があり、時代的背景を表すものもあって面白い。

年齢組名	由 来
ra-dennaw	宜湾の互助社に初めてコンピューター（電腦）が導入されたから
ra-pakacang	海岸に海蝕防止テトラ（pakacang）が置かれたから
ra-kayakay	南北の部落を結ぶ橋（kayakay）が、新しくできたから
ra-tengwa	村の一般家庭にも電話（tengwa）が引かれるようになったから
ra-arapo	アラブ諸国に出稼ぎに行った者がメンバーにいたから
ra-harac	haratsuは、鳥の巣の意味。pakarongayの時に鳥の巣を取ったのだろう
ra-teibo	村の川に新しく堤防が築かれた年（1975年）に、kapahに進級したから
ra-kokai	この年齢組の者が、遠洋漁業（＝航海）に行ったから
ra-sirac	siracは砂利のことだが、ずるいという意味もあり、この年齢組者がずる賢いから
ra-hoki	hokiとは保警の意味で、この年齢組の者がkapahに進級した年に、この村に沿岸警備隊（＝保警）の駐屯所が置かれたから
ra-sikan	sikanは志願のこと。この年齢組の者が志願兵になったから
ra-heitai	heitaiは兵隊のこと。この年齢組の者がkapahに進級した時、村に中華民国の兵隊が来たから
ra-okak	okakは骨の意味。この年齢組の者がpakarongayの時、収穫祭の共同漁撈の獲物のカエルやウナギを、持ち帰らずにこっそり食べたが、残っていた骨からばれた事に因む
ra-fatel	fatelは終わらないの意味。この年齢組の者がpakarongayを終えない内に結婚したから
ra-kome	komeは男根の意味。この年齢組の者の男根がヘチマの様に軟らかかったため
ra-minkok	minkokは民国（中華民国）の意味。この年齢組の者がkapahになった年に中華民国になった（1945年）から
ra-tili	pakarongayの時、上級者の弁当を山に運ぶ途中で盗み食いしたから
ra-anoh	anoは陰毛の意味。pakarongayの時にすでに陰毛が生えていたから

年齢組名	由 来
ra-toko	tokoはタニシの意味。pakarongayの時にカエルを採るよう命じられたのに、採りやすいタニシを採ってごまかしたから
ra-komao	この年齢組の者が、rakomao（木の名前）の陰で女と遊んでいたから
ra-cukcuk	cukcukはブツブツ言うこと。この年齢組の者はいつもブツブツ不平をいうから
ra-fulo'	fuloは星座の名前だが、何故この名前になったかは不明
ra-ga'ap	ga'apは皮が剥けているという意味。この年齢組の者が包茎ではなかったから（この村では包茎が正常とされる）
ra-abeh	abeは糠の意味だが、命名の由来不明
ra-kuyucu	kuyucuは少ないの意味。この年齢組の者は最初から人数が少なかったから
ra-fohat	fohatは女性の腰巻のこと。この年齢組の者が女性の腰巻をめくって悪戯したから
ra-taroi	taroiは突き付けるの意味。この年齢組の者が妻に嫉妬を焼いて、松明を突き付けたから
ra-sikeng	sikengは試験の意味だが、命名の由来不明
ra-lipong	lipongは日本の意味。日本の領台（1895年）にkapahに進級したためと思われる
ra-sakang	sakangは御馳走の意味だが、命名の由来不明
ra-cekl	ceklは突くの意味と思われるが、命名の由来不明
ra-erin	意味不明
ra-payak	payakは泣き虫の意味と思われるが、命名の由来不明
ra-tenus	意味不明
ra-aval	avalはエビの意味と思われるが、命名の由来不明

私のカブット（年齢組）の名前はラホキである。この名前の由来は、いくつかあるらしい。表向きは、この組がカパに進級した年に、宜湾の海岸に海岸警備隊の屯所が設置されたことに由来すると言われている。しかし、実際はこの海岸警備隊員の妻が、海岸で貝獲りをしていてしゃがんだために尻が丸見えになり、それをこの組の者2、3人で見物していたからだという。ラホキの名前が付けられる前は、ラパロと言う名を名乗っていたそうだ。パロは、檳榔樹の葉の付け根の皮のような部分で、日本の竹の皮の様に食器代わりにも使うものだが、これを敷いて娘と楽しんだことからこの名前を名乗っていたという。ところが、組の者が事故死したので、習慣に従い、死者の霊と縁を切るためにラクニスに改名したという。これは、娘にいつも引っかけ傷を付けられることからの名前だそうだ。いずれにせよ、かなりのワルが集まってい

る組らしい。

註6・コモン（首長）

アミスの村落には、それぞれ首長が存在しており、清朝時代、日本の植民地時代には、「頭目」という名称が用いられ、植民地行政上村落の代表者として認められていた。しかしアミスにあつては、その名称・役割は地域によって異なっていた。一つは北部のアミスに多く見られる政治・行政・軍事的首長と儀礼的首長が別々に存在している場合である。この場合、政治・行政・軍事的首長はコモドゥ（komod）、ミコモダイ（mi-komod-ay）などと呼ばれ、儀礼的首長はカキタアン（ka-kita-an）あるいはマトカンガイ（ma-tokang-ay）と称されていた。前者は馘首してきた首を載せる柵、後者は首を載せる三つ又状の竹組みの台のことである。コモドゥ、ミコモダイはいずれも演説を意味しており、頭目の重要な役割が演説であることを示している。カキタアンマトカンガイは、首柵あるいは首載せ台を有する特定の系統の一軒の家もしくは数軒の家を指すことから、首の祭司の系統を意味していると思われる。したがって、その地位は世襲的である。

他方、南部では政治的首長と祭司的首長の区別は明確ではない場合が多く、政治的首長にもカキタアンの語があてられる場合が大半である。この場合、首の祭司にはマトカンガイの語が当てられるケースもあるが、首の祭司は必ずしも一定しておらず、チカワサイ（tsi-kawas-ay：呪医・祭司）が首の祭祀を行うとする地域も多い。この場合の政治的首長の選出方法は男子年齢階梯組織上位者の互選が多いが、集落内での出自集団の勢力関係によっては、世襲制の場合もある。

世襲の場合は、その権威はかなり強力なものとなるが、互選制の場合はそれほど強い権威は認められておらず、重要な事柄についての決定権は長老たちの合議による。ただし、これも個人の力量に負うところが大きく、一定していない。任期は終身、もしくは高齢のために引退するまでとされている。

宜湾の場合、政治的首長はカキタアンと呼ばれ、42、3歳以上のマトアサイの互選によって選出される。初代のカキタアンは、カキタアン・パイヨ（karitan Paiyo）という人物で、宜湾の創設者として現在も記憶されている。

宜湾周辺では、戦後になってカキタアンあるいは頭目の名称は廃止され、1994年までは顧問の語が用いられていたが、原住民運動の影響から、現在では頭目の名称が復活している。

なお、顧問という名称は、海岸アミ以外では用いられず、頭目の語がそのまま継承されている地域も多い。しかし、頭目は首狩りや盗賊を連想させることから、反対する意見もある。

宜湾ではこの首長の役割は、男子年齢階梯組織の統率、公共的事業の指揮を執ることである。また、収穫祭の際に、演説を行うことも重要な役割である。

註7・カトリック教会の立場

宜湾には、1950年代後半に、カトリックやプロテスタントの長老教会などが相次いで布教に入った。当初は長老教に入信するアミスが多かったが、徐々にカトリックへの入信者が増加し、現在では村民の7割がカトリックとなっている。カトリックに入信した理由を聞くと、大半が「長老教はビンロウが嗜めないから」という返事が返ってくる。長老教は戒律が厳しく、酒、タバコ、ビンロウなどは禁止であるし、収穫祭も禁止である。もちろんアミスにとっては重要な、祖先を祀ることも禁止である。これに対してカトリックは、酒、タバコ、ビンロウに関しては、禁止どころか神父が好物なほどであるから自由である。また、収穫祭や祖先への祀りも特に禁止したりすることはないという。

後日談ではあるが、1979年にバチカンが地元宗教・文化の尊重を指示したことから、台湾カトリック教会も1995年に地元宗教・文化を尊重する方針を打ち出した。このため、アミスなどの原住民の儀礼なども復活することになったが、カトリック教会の主導の下に行われるなどの変化が生じた。アミスでは、祖先崇拜まで復活し、神父が位牌に魂を込めるミサや、一周忌、二周忌なども行うようになった。

補遺 1・アミスの母系制とその変遷過程

母系制という言葉は、私たちにはなじみのない言葉であるが、名前も、地位も、財産も、所属も、全て母のラインを通じて継承・相続されるような親族組織のことである。また、従来は婿入り婚が行われていた。ここでは、台湾のアミスの母系制の変化を見ていく上で、まずこの母系制について説明しておく。

1. 母系制とは

先に述べた台湾の原住民の内の1種族であるアミスは、台湾の東部海岸山脈の周辺に細長く分布しており、台湾の原住民9種族の内ではもともと人口が多く、おおよそ17万人以上といわれている。アミスは、かつては粟や陸稻を栽培していたが、今では水稻耕作を中心としている農耕民である。

このアミスの最大の特徴は、母系制親族組織をもっていることである。母系制という親族組織は、生まれた子供は母親の親族の一員とされ（母系出自）、財産は母から娘へと相続され（母系相続）、地位や役職は母方オジからオイへ、あるいは母から娘へと女性のラインを通じて継承され（母系継承）、結婚したら男性は嫁方の家に住む（妻方居住婚）、つまり婿入り婚という特徴をもっている。要するに親族や家族は女性を核として組織されているのである。

このような母系制社会は、インドネシアのミナンカバウ人、インドのナヤール族などが有名であるが、世界的にもそれほど多くはなく、また上に挙げた母系制の4つの要素、母系出自、母系相続、母系継承、妻方居住婚の全てを兼ね備えている社会はさらに少数である。

このような母系制社会では、父親と子は別々の親族集団に属している。アミスの感覚では、父親は他家の人であり、子供とは他人なのである。このため、父親は自分の子供については、権利もなければ決定権もない。子供の進学、結婚、就職、分家などの人生の重要な岐路の際には親族会議が開かれるのだが、そんな場合にも父親には、発言する権利が全くない。こういう親族会議での父親の役割は、集まった親族の人たちにお酒を注いだり、ビンロウやタ

バコを勧めたりという接待役程度である。

上述の父親と子供の関係が、もつともはつきり表れるのが、男性の死に際してである。アミスでは、婿に來た男性が重病になると、婿の生家に送り返してしまう。もし死んでしまっていたとしても、まだ生きていることにして送り返す。いずれにせよその婿が死んでしまえば、妻と子供は縁切りの儀礼を行い、死んだ者(夫、父)と自分たちは無関係であると主張する。なぜならば、アミスの宗教観念では、他家の祖先の霊は悪霊でしかないからである。

アミスでは、結婚しても所属する親族は変わらない。したがって父(夫)と子供(妻)は、所属する親族集団が異なっており、男性が死亡した場合は、彼の生家の祖霊となり、子供や妻にとっては他家の祖霊すなわち悪霊となるのである。

このため、男性が死亡した場合に葬儀を行い、後々まで祖先として祀るのは、その男性の生家の成員と子孫であり、妻や子供は一切関係をもたないのである。

このように述べてくると、アミスの父親と子供の関係は、いかにも冷えきったもののように思われるが、アミスの父親たちは、子供をとてても可愛がる。父親は、母親と同じ様に赤ん坊の世話も、子供の相手も嫌がらずにする。父親が赤ん坊を背負ってあやす姿は、アミスの村では珍しくもない光景である。

先にも述べたように、アミスは婿入り婚が建て前となっているが、婿入り先での夫の立場は、あまり恵まれているとは思われない。アミス社会での良き夫の基準とは、まじめで良く働き、嫁の家の財産を増やし、狩りや魚取りがうまくて、いつもたくさんの獲物を持ち帰り、家では無口であることとされている。確かにアミスの婿は良く働く。朝は皆が起きてくる前に野良仕事や狩り、漁にでかけていないと、怠け者の婿と見なされる。反対に、田畑を開墾したり、家を新築したりした婿は、自慢の種になる。かといって、嫁の家ではやはり婿でしかない。せつかく築いた財産や家についての相続権どころか、分与や相続についての発言権すらないのである。

また、妻の兄弟や母方オジが帰ってきた時は、まるで召使かのように接待に努めなければならないし、親族会議の時などは、人目に立たないように家の隅に控えている。さらに、妻とケンカしたり意見が合わなくなると、簡単に離婚されてしまう。妻が離婚したいと思ったら、夫の財産である蕃刀、寝ゴザ、わずかな衣服などを家の外に出しておくだけで良い。しかし、だからと言って、私たちの社会に比べてアミスの夫婦仲が取り立てて悪いこともないし、愛情が薄いわけでもない。また、離婚率が異常に高いわけでもない。さらに結婚している男女の姦通は、殺人と同様の重罪として扱われるなど、夫婦関係は厳正なものと考えられている。

上に述べたように、確かに婿入り先では夫の立場は非常に弱い。しかし、彼は自分の生家に帰ると、今度は母方オジとして、非常に強い権威を持つ。このような母方オジの強い権威は、多くの母系制社会の特徴となっている。

婿入り先の家では、借りてきた猫のように大人しい男性だが、ひとたび生家に帰ると人が変わったように威張り散らす。酒、タバコ、ビンロウは、好き放題に要求し、衣服でも、道具でも、欲しいものがあれば勝手気ままに持ち帰る。アミスでは、言うことをきかない子供を叱る時に、「ヴァケ（母方オジの事）が来るよ」と言って脅すほどである。

アミスでは、母方オジをヴァケ（vake）というが、この言葉は単に母の兄弟を指すだけでなく、母の母の兄弟など同じ母系親族集団から他の家に婿に行った男性全てを指す言葉である。また、ヴァケの息子、さらに息子の息子もヴァケとされている。したがって一軒の家には、何人ものヴァケがいることになる。ヴァケは、自分の家、自分の母系親族集団に対して、保護・監督・指導する義務と権利を持っており、彼をヴァケと呼ぶ人たちから尊敬され、恐れられる。先にも触れたように、個人の人生の重要な岐路においては、絶対的な決定権を持つのもヴァケである。結婚の時に、どんなに当人や両親が結婚を望んでも、ヴァケが反対すれば結婚は許されない。また、ヴァケ以外は死者の霊を祖霊の世界へ送ることができない。

このようなヴァケの強い権威は、アミスの祖先崇拜観念に基づいている。アミスでは、個人や家、一族の繁栄、不幸、病気や死、豊作か凶作か、狩猟や

漁撈の獲物の多さなど、人間生活のあらゆる面に、祖霊が影響を及ぼすと信じられている。この祖霊に対して、祈りを通じて強く働きかけることができるのがヴァケなのである。だからこそ、アミスはヴァケを敬い、大切にするのである。

さて、これまでアミスの母系制について述べてきたが、日本人や漢民族の文化との接触の中で大きく変化してきた。

アミスの伝統的な考え方では、婿入り婚が当たり前であり、嫁に行くような女は「おてんばな娘」とか「男のような女」と軽蔑されていた。ところが、日本の植民地になり、日本人との接触が深まると、支配者である日本人の多くが嫁入り婚を行っていることを知るようになる。しかも戦前の日本人であるから、男尊女卑の考え方が強く、家庭では権威のないアミスの男性にとっては、このような日本人の考え方は、いかにも素晴らしく思われたのである。しかし、日本の統治時代には、未だに伝統的な考え方が支配的であり、強い夫の立場への憧れがあっても、実際に嫁入り婚を行う例は、せいぜい学校の教員や村の有力者などの一部にしか見られなかった。

ところが、中華民国政府となって徴兵制が施行されると、急に嫁入り婚が増加するようになった。これは、徴兵に行った青年たちが、漢民族や他の原住民の青年たちと一緒に生活するなかで、自分たちアミスだけが婿入り婚であることに気付き、いかにも「野蛮」な風習であるかのように恥ずかしく思ったことも原因となっている。また徴兵期間中に、都会的な生活様式を覚え、自分たちの村に帰りたがらなくなることもある。そして徴兵の期間中に習得した、自動車の運転、機械修理、通信などの技術を生かせる都会へと流出することになる。そうなると、生活費は男が稼ぐことになり、結婚した場合は夫の職場のある都会へ妻が行って住む、つまり嫁入り婚となる訳である。

さらに、アミスの子供たちの中にも高校や大学などの高等教育を受けた青年たちが増えてくると、ますます「婿入り婚は恥ずかしい」という風潮が高まってくる。このような考え方は、自分の村に残った青年たちの間にも広まり、伝統的な婿入り婚はますます少なくなっていく。私が調査を始めた1970年の初めには、それでも20%前後は婿入り婚が行われていたが、1

975年以降は婿入り婚は一人娘などの特殊な場合以外は、全く見られなくなった。現在では、アミスでさえ、自分たちの社会にかつて母系制があったことなど忘れていくほどである。

2. クラスの離婚

婿入り婚から嫁入り婚への変化は、アミスの社会に大きな混乱を及ぼすこととなった。このような混乱は一時的なものであるから、滅多に見ることができない。私は幸運にも、その過渡期の混乱に立ち会うことができたので、ウスイの息子の離婚騒動を例として述べておきたい。

ウスイの長男のクラスは、ウスイの強い希望で台北市の師範大学（教育大学）に進学したが、家が貧しいために学資もままならず、生活費や学費のためのアルバイトに時間を取られ、結局は2年で退学してしまった。

しかし田舎から出てきたクラスにとって、一度覚えた都会生活の魅力は捨て難く、生来の社交性も手伝って、村へ帰る気にはなれなかったようだ。運良く当時の台湾は、高度経済成長期が始まったばかりであり、英語も日本語も話せるクラスは、商社などに喜んで迎えられ、台北でサラリーマンとして生活するようになった。やがてクラスは、同じ様に故郷を離れ、台北の美容院へ就職していたロゲというアミスの娘と親しくなり、結婚することになった。

クラスの母のウスイや母方オジたちは、ロゲが美容院という接客業に就いていることや、ロゲの村が遠距離にあつて、互いに知合いがいない事などから反対したが、クラスの強引な説得で、結局は賛成せざるを得なかった。母方オジも、かつてのような強い権威は認められないのである。

1979年の2月にクラスとロゲは結婚し、クラスとロゲは職場のある台北に戻り、クラスのアパートでの新婚生活を始めた。ここまでは、何も問題はなかった。

台北での新婚生活に入ったクラスとロゲは、仲睦まじい夫婦として友人仲間にも評判であった。1年後には男の子も生まれたが、ロゲの勤め先の経営者である独身の外省人（戦後中国大陸から逃れてきた中国人、戦前から台

湾にいる中国人を本省人と言い、長い間対立していた)の富豪がこの男の子を気に入り、成人後は養子にと望まれて養育費を出してくれることになった。漢民族にとって、自分の死後、祖先として供養してくれる子孫があることは、安心してあの世へ行くための絶対条件であり、この経営者のように独身で子孫がないことは、耐え難いことなのである。

クラスとロゲはまだ若く、将来たくさんの子供が生まれるだろうから、一人くらい養子にだしてもという気持ちと、経営者への遠慮があったためか、気楽にこの話を承諾した。

ところが、ウスイにとってはこの男の子は初孫であり、可愛くてならない。もともと水田も狭く、夫一人で充分管理できるせいもあって、孫が生まれてからはしばしば台北のクラスのアパートに遊びに来るようになっていた。それなのに、可愛い孫が養子に出されることになってしまったので面白くない。その上、養子先が言葉も通じない外省人(ウスイはアミ語と日本語しか話せず、養子先の外省人は中国語しか話せない)であることも、気に入らない。

日本でもそうだが、こういう場合は悪いのは自分の息子ではなく、嫁ということになる。そうなると、嫁のやることなすこと全てが気に障るようになる。

結婚した当時は、「クラスは良い嫁をもらった」と自慢していたウスイも、この頃になるともつばら嫁の悪口ばかり言うようになっていた。「いくら相手が金持ちでも、自分の子供を外省人にやるなんて、自分の子供が可愛くないに決っている」とか、「もともとパンマ屋(美容院のこと。パーマ屋が訛ってパンマ屋になった)なんかに勤めていたのだから、ロクな娘じゃない。その外省人とも、どんな関係だかわかったものじゃない」など、言いたい放題であった。

もう一つ問題は、ウスイがクラスの家の家計にまで口出しすることである。農業を生業として、婿入り婚を行っていた頃は、財産と言えば粟や米などの穀物のことであった。この穀物を管理するのは、その家の最年長の女性の役割であり、特に脱穀前の初めの付いた状態の米には、男性および他家の女性は一切関われなかった。また初倉には、男性や他家の女性は立ち入ることさ

え許されなかった。婿入り婚の時代には、家にいる女性は母とその娘たちであり、最年長の女性が家計を支配していても問題は生じなかった。

ところが、クラスの場合は嫁入り婚であり、他の家の女性であるロゲと一緒に住んでいる。しかもロゲも働いており、二人で働いて稼いだお金で生活しているのだから、ロゲにもお金を使う自由があるはずである。しかし、ウスイにとっては、家計を預かるのは、あくまでも最年長の女性たる自分であるべきだということになる。本来なら二人の給料は全てウスイが預かり、ウスイがどう使うかを決めるべきなのである。もちろん、クラスとロゲがそのような考えを認めるはずがない。そこでまた、嫁の悪口がはじまるのである。

一方のロゲにとっても、出身地も育ちも異なる女性と一緒に暮らすのは、初めての経験である。それまでは母や母の姉妹、自分の姉妹など、同じ様な育ち、考え方の女性としか暮らしたことがなかったし、結婚後はクラスと二人で気儘に暮らしていたのである。そこへ、ウスイが押しかけてきては、1カ月も2カ月も居着いてしまう。しかも、自分とクラスが家賃を出しているアパートであり、ウスイの食費や小遣いも面倒をみているのに、ウスイはまるで自分が主人かのような顔をする。一緒に暮らしてみると、食事の味付けや洗濯の仕方まで、生活の細かい部分でいろいろな違いが出てくる。仲の良い間はそれも気にならないが、ことごとに文句を言われるようになると、やはり我慢できなくなる。

まして、自分の稼いだお金の使い道にまで口出しされるなど、たとえ義理の母親であっても、認められるものではない。若いとはいっても、ロゲもアミスの女性であり、母方オジを敬い、大切にしろとは教えられて育ちはしたが、他家の女性を敬えとは教育されていない。そこで、ウスイに対しても遠慮なしに口答えするようになった。

このような問題は、何もクラス夫婦とウスイの間だけのことではない。嫁入り婚を行うようになったアミスの間では、農村でも都会でも、同じような嫁姑戦争が生じている。特に農村では、先に述べたように籾の状態の米に他家の女性が触れることはタブーであるため、実際に家事をする嫁は、穀物倉から籾を運び出したり、脱穀をしたりという作業から除外される。それで

いて姑や小姑は、「うちの嫁は、ろくに家事をしない」と文句をいうから、嫁も困ってしまう。また、米が主要な収入源であるアミスにとって、粳に触れられないということは、家計に嫁が関われないことにもなる。つまり粳を売って、日用品などを購入することもできないのである。また、その家の母方オジであつても、嫁にとっては他家の家の祖霊を祭る人であるから、別に尊敬したり恐れたりする必要はない。だから、つい扱いがぞんざいになり、それがまた嫁の悪口の種になる。

要するにアミスの人々、特に女性たちにとっては、嫁姑関係という関係は初めての経験であり、慣れていないのである。だから、他家の女性と一緒に暮らすことにとまどっているのである。

幸いな事にウスイの生活基盤は村にあったため、クラスの家からウスイの足が遠のくことでロゲとウスイの嫁姑戦争は小康状態が続き、2年が過ぎた。

さて、クラスにはカツアウ、ブタルとフラウという弟と、パナイという妹がいた。カツアウは、20歳前から漁船に乗り組み、すでに婿にでていた。ブタルは商船学校に進み、高級船員を目指したが、先天的に船酔いする体質であつたため、商社に就職した。末の弟は勉強嫌いなため、中学を卒業すると、大工になろうと台北に出て、建築会社に就職した。妹は、看護婦の見習などをしてしたが、音楽好きなことから芸能社に入り、女性だけのバンドを組み、日本や東南アジアに巡業にでかけるようになっていた。

台北に出てきた末の弟のフラウは、休みの日にはしばしばクラスのアパートへ遊びに来て、ロゲにもよくなついていた。ところが、1981年夏に、フラウの乗ったオートバイが、信号を無視して交差点に飛び込んできた大型トラックと衝突し、フラウは即死してしまった。まだ19歳になったばかりであつた。フラウは末っ子であり、ウスイはもとより皆から可愛がられていたから、家族の悲しみもひとしおであつた。

これは余談だが、フラウの姉のパナイは、当時巡業で日本の草津温泉のホテルに来ていた。フラウが死んだ直後、東京に住んでいた私の所へウスイから電話がかかった。「すぐに草津へ行つて、パナイについていて欲しい」と

いうのである。フラウの霊が、パナイの魂を引っ張りるかも知れないから、守って欲しいというのだ。兄弟は将来母方オジとして、姉妹の家を守るとされていることから、兄弟の霊は姉妹の霊よりも強いと信じられている。だから兄弟の死は、仲の良かった姉妹にとって危険なのだという。私はクラスの弟として位置付けられていたので、フラウの霊からパナイを守る力があるというわけである。フラウの死は、パナイが郷里に帰り、母方オジたちがそろってパナイの霊を守れるような状態になって初めて告げられた。

フラウの遺体は、郷里の村に運ばれ、そこで葬儀をし埋葬された。ところが、こんな時に日本であれば一番活躍するはずのロゲは、葬儀にも顔を見せず、クラスの村にも帰らなかった。クラスの一族、特に母親のウスイの非難がロゲに集中したのは言うまでもない。勿論クラスは、何度も台北に残るロゲに連絡した。しかしロゲは、様々な口実を設けてはクラスの村に行くことを断り続けた。それどころか、葬儀が終わり、クラスが台北のアパートに戻って見ると、ロゲは子供を連れて友人の家に泊まりに行ったままであった。クラスが何度もアパートに戻る様に説得したが、どうしても嫌がる。

「怖い」というのが、その理由である。

ロゲが「怖い」というのは、フラウの霊が怖いのである。アミスでは、他家の祖霊は悪霊であると信じられている。つまりロゲにとって、フラウの霊は悪霊でしかないのである。だからロゲは、「怖い」というのである。

これが自分の村にいて、悪霊から守ってくれる力を持つ、母方オジや兄弟がそばにいるならばそれほど恐くはない。しかし、クラスと子供と3人だけで台北で生活している今は、身近に悪霊から守ってくれる人はいない。しかもフラウは、生前毎週のように自分たちのアパートに遊びに来ていた。だから、これからもフラウの霊はしばしば自分たちの所へ遊びにくるに違いない。そうなれば、フラウの霊は自分にとっては他家の祖霊、つまり悪霊なのであるから、きっと自分は病気になり、悪くすれば死んでしまうに違いない。クラスに嫁いだといっても、子供は母である自分の家のメンバーであるという母系的な考え方からすれば、子供にとってもフラウの霊は悪霊なのだから、子供にも害が及ぶだろう。だから、とてもクラスのアパートに住むことはで

きない。これがロゲの言い分であった。

しかも、フラウの死に方も良くない。アミスでは、死に方によって死を、「祖霊となる死」と「未成熟な死」の2つに分類している。「祖霊となる死」は、自分の生まれた家で、病気や老衰による穏やかな死で、死後は祖霊として子孫を慈しみ、守護してくれるようになる。これに対して「未成熟な死」は、自殺、戦死、事故死、殺人による死などの急激な死であり、死後は祖霊となれず、悪霊としてあたりをうろつく。フラウの死は事故死であるから、当然悪霊となるのである。

他家の祖霊はただでさえ悪霊なのに、事故死であるからよけいに悪霊であるに違いない。ロゲにとって、これは耐えられない恐ろしさなのである。

ロゲは当時30歳になったばかりの若さであり、中学までの教育もあり、しかもロゲの家族は皆キリスト教徒で、ロゲ自身小学校の頃から教会に通っていた。それにも関わらず、このような場合には、伝統的なアミスの考え方から、どうしても抜け出ることができないのである。

クラスは何度も説得に努めた。フラウの霊が来ないように、他のアパートへ引越しもした。ロゲ自身、クラスのもとへ戻りたいと言ってもいた。しかし、いざとなるとどうしてもクラスの家には入れなかった。

フラウの死後、半年近くもこんな状態が続いたが、結局二人は離婚することになった。

もちろん離婚の直接の原因は、フラウの死であったが、それ以前に、姑との仲の悪さも原因していたのだろう。フラウの悪霊というのは、きっかけに過ぎないと思われる。

子供はロゲが引き取った。嫁入り婚であっても、子供は母の親族のメンバーであるという考え方には、だれも疑問すら持たず、問題にさえされなかった。

クラスとロゲの離婚は、伝統的考え方と新しい慣習との混乱によって生じた悲劇である。もし、昔のように婿入り婚であったならば、このような結果とはならなかっただろう。また、自分たちの村で暮らしていれば、ロゲもこれ

ほどフラウの霊を恐れることもなかったであろう。教育を受け、キリスト教徒となり、都会でどんなに現代的な生活を送っていようと、幼い頃から培われた考え方は変えられないのである。

クラスの離婚は、他民族との接触の過程に生じた文化的な葛藤の一つの例である。婿入り婚から嫁入り婚へと変化しても、アミスとしての伝統的な考え方、価値観はまだ変化しきっていなかったのである。嫁姑の問題についても、初めての経験ということもあるが、最年長の女性が家計を支配するという伝統的考え方が変わらないことが、問題を複雑にしている。キリスト教や仏教を信仰しながらも、伝統的な祖霊観、悪霊観から抜け出せないままである。子供の所属も、母方の親族への所属のままである。結婚式の形式も、キリスト教式、アミス式で行われ、婚資も漢民族の真似をしながら、アミスの伝統的なものも残している。

清、日本、中華民国と支配者が変わり、アミスも日々変化している。しかし、全てが一度に変わることはできない。長年培われてきたアミスの伝統的考え方、価値観は根強く残っており、それが様々な問題の原因となっているのである。

とは言え、クラスの子供の時代、さらに孫の時代になれば、このようなアミスの伝統的な考え方も、全く失われてしまうと考えられる。クラスの離婚は、そんなアミスの変化の過渡期の出来事なのである。

補遺 2 ・ 父の分骨

1988年1月に父が亡くなった後、母から「台湾のシャクナゲの咲く丘に骨を埋めて欲しい」と、父が言っていたと聞かされた。父も母も花好きだったので、台湾にシャクナゲの咲く場所がある話しはしたと思うが、そこに骨を埋めたがるような父ではないとは思った。それでも、母がそれで満足するならば良からうと思ったのがそもそもの始まりだった。

その年の春、母が池上へ行ってみたいというので案内した。アミスも死者が生前訪れた場所を遺族が訪問するミツフォン（mi-tsufong）という慣習があるので、むしろ歓迎してくれた。その際、池上へ行つてシャクナゲの咲く丘

はないかと尋ねたが、誰も知らない。台湾大学の知人や、あちこちの知り合いにも聞いて見たが、情報が集まらない。その内、台湾大学の知人が中心になり、一大捜査が展開され始めた。シャクナゲは、台湾では高地にしか咲かないということで、山岳地帯に居住するブヌン、ツオウの地域であろうということになり、父の書き残した資料から調査行程を分析し、そのルート沿いにシャクナゲ探しは様々な人や役所に依頼され、その年の6月になって、遂にその場所が特定された。特定されたのは良いが、最寄りの町から徒歩で一日以上かかる山奥にあるという。これでは、母を連れて行くわけにはいかない。そこで、金太郎さんが知恵を出してくれた。

「墓は、池上の大高正一の墓の傍に作れば良い。二人は仲が良い兄弟だったから、あの世でまた飲めるだろう。シャクナゲは、その周りに植えれば良い。山奥では、埋めつばなしになっては、墓参りもできないだろう」と、いうことで池上の金太郎さんの地所に、墓を建てさせてもらうことにした。

折しも台湾では、土地不足から従来の墓地の建設が制限されていた。墓地ばかり増えて土地がなくなるので、納骨堂に一括して収納するようにと言う政府の方針が示されていた。とは言え、金太郎さんの土地は、耕作地のそばにあり、規制を免れそうであった。

こうして、その年の9月に、台湾で父の追悼式と埋葬（分骨、持ち運びやすいように、マッチ箱程度の量）を行うことになった。これが、また大騒ぎである。確かに、現在の台湾大学（旧台北帝国大学）の一期生でもあり、長年台湾で調査してきたので友人、知人、弟子なども大勢いる。日本からも弟子たちが大挙して参加した。ただし、こちらはかなり野次馬根性丸見えだが、日時と場所さえ伝えれば勝手に来てくれるので手間はかからない。その代り、私は母、姉、妻子、友人たちを引率せねばならないので、それなりに大変だった。

1988年9月10日に台北に到着し、台湾側と打合せをした。まずは翌日の台北での追悼会だそう。ここら辺は、先輩を大切にする漢民族の流儀に従うことにした。日本から来るはずの専門家たちは、これにはほとんど参加しないという。漢民族の宴会には興味を惹かれなかったのだろう。私も、そうしたいところだが、一応喪主だから逃げられない。

翌日は、朝7時の鉄道で池上へ向った。昔のように、バスを乗り継いで二

日がかりで行かずに済むので楽だ。昼過ぎには池上に着いた。駅には、金太郎さんたちが迎えに来てくれていた。トラックだの、タクシーだのの寄せ集めだ。全員は金太郎さんの家に泊まれないので、母と私の家族以外は旅社（旅館）に泊まってもらった。池上は、都会の方ではあるが、宿泊施設はこの旅館一軒しかない。他の日本の参加者や台湾の参加者はどうするのだろう。調査の専門家ばかりだから、なんとかするだろうと気にしないことにした。

着くと早速いつもの宴会。娘（8歳）はこれが2回目のアミス訪問なので、前に遊んだ金太郎さんの孫たちと早速遊びはじめた。前もそうだったが、全く言葉が通じないのに、気にもせずに遊んでいる。息子（5歳）は初めてなのでかなりとまどった様子だったが、ネコがいるのに気づくと、ネコを相手に遊びはじめた。「みんな、何を言ってるのか分かんないのに、お姉ちゃんは平気で遊んでいる。同じ言葉がわからないのなら、ネコも同じだから」というのが、彼の言い分だった。その内、夕立が来て土砂降りになったが、子どもたちは気にもせずにびしょ濡れになった外で遊んでいる。金太郎さんの孫が、息子と娘に一人ずつピッタリと張り付いてくれている。そこら辺の気配りは、心配ない。この子たちが、次の世代として繋いでいくことになるだろう。



（息子お気に入りのネコ）



（子ともたち）

私は、やってきた墓石屋さんと打合せ。すでに土台はできており、後は墓碑銘を彫ってもらって据え付けるだけになっている。ただし、個人の墓が禁止されているので、そこには記念品だけを入れ、骨は別に埋めることになった。そのための印の石をサービスでつけてもらうことになった。

台北で預かってきた墓碑銘を渡すと、墓石屋さんも不服そうだった。揮毫してくれたのは、書道家としても有名な歴史学者の陳 奇祿先生だっ

たが、この先生も墓碑銘が気に入らないと散々ごねたそうだ。「動物や体の部分を墓碑銘にするのは良くない」とのことだ。墓石屋さんと同じ事を言う。

しかし、「馬淵 東一」の「馬」と「東」を取って父が望んだ墓碑銘なので、しかたない。陳先生は、「先生囑書之句」と入れて、自分が考えた墓碑銘ではないことを主張することで納得してくれた。墓石屋さんも、結局は嫌々ながら納得してくれた。明日の昼過ぎには設置しておくというから、仕事の速さは日本と大違いだ。

夜は、日本からの参加者もちらほらと到着し、金太郎さん一族や愛子さん一族も集まり、

100人規模の大宴会。宜湾からも、ウスイ、アヒナ、リボク、青山さん夫婦が駆けつけてくれた。日本でもそうだが、臨終直後ではないので、どちらかというとお祭りムードの方が強くなる。子どもたちは勝手に何処かへ行って遊んでいるようだ。



(墓碑)



(分骨碑)

翌日は、朝から埋葬式の準備。金太郎さんの次男のウビン夫婦は道教なので、その方式でやることになった。10時頃には墓石屋さんが来て、設置が終わったと報告してくれたので、トラックだの、オートバイだの、自転車だのに乗って墓地へ向った。池上の公共墓地の外れの丘の麓に、大高正一さんの

立派な墓があり、その横手を切り拓いて20坪ほどの墓地が作られており、真新しい立派な墓が建っていた。



(埋葬式後の記念写真)

そのかたわらに小さな穴を掘り、母に父の遺骨を埋めさせ、分骨碑を置いた。その後は、道教式に線香を上げ、餅や肉、魚、果物などを供え、紙銭、紙財を盛大に燃やし、米酒を注ぎ、タバコを供えなどして埋葬式は終了。その後、お供え物を皆で食べて酒を飲み、ここはお開き。ところがこれで終わりではない。アミス式に、儀礼の後のパ克蘭（pakurang：儀礼的川狩り）も必要だ。そのため、いったん金太郎家に帰ってから、一時間ほど離れた秀姑巒溪の支流の上流に向った。夏なのでかなりの激流だが、ウビンがしっかりした足取りで流れに分け入り、投網で魚を獲ってくれた。それに埋葬式で余った食べ物を加えて、石がゴロゴロしている河原で会食。これで、埋葬式は全部終了。



(河原でのパ克蘭)



(イラオと子どもたち)

それにしても、この間私は参加者の相手などで忙しく、子どもの世話を
みる暇が無かったが、金太郎さんの養女の信子さんの息子イラオ（私の名を
継いだというが、どうだろうか）が、徹底的に見守ってくれていた。子どもた
ちも「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と懐いて信頼しきっていた。彼も、後になっ
て日本にやって来ることになる。



（1988年の埋葬式後の金太郎家での記念写真）

こうして、無事に父の遺言を果たし、母も安心した様子だった。その後、
母が亡くなったときに、姉が父の台湾の墓にも分骨しろと強硬に主張するの
で、分骨碑のそばに埋葬した。また、大高正一さんの墓は、その後政府の方針
に従って共同納骨堂に移したため廃棄されたが、父の墓碑はそのままになっ
て現存している。世話をしてくれているのは、金太郎さんの息子たちである。
毎年春の清明節（墓参り）には、一族で詣でてくれている。私も可能な限り墓
参りに行っているが、北海道在住では、長崎県平戸市と台湾に墓があるのは
少々キツイ。それと、墓参りの費用など、何度言っても受けとってくれない。

「馬淵東一は、私たちのヴァケでしょう」と言うのが、その理由である。
そして、私はもちろん、金太郎さんの息子さんたちも歳を取ってきた。最近で
は、清明節の墓参りは、金太郎さんの孫たちが中心となっているようだ。私
も、何回か息子を墓参りに同行させている。今では、シャクナゲの木も何本か
植えられ、父が好きだったと言うことで、コーヒーの木まで植えられている。

昨年、ショウウンから報せがあった。父の墓が、池上郷の史跡として指定されたというのである。日本人と池上との交流の記念碑だということだった。



（2015年の墓参風景：若者中心）

そこで、やはり最初の頃の疑問に立ち返る。日本は台湾を植民地として支配し、搾取してきた。実際、朝鮮については、支配の経費と収入では最後まで赤字だったが、台湾ではわずか10年で黒字経営になっている。ということは、しっかり搾取しているはずである。それにも関わらず、台湾の人たちは、どうしてこれほど日本人に優しいのだろう。理論的には統治様式の違いや、出先機関の人材の相違などの説明は可能だけれど、それを越えた優しさがある。しかし、理屈どうでも良いのではないだろうか。素直によろこばよいのではないだろうか。

終わりに

台湾へは、ほぼ毎年通い続けた。たいがい、春と夏の2回行って、1ヶ月か2ヶ月滞在するのが常だった。通い始めて50年になる計算だ。

その間、学生、友人、家族など、おそらく200人近い人を池上や宜湾に案内した。アミスの素晴らしさを知ってもらいたいというのが、本音の部分だった。



(金太郎さん)

一方、1990年代になると、台湾からの海外渡航も自由になり、金太郎さん夫妻、ウスイたちも、何度か日本にやって来た。金太郎さんの子どもたち一家も、観光にやって来た。金太郎さんの長男の娘のショウウンは、日本語の勉強をしたいと、

3ヶ月我が家から日本語学校に通ったこともある。彼女は、私を「看パパ」と呼ぶ。養い親のことだ。

前記の父の葬儀の後も、私の子どもたちも何回か台湾に行っている。1935年に始まった交流は、3代目から4代目へと受け継がれつつある。

とは言え、金太郎さん、青山さん、アヒナ、リボクなど、多くの方々がすでに鬼籍に入ってしまった。池上は、若い世代のアミス、漢族等が協力し、文化と自然豊かな観光地、保養地としてアジア圏でも有名になりつつある。ショウウンは、その仕掛け人の一人である。池上で秋口に開かれる芸術祭がある。池を背景に、水田の中に舞台を設置し、アミスの民族舞踏や歌ばかりではなく、漢民族の伝統的な歌舞や、最新の流行歌手まで登場する。私は、そこでアミスの古い歌を唱えたいとショウウンに注文している。私が唱う歌は、すでに老人しか知らない歌になっているのだ。昔、「最後のモヒカン族」という小説があったが、どうやら私が「最後のアミス」になるかも知れない。いや、やはり「最後のアミス」は、金太郎さんだろう。

(補遺は2021年1月にまとめたもの)